

災害に対する心得

ミネルバ・アギレラ(女)メキシコ
神戸大学
(日本語訳:マルシア 河野)

私は日本に来る前に、日本で時々地震が起こることを知っていましたが、皆は、関西地域は安全で、地震のないところですから、私は全然心配していませんでした。

しかし、95年1月17日に、神戸で地震が起こりました。あの日、ゴロゴロ（爆発、轟きたいな）といった音に起こされ、住んでいるレジデンスはすごく揺れていました。タンス、部屋にあったもの、全部落下し、ベッドもすごく揺れて、とても恐かったです。あの時、暗かったので、何も見えずに、「地震だ」と思いました。レジデンスはポートアイランドにあった。そこは人工島で、「絶対に沈む」と思いました。

私は自分の部屋から出て、同じ5階に住んでいる女の人たちと会いました。しかし、揺れは続き、警報もなっていた。皆、走って階段を降りて外へ出ました。

時間がすぎて、まだ外にいる間に、最初のニュースを聞きました。あの様にひどい状況になっていると信じられませんでした。それで、レジデンスに戻り、ニュースをテレビで見ながら、私は前より、ますます恐くなりました。死んだ人の数が増えていきました。テレビで、倒れた家や建物、火事…を見ました。一日中、何回も余震が起き、全然気が緩みませんでした。長い一日でした。

次の日、水、ガスと食べ物もなくなりました。しかし、状況に関する情報執はいつもテレビで見えたので、気持ちか落ちつき、どうすればいいのかを決めることができました。

今、あの時のことを思い出すと、注目してほしいポイントが多数あります。もし、いつか似たような災害が起こったら、多分それが役に立つと思います。

*タンス、重い家具を置く場所を決めることが大事であり、地震のような災害が起こった場合は、家具で身を傷付けないように設置した方がいいと思います。

*パスポート、IDカード、大事な書類などを見つけやすいところ、またはとりやすいところへ置いておいた方がいいと思います。

*住んでいる所の非常口と安全なアクセスはどこにあるのかを確かめる必要があると思います。

*災害が起こったら、パニック状態にならないようにしましょう。

*部屋を出る前に、よく床を見て、われている物(ガラスなど)でけがをしないようにしましょう。

*出来れば、すぐ家族、友達、大学などに連絡することは大事です(留学生の場合は、国にいる家族と大使館にすぐ電話をした方がいい)。彼らに状況と連絡先を知らせること。

*災害が起こってからは、テレビなどでニュース、情報などを聞き続けて、現状と状況を把握し、指示を待ってください。

*近くにいる人々を手伝う（助ける）ことも大事であると思います。

阪神大震災－“新入”外国人の回想録

チャールズ・アカユリ（男） ガーナ
神戸大学
（日本語訳：田中志保）

今日、4月17日はあの阪神大震災がかつての美しく、時には、世界でも最先端技術都市と称された神戸とその周辺地域を襲ったの日から、ちょうど3カ月目に当たる。

今なお避難所で生活している人々もいる中、それでもたいはいの人々は次第にもとの日常生活へ戻りつつあり、地震での辛い出来事を全て過去の事としてがんばろうとしている。

だから、今回、地震のことについて書くのは無神経なようかもしれない。特に、人々が何とか生きる希望を見出そうとしている時だけに。しかしながら、このフォーラム通じて、私はあの数日の自分の体験を仲間の学生諸君と共有する事ができ、我々が留学生としてどのような体験をしたのかを知ってもらえたらと思っている。

私は、1994年12月20日に神戸にやって来た。冬の初めであった。私がアフリカを離れたのは、これがはじめてである。私はポートアイランドにある神戸大学留学生会館の一室を得た。ちなみに、当時は私は日本語を全く理解出来ず、大学との往復以外は、ほとんど右も左も分からない状態だった。そしてなんといっても寒さには参った。

地震が襲ったのは、私が日本に来てまだ一ヶ月にもならない頃だった。この運命の1995年1月17日の早朝、ゴーッというものすごい轟音と共に、部屋中の全てが上下左右に激しく揺れ、次いで、皿やコップ、ガラス容器などが全部落ちて、部屋中いたところで割れて飛び散る音がし、私は目を覚ました。

最初私は、聖書に予言されているように世界の終わりが来たのかと思ったのだが、しかし、これは聖書にあるのとはちょっと様子が違っていた。（テサロニケ人への第一の手紙、5；14－17）それで私は夢を見ているのだと思ったのだが、思い切って目を開いてみたとき、これは現実であり、そして地震なのだという事にやっと気がついた。もちろん地質学の講義で、私は日本が地球上の地震多発地帯にあることは知っていたが、まさか神戸ではないだろうと思っていたのだ。でも、そうではなかったのだ。阪神大震災、――この、都市を破壊し、5000人以上の死者と数百万とはいかないものの、無数の負傷者を出した大惨事はそう呼称された。私は歴史の刻まれる瞬間を見た。まさに突然に始まり、突然に全てが止まった。激しい振動と轟音。そして全てが止んだ。それからが、地獄だ。火災警報が鳴り、人々が群がって、階段を駆け下りていく足音が聞こえた。全く衝動的に皆の行動につられて、私もほとんど裸足のまま、彼らにまじりって駆け下り、建物の外へ出た。誰かが途中、割れガラスで切ったのを覚えている。「神様!」と、言う叫びがした。外に出た時は、私はひたすらガーナ人の友人を探すことを思っていた。

我々が出ていった時には、すでに路上に人々は集まっていて、そしてその数はますますふくれあがり、すぐそばの公園まであふれだしていた。外は本当に寒く、私は文字通り、足の先まで凍えていた。余震がしばしば続いていたので、あえて建物の中へ戻ろうとは思わなかった。人々はむしろ建物の側を避けて、公園の中へと移動した。だ

から、私も氷点下の気温にガタガタ震えてはいたのだが、人々と共に日が暮れるまでは公園の中に居なければならなかったのだ。

寮の損傷は多大なものだったが、それでも神戸の他の所に比べれば、まだまだ大したことなかったようだ。しかしながら我々が不安にかられたのは、電気だけはどうか通じていたが、水道とガスとが寸断されていることだった。我々はニュースを聞くために全員テレビの周りに集まり、この時初めて、地震のニュースを聞いたのであった。

出ていく人達が見え始めた。ポートアイランドと本土とをつなぐ橋を車で渡ることは出来なかったが、歩いてなら渡れるという話が伝わり、何人かの寮生は出ていくことにした。夕方までには、三宮の上空が煙の幕を引いたようになっているのが見え、多くの者は恐ろしさに震えた。食糧も水もなかったのだが、我々は、わずかな水と飲み物を出来る限り分け合い、テレビを取り囲んで最新のニュースを待った。その夜は、我々はロビーか図書室かに分かれて、全員1階で寝た。そして、こんな噂が出始めた。「ポートアイランドが沈んでいる。もうすでに3m沈んでいるんだ。」と、いうのだ。この噂は、多くの人々の心を震え上がらせ、慌てさせ、今までは出ていく気のなかった人達の気持ちまでも変えさせたのである。2日目が終わる頃には、4分の3以上の寮生が去っていった。しばらく

くは、苦しい状況が続いた。時々、給水車が現れ、そこには順番を待つ（忍耐強く？）人々の長い列が見られた。

入浴は贅沢だ。手にはいる水は飲料水用と、トイレを流すための水にとっておかなければならない。炊事も出来ないで、我々は、インスタントヌードルや果物、それから支援物資で届けられた物を食べて過ごさなければならなかった。そして、また今度は、こんな噂が流れた。「相談主事の先生も家族を連れて、すでに寮から出ていった。我々も全員出ていった方がよい。」というのである。しかし、この噂は、管理人が掲示板に貼り紙しているところを見た者がおり、すぐ立ち消えになった。それから、さらに、「フルムーン・シンдрローム」という現象が現れた。人々は、次の満月には、もっとマグニチュードの大きな地震があると噂し、これには、さらに多くの生徒が怯えてしまい、去っていった。時には、夜に逃げ出す者もあった。

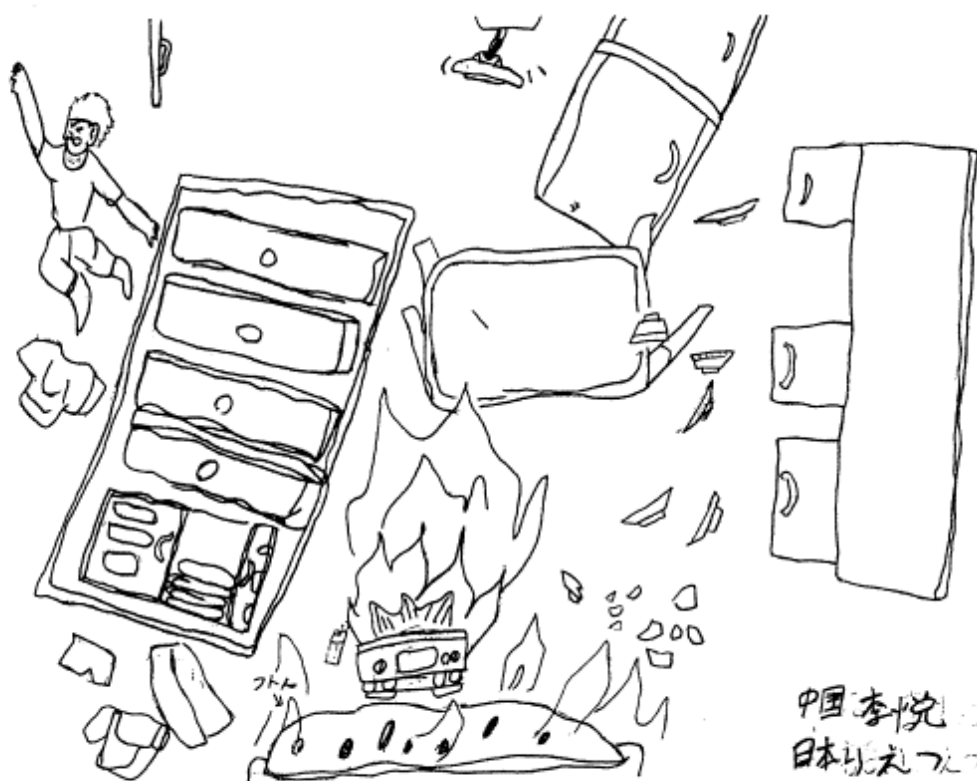
2週間が過ぎる頃には、寮にはたった7人の寮生しか、残っていなかった。我々の日常といえば、朝早く起き、水と食糧を探しまわる事であった。時々、水や食糧が寮に届けられることもあった。先生と、彼の家族はとても親切で、よく水や食糧を可能な限り分け与えてくれた。ついに自衛隊が我々を救援に来了。彼らは、公衆浴場と、我々が手軽に飲料水を入手出来るように、給水タンクを設置してくれたのだ。これで我々も1日おきに入浴出来るようになった。

情報収集は、我々にとって大きな課題であった。それというのも、我々のうちの誰一人として日本語を十分理解し、ニュースを英語に上手く訳せる人間がいなかったからである。我々はたいていBBCやCNN等の外国のニュース番組に頼らなければならなかったのだ。この時期、我々は多くの困難を経験したが、日本人からは多くのことを学んだ。たいていの国ではきっと起こったであろう略奪やその他の犯罪行為が、ここでは起こらなかった。順番待ちの列では、秩序と礼儀正しさがあり、その上、時には外国人に対して、特別親切だったりもした。

2月の中旬までにはガスが復旧し、ついで、水道も使えるようになった。交通手段に関しては、まだまだ混乱が続いたが、ほとんどの学生も戻り始めたのである。ポートアイランドから大学に通うのはまさに悪夢であった。私

は2時間かけて歩かなければならなかった事を忘れられない。教授は私と会ったときに、とても同情した様子で、電話で連絡さえとれば、家にいてもかまわないからと言ってくれた。

こうして、阪神大震災は、財産や人間の生活に壊滅的な被害をもたらしたが、一方では、日本人の忍耐と献身という性質を浮き彫りにしたのである。これらは、見習うべき性質といえる。



あ　　る　　考　　え

レオ・ナオト・アライ（男）ブラジル
京都大学
（日本語訳：マルガリータ　山田）

私にとって、1月17日の地震はショッキングな経験だった。私は、京都の寮の10階に住んでいる。神戸の揺れとは比較できないが、なにをすればいいのか分からず、動けなかった。地震を長く感じた。神戸の状態は想像もつかなかった。何人かは自然の力に耐えられず、帰国した。残った人たちは、帰った人たちの分まで苦勞している。何人かは「ショック」状態にいるまま、どうすればいいのか今だに分かっていない。不運を乗り越えた人たちは、人生を愛しながら頑張っしてほしいし、地震を経験していない人たちには、人生をたっぷり楽しんで、物には拘らないようにしてほしい。我々は、日本の実利システムに乗り込むようになるが、自然の方が強いので日本社会で得られる快適さをいっぺんにつぶすことができる。

c1995　留学生震災文集編集委員会、デジタル化：神戸大学附属図書館

追悼

エイ・エイ（女）ミャンマー
神戸大学
（日本語訳：大野木 輝之）

1995年1月17日、火曜日、午前5時46分、マグニチュード7.2という強烈な地震が兵庫県、そして西日本の各地を襲った。特に壊滅的な被害を受けた神戸市では、立ち並ぶビルや家々は倒壊し、電車は止まり、水道、電気の供給も遮断された。死者は5000人以上、そして30万人もの人々が住むところを失った。

前日、私はいつもより早く8時にはベッドに入っていた。真夜中、3時半ごろ目が覚めたが、することも見当たらないので、水を少し飲み、つけっぱなしにしてあったテレビのスイッチを消してから再びベッドに戻った。しばらくして私は大きな揺れを感じ、ベッドから飛び起きた。私はゴロゴロという地鳴りを聞き、すぐに地震だということに気付いたが、立っていることは出来なかった。私はテーブルの下に逃げこんだ。電気は全て消え、私は全く生きた心地がしなかった。

その時、日本人の学生が部屋のドアをノックし、近所の人達はみんな外の駐車場に避難している、と教えてくれた。私も部屋を出て、靴も履かずに階段をかけ下りた。

その日私はミャンマーに住む家族に電話をかけて、自分は無事だから心配しなくていい、と伝えた。しかし4日後、阪神大震災により神戸が壊滅し多くの死者が出たというニュースを聞いた母は、精神的に大きなショックを受け、とうとう体をこわしてしまった。母は私に会いたがっていたが、神戸からの交通手段は麻痺状態にあり、国へ帰る方法は私には無かった。地震から2ヶ月が経っても、母の状態は、いっこうに良くならなかった。そして5月17日、母は永遠に帰らぬ人となった。

私は阪神大震災によって大きな被害を受けた。しかし最愛の母を失った悲しみは、それとは比べものにならない程のショックを私に与えた。私は二度とこんな悲しい思いを味わいたくない。そして、世界中の人々にこんな悲劇がくり返されぬよう私は祈る、我らの神 Buddha の前に。

先に逝った二人へ

エイティンライン（女） ミャンマー
神戸大学
（日本語訳：エイティンライン）

明日であの恐ろしい阪神大震災に出会ってからちょうど3ヶ月が過ぎようとしている。この体験は、私が生き続ける限り決して忘れることのできない人生の一ページである。

あの震災で私は、ルインさん、キンさんという二人の同郷の友人を失った。私にとってこの二人の友人は、単なる『同郷の人』ではなく、同じアパートに住み、同じアルバイト先で働き、異境での喜び苦しみを共有してきた大切な仲間だった。

私は、今まであなた達二人にお詫びしなければならないことが一つある。今それを言葉に出して語り出さない限り、苦しいほどに悲しみが募ってきて落ち着くことができない。

忘れもしない、1995年1月17日火曜日午前5時46分、この神戸が地獄となった時、私たちが住んでいた7階建てのアパートは、崩れ落ち、一階に住んでいた私たち3人は、瓦礫の下で生き埋めとなった。この悪い運命に巡り逢おうとは、この中の誰一人として思いもしなかったことであつた。

私が、コンクリートの塊に挟み込まれている間、隣からは、ルインさんの無事そうな声が聞こえた。ルインさん、その時、私は、いつも優しく、誰にも公正なあなたの気持ちを信じていました。あなたが外の助けにきてくれた人達と話すことができていたから、きっと私たちも助けられるだろうと信じていました。

キンさん、あなたの声は、全く聞こえてきませんでした。しかしそれは、部屋が離れているからで、あなたも私たちとともに、きっと外に助け出されるものと信じていました。

12時15分、私が助けられ、外に出た時、私は、今まで心に描いてきたことが大間違いであることに気づいた。

私を待っていてくれるはずの二人の姿はなく、外の人たちの私に伝えてくれたことは、「あなた一人だけをやっと助け出すことができた」ということであつた。私は、どうして二人が外に出られないのか、繰り返し質問し、二人が出てくるまでここで待つとも言いはつていた。

いろいろな困難が山ほどある中で、私は、ようやく現場に近い病院に送られた。その時点で私は、なおも二人がほどなく助け出されるものと信じ続けていた。

夕方ごろ、アルバイト先のビルマ人の仲間がポテトチップスを持って駆けつけてくれた。彼の話によると、アパート前では、救援の人数があまりに少なく手の打ちようもないので、どうしても救出することができないということであつた。彼もまた、自分たちの家が崩壊し、避難生活を余儀なくされることになっていた。私たちは、手を握りあい、声を出して泣くばかりで何の話をすることもできなかった。悲しみで言葉を失ってしまっていた。生き残ったことをうれしいと感じることもできなかった。

痛み止めの注射を打たれても傷の痛みは消えず、それにまして心の痛みは続き、涙を止めることはできなかった。

17日深夜1時、私の保証人がやってきて病院を移してくれ、その病院で翌朝、二人が別の病院に入院できたとの知らせを受けた。この知らせに私の悲しみは和らげられた。

次の日から私の回復に向けての戦いが始まった。

20日には、さらに加古川の病院に転院し、治療が続けられた。

手術後、神戸大学留学生センター 留学生課長から私に電話をいただいた。その内容は、21日夜ルインさんのお葬式が終わったこと、キンさんのお葬式がまだ終わっていないこと、そして生きている私が「本当のエイ・ティン・ライン」かどうか確認したいというものであつた。

その時、私は、課長の質問に答えながら、隠されてきたあなた達二人の死を初めて知ってしまった。電話を終えたとたん、ずっと自分をコントロールしてきた緊張が解けてしまった。ロビーでは人前で泣くまいと、必死にこらえたものの流れてくる涙を止めることはできず、病室に駆け込んだ私は、声を上げて泣いてしまった。

ルインさん、私は、我が儘な人間です。あなたのお葬式の日、私はなにをしていたのでしょうか。

21日は、神戸大学のビルマ人留学生仲間と彼女のホストファミリーの人の見舞いを受けていた。彼らは、私が23日に手術を受けると聞き、激励にきてくれたのだった。

傷の痛みを見せたくない気持ちも手伝って、私は、皆と一緒に元気に笑って話し込んでいた。手術への不安と傷の痛みの中で、私がその時、楽しんでいただこうかは、今もわからない。瓦礫の下で、あのとき私は、ルインさんの元気な声を何度も聞いていた。彼女の死は、私にとって、当時思いもよらないことだった。

しかし、ルインさん、あなたのこの世の最後のお別れの時、私が楽しんでいたら、私は、不正なことをしたのかも知れません。

キンさんのお葬式もどうなるものか、いろいろ考え込んでいた。私が今できることは、何か、何をすべきか、私は、自問自答を繰り返した。

非常につらく寝付かれないため、睡眠薬に頼って眠るのに、今もルインさんの声が聞こえてくる。

ルインさん、キンさん、許してください。今私にできることは、あなた達が極楽で安らかに眠るようお祈りすることだけしかありません。

3月17日の合同慰霊祭も、私は、出席者の皆さんとともに祈る以外何一つできなかった。

明日で、千年に一度といわれる恐ろしい大地震が起こってからちょうど3ヶ月になる。今、瓦礫の中で、「ビルマに帰りたい」と言ったルインさんの声、いつの日か「一日でも早くビルマに帰るよう伝えてほしい」と言ったキンさんのお母さんの声が鮮明によみがえってくる。私は、こうなったあなた達の運命を一生忘れることができない。

あなた達と一緒に暮らしてきたこと、あなた達と一緒にがんばってきたことを私は、永劫に、ひとときも忘れることはないでしょう。もう一度言わせてください。ルインさん、キンさん、どうか私を許してください。

地震

カレン・バグー（女） オーストラリア
神戸大学
（日本語訳：陰山佳代）

私は、1994年10月4日、日本に到着した。文部省より18か月間予定の奨学金を受けてのことだった。この奨学金は「教員研修プログラム」で、神戸大学で6ヶ月の日本語研修をうけ、更に、兵庫教育大学で1年間、「外国語としての日本語教授法」を勉強するという内容だ。私は、神戸の人工島の一つ、ポートアイランドにある留学生会館に住んでいた。私の最初の6か月間の語学研修は3月までの予定だったが、あの地震によって短縮されてしまった。

私の地震体験をお話します。

1月16日、私は西宮の友人家族を訪ねた。その日は成人の日で休みだったので、彼らとゆっくり過ごした。寮へ戻った時、風邪で少し寒気がした。「明日、大学へいけるのかな。」と思ったが、でも、大学で使っている教科書は本当におもしろいので何とか行ってみようと思っていた。そのうちに寝てしまった。

翌朝（1月17日）、5時46分、部屋が激しく揺れて私は目が覚めた。私はすぐに以前経験した地震訓練を思い出した。5年前、前回来日時、川越の女子高校で教えていた頃のことだ。地震訓練用のトレーラーハウスが来て、実際に中に入り、震度1から7までの揺れがどのくらいのものであるか体験した。しかし、今回は本物の地震だ、本当にあの震度7の揺れの中にいると思った。地震が起きた時はまだ暗くとは見えなかったが、たんすが倒れるのを見たように思う。特にひどかったのは、ガラスなどが割れる音だった。地震は私の体を強烈に揺さぶって、私は恐怖を覚えた。ビルが倒れるのではないかと思った。私は部屋の中に唯一人、捨てられたような気持ちで、ベッドにしがみつくことしかできなかった。揺れがおさまった時、私はまだビルが倒れずに立っているのが信じられなかった。

地震はすぐおさまったけれど、この経験はまだ頭に残っている。特に部屋の中のあの感覚と体の揺れる感覚は忘れられない。揺れが止むと、私はすぐ部屋を出た。同階の女の子たちは皆廊下に出ていた。私はコートをつかみ、皆と一緒に階下に降り、私たちは公園横の道路に集まった。ふと見ると、歩道が歪み、そこには大きなヒビがはっきりとコンクリートに入っているのに気付いた。すると見る間に、泥水が道路上に湧き上がってきて、歩くのも困難になった。私は、どうしてこのビルはまだ無事に立っているのだろうと寮を眺めた。でも、そのおかげで私たちは怪我もなく生きているのだと感謝した。2、3時間後、ビルは入室許可になった。でも、ほとんどの人は、自分の部屋を片づけた後、1階に集まり、テレビを見て、何が起きているのかを確かめた。そのとき初めて、被害の大きさを理解し始めた。停電直後は、バッテリーでラジオを聴いていた。もちろん日本語放送だったが、皆で聞くとなんとか理解できた。

その日の午後、神戸の中心部へ歩いていった何人かの男の子たちが、戻ってきて、状況を報告してくれた。全くの混乱状態で、鉄道のライン————神戸の中心街、三宮へのアクセス————も断たれたということだった。しばらくして、私たちも何人かで、ポートアイランドと三宮をつなぐ神戸大橋までいった。地面からわき出る泥を避けながら、滑らないように注意して。橋は、道路上に大きな亀裂が入っているらしく、閉鎖されていた。でも歩いて渡ることはできた。橋の上からは、ポートターミナルが一望できた。埠頭に置いてあったコンテナもろとも、港の先端は壊れて海に落ち、巨大なコンテナは海面スレスレに漂っていた。ビルは傾き、瓦礫が散らばり、ビルの1階部分が上下階にサンドイッチにされ、消滅している。それを見ていると、ここからは危険だと思い、先には進まず、さっさと寮に帰ってきた。

午後5時頃、電気が復旧して、私はオーストラリアの両親と、日本の友人に電話して、自分の無事を伝えた。彼らは私の声を聞いてほっとしたようだった。なぜなら、彼らは1日中電話を入れているのに、回線が繋がらなかったのだから。その夜は、皆自分の部屋では落ちつかないので、布団を持ち出し、1階の一部屋で一緒に寝た。地震の時、最初私はポートアイランドだけで起こっていると思っていたが、テレビを見ると、神戸全体が被害にあったことがわかった。ポートアイランドでは、鉄道は壊れ、道路も閉鎖され、逃げ道がなかった。水もなく、食べ物もほとんどなく、まるで戦争状態だ。飲料水を得るのに、外で列を作らねばならない。地震から2日後、関西空港までの船便が出始めた。おそらく、たくさんの人が乗船するだろうと思ったので、私たちは5時に起きて、身の回りのものを小さなスーツケースかバッグに詰め、残りはそのままにして、港へと歩いていった。待ち時間は長かった。何人かは、フライトを待って、母国の自分の家へ帰ろうと決めていた。また、日本の別の地域にいる友人を訪ねるつもりのもいた。私は、東京に友人がいたので、私たちの研修がどうなるのかははっきりするまで、そこに居ようと決めた。新幹線が動いてなかったの、空港から在来線で京都まで行った。京都からは新幹線に乗り換えて東京へ向かった。東京が近づき、たくさんの家々がぎっしりとひしめきあっているのを見て思った。「もしここで地震が起こったら、何もかも倒壊して、火災が広がって壊滅状態になるだろう。」埼玉の友人宅に着き、食事をしてシャワーを浴びた。その夜は、地震後初めて、よく眠ることができた。でも、寝床の上の棚に置いてある物が落ちてきそうだったので、全部棚から下ろしてもらった。

神戸の寮を出る前の夜、荷作りのために、自分の部屋に戻った。その時、私は奇妙な雰囲気を感じた。地震が起る前は、私は自分の部屋、最上階の5階で、ラジオを聴いたり宿題をしたり、楽しく過ごしていた。しかし地震の後、部屋にはいると、私はいつも恐怖を感じた。私は今でもあの部屋に戻るのがためらわれる。オーストラリアに帰っている現在も、自分の部屋で寝ることにはなかなか慣れない。初日、誰かが350人以上が亡くなったと言っているのを聞いて耳を疑った。しかし日毎に死亡者数は増え、5000人を越えてしまった。こんなに大きな災害が起こるとは、こんなにたくさんの人々の生活がこんなに短時間に変わってしまうとは、いまだに信じられない。

私は最初、地震は主にポートアイランドの私たちの寮の周辺で起こったと思っていたので、整理がついたら、すぐまた日常の生活に戻れると思っていた。でも実際は、私が思ったよりもずっとひどい状態になった。（埼玉の友人宅で1カ月程過ごした後、）2月末に日本を出るとき、ほとんどの神戸住民はまだガスもなく、たくさんの人々がまだ家もなく、学校の体育館で、苦しい状態に置かれていたのだ。

鉄道が機能していないので、移動も容易ではない。いくつかの区間はバスで代行している。全被害の大きさはまだ調査中であり、神戸市の完全復興までには数年かかるだろう。

私は、自分の研修を継続するために日本へ戻ることになった。その前の1カ月間を故郷ジーロングの自宅で過ごす。4月からは、兵庫教育大学で、新たな生活が始まる。（1995年 3月13日記す）

火曜日、神戸は自分で目覚めることをしなかった

E. A. B.

神戸大学

(日本語訳：蜂須賀真由美)

「明日という日がないとしたら、あなたの命は何なのだろう。つかの間現れてやがては消えていくかすみなのかもしれない。」

ちょうど2カ月前、神戸の街は世界中に衝撃を与えた、自然が引き起こした大災害によって目覚めさせられた。

新年になってまだ3週間が過ぎたばかりで、私たちの誰もが、また、いつもと変わらぬ1年が送れることを疑いもしなかったのに、残念ながら、今年はそうはならなかった。阪神大震災は、本校学生39名を含め、5000名以上の命を奪った。更なる学問の追求のために祖国を離れ、神戸にやってきた7名の留学生たちは、志半ばで悲劇的な最期を遂げてしまった。彼らはもう帰ってこない。

私たちは、もしそれが私の運命だったらと考えてみないわけには行かない。私たちは、仲間の死を悼むために、今こうして生きていられることを神に感謝するとともに、これは、今までに私たちがしてきたことを評価するために神が与えてくれた機会なのだと受けとめている。

私たちが最期を迎えたときには、私たちは今まで精一杯生きてきたと自信を持っていえる。来世でまた会おう。

地震、私の初めての体験

蔡 愛琴（女）中国
神戸大学
（日本語訳：蔡 愛琴）

地震の前日は、次の日大切な授業があるため、いつもより早目に床につきました。朝方、突然、大きな揺れを感じました。最初は、自分が夢の中で暴風雨の中、船に乗っていると思っていましたが、でもどうして私はこんな時に海に出るのかと、急に目が覚めました。しかし、まだ揺れていて、周りはガタガタととても大きい音がしていました。最後に、「ああ、これは本当の地震だ。」と気が付きました。この凄い音は自分と近所の子の食器や、おなべなどが壊れる音だと分かりました。もうすぐおさまるかなと思っていましたが、なかなか止まらず、自分も何をしたら良いのか分からず、ただボーとしているだけでした。隣りの人たちのドアを開ける音を聞いて、自分も早く外に避難しなければならないと思いました。隣人たちは続々と出ていって、夜明け前の時、外はまだ暗いけれども、皆、興奮気味に、自分の初めての体験を話し合っていました。私も例外なく、今度初めての体験で隣人に話しかけました。

家は全壊して、しばらく大阪に住んでいる友人の所に住ませていただきました。ある日、用事で自分の所属学部の教務室に行って、そこで留学生センターに、地震によって困っている留学生のためにいろいろな物品が用意してあることを教えてもらって、喜んで物品をいただきました。困っていた日常生活をかなり解決してくださいました。自分自身は被災者の一人として、あちらこちら沢山の方々や団体に助けていただいて、心から感謝しております。

また、私も沢山の被災者のために、自分の微力を尽したく、3月19日、神戸の南京町で「がんばろや、WE LOVE KOBEアジア音楽祭」に参加させていただきました。テレビで見た様子より、現場の方はもっともっと悲惨でした。私の大好きで美しい神戸は一瞬の内にこのように変わってしまって、地震そのもののひどさを初めて体験しました。

当日は、晴れたけれども、少し小雨が降り気温もあまり上がらず、肌寒い日でした。大勢の方々が寒い日にもかかわらず、聴きに來られて、真剣に耳を傾けてくださり、とても感激しました。私達も寒さに負けず、力を振りしぼって、一生懸命演奏しました。今回は、音楽で皆さんを慰めることができて、とても嬉しいです。このおかげで、他の人に自分のちょっとだけ役に立つことをして差し上げて、人間的に成長していくことを初めて体験しました。被災者の方々の前向きに生きている姿を見て、私も感動しました。

大自然の力には無力でも、私達人間としてお互いに助け合って、愛を合わせて、この災害に勝利しようではありませんか？

あの一瞬だった

陳 慧（女）中国
神戸大学
（日本語訳：陳 慧）

深江というところは、神戸以外の人に知られていないかもしれないが、1月17日の阪神大震災で深江は有名になりました。阪神高速道路その一部分が震災で倒れました。私の家はそのすぐ近くにありました。

毎日、商船大学に通って研究室がとても好きでよく遅くまで残りました。いくら遅くても家まで自転車で5分もかかりませんでした。休みの時、ときどき深江の安くてにぎやかな商店街でショッピングしました。この深江の生活に慣れました。しかし、17日の地震で一瞬の間にすべてが変わりました。

16日の夜は、いつものように修士論文を作成していました。締め切りも間近2時過ぎでやめて寝ました。就寝するとき時計を見たら17日の2時40分であったことを覚えています。なかなか熟睡できず、うとうとしていると、大きな揺れで目が醒めました。”あ地震”という気持ちと”大丈夫！神戸は地震はこないから”という気持ちが同時によぎり、”さて、すぐ終わるでしょう。もう一度寝よう”と思いました。すると、今度はとても考えられないような激しい震動と揺れが昔と一緒にし、その音は夏の台風のような激しさでした。”かみさま、どうして終わらないの？”私は思わず布団をめくり、逃げようと立ち上がりました。大きな揺れで歩くこともできず、やっと一歩ぐらいを歩いて、ベッドの横に机があり、歩けない、机のしたに入ろうと思いながら”がちやん一”と何か大きな物が倒れたみたいで頭を強く打ち、その場に倒れてしまいました。すべて一瞬のうちのできごとです。

何も見えず真っ暗で、倒れた場所は、ベッドと机の間の隙間らしく、頭から血が出ていることが分かりまして、どろどろしている、しかし痛みも何も感じませんでした。手と足も打ったけれども少し移動すると伸ばせることが分かります。土壁の強い匂いの中で、埃で息苦しく、どうなったのだろうか私はそのままで死ぬのかと思っていますと、また余震が来ました。まるでブランコに乗っているような気がしました。少し時間がたって、私はどうすればここから出ることができるかを考えてみました。そして、右手の動く範囲を動かしてみると電話機を確認することでき、すぐに電話をかけようと思って、受話器を取ったが何の音もしません。次に左手の動く範囲で動かしてみました。すると、今度は天井の電気と壁に掛けてあった人形をさわることができました。何かおかしい、どうして天井の電気が私の倒れている絨毯のところにあるのか、私はこの時、自分の置かれている状態がやっと解りました。天井が落ち、壁が倒れているのです。私の部屋は文化住宅の一階部分にあります。なぜ、もう外は明るくなっているはずなのに、光が一切見えません、黒闇の中なのですか、埋められているからです。

身動きがとれない状態で「助けて・・・、助けて・・・」と叫ぶと、近くから「助けてくれ・・・」という声がしました。二階に住んでいる私と同じ商船大学の男子の二回生の声でした。しばらくすると二階でごとごとと何か物を動かすような音がしました。わたしが「大丈夫ですか」と聞くと、彼は「うん、何とか大丈夫、もう出れるから」といいました。私が「早く警察を呼んで来て助けて」と言うと「警察はどこにあるの」と彼が言いまして

「深江駅の横にあるから呼んできて」とお願いすると「出口がない、出口がない」と彼が大きな声で叫びました。少しすると瓦礫を動かし、ガラスの割れる音がし、彼が出ていく音がしました。

随分長い時間が経ちました、余震がまだ来ていました。真っ暗な中で何か外の方で話し声が聞こえます。でも、パジャマだけ着ているのでとても寒くてそのままどれくらい時間が耐えられるのか、私は身寄りが近くにいないので誰も気が付かないのでは、早く誰かが私の声を聞いて来てほしいと思いました。2時間ぐらい経過すると誰かが「陳さん、大丈夫か」の声が聞こえました。「大丈夫じゃない、早く助けて」と言う「少し待ってって、すぐひとを呼んでくる」これは二階の学生の声です。しばらくして、何度も「もう少し頑張って」の声がしながら、畳をはがし、瓦礫を取り除く音がし、小さな光が見えてきました。光がだんだん大きくなり、人の顔が見え、世界がもう一度私の目の前に戻って来ました。光の方向に手を出して、わたしの体は堀り出され、パジャマのまま、おんぶされ二階の窓から出ました。

表に出で見ると、”ここは何処？私の部屋はどこ？”と思いました。私の家はなく、まるで一階建ての建物が壊れたような姿です。二階の窓口は地面から半メートルぐらい離れ、入り口のようにです。私は助けられ近くの集会室にいて、二階で学生が布団をくれて集会室で休憩して3時間以上死体の側で寝ていて知りませんでした。

真夜中になって、やっと、堺の弟が助けてにやってきて、堺の病院に運ばれ手当を受けました。病院で分かったのは頭に傷、体は青くて傷だらけ、幸い、骨は大丈夫でした。生き埋めで打たれたとき、痛みは全然感じなかったが、翌日は全身が痛くて動くことができませんでした。この重大さ、地震の大きさを知ったのはその頃からで、私の同胞も数人がなくなりました。あの状態で、私が死ななかったことは本当に不思議です。

わたしは、助けていただいた方方のことは一生忘れないでしょう、小林さん、工藤さん、佐藤さんです。被らが早く助けてくれなければ、死んでいたかもしれません。

記憶の中の阪神大震災

フローレンス・チサレ（女）ザンビア
（日本語訳：陰山佳代）

阪神大震災は全く驚きだった。私が兵庫県の災害防止に関する指導を読んだから、1カ月もたたないうちにそれは起こった。私が日本の生活に適応しようとしていたまさにその時に、地震は起こった。そしてそれは、私に良い影響も悪影響ももたらした。

良かったことは、この美しい神戸を襲ったものに対して、外国人も現地の人も皆が一丸となって戦ったことだ。どこの生まれの人かなどと見極めている暇はない。全ての人が、日常関わっている人々が負った傷を癒すために最大限の救援を行っている。私は今まで話したことがなかった隣人に話しかける機会を持った。町を出ていくときに、隣人の優しいお別れの言葉が私に響いてきた。町へ来たとき、あまり私に話しかける人はいなかったのと対照的に。

地震の悪影響は、全てが意気消沈としていたことだ。神戸市はゴースタウン以上のものとなった。サイレンが夜となく昼となく鳴り、飛行機が救助活動に飛んだ。また、ヘリコプターと消防員、救急車とパトロールカーを見る度に、体にも心にも緊張が走った。私は誰か親族に側にいてほしいと思った。これは現地の人が親切でないということではなく、極度の危険にさらされた時、そのように思うのは私にとって自然なことだった。生活は突然180度転換し、お風呂にも入れず、食べたいものも料理できず、友達に会いに行くこともできず、傾き破壊されたビルを見ることなく町を歩くこともできなかった。私たちは、精神的にも体力的にも活力を取り戻すために、神戸を離れる必要があった。そして、私たちは神戸を去った。

最も恐ろしかったのは、地震の後に見る、増える犠牲者数や破壊状態という真の揺れによる被害だった。

この事は生涯忘れられない経験だった。良いことも悪いこともあった。しかし、悪影響はより重くのしかかっている。なぜなら、人が死に、財産を失っているのだから・・・。

どのようにして地震に耐えたか

ポール・チサレ（男） ザンビア
神戸大学
（日本語訳：下村明弘）

1995年1月17日午前5時45分、大きな地震が神戸を襲う。私は完全には目を覚ましていなかったが、母国語で悲鳴をあげているのが分かった。私の妻は子供の所へとんで行き、落ちてくる物から子供を守った。ガタガタと昔をたてる地震と余震は恐怖感を生み、落ちつくのに時間がかかった。妻はわりと精神的に余裕があったため、起き上がり、ガスと水道の栓を閉めた。その後、私たちは地震の被害を見に外へ出た。

外へ出るとすぐ、神戸のほとんどの区で火事が起きているのが分かった。辺りはガスの臭いがし、あちこちからサイレンの音が聞こえた。私たちは恐怖感に襲われた。なぜなら、明かりもなく、外界との連絡もとれず、誰もがショック状態にあり、急いでこれ以上の災難から逃げ出したかったからだ。

空がすっかり明るくなるまで、私たちはひびの入った家の外にいた。崩壊したビルや火災、ふさがれた道路などのことなど様々な話しが、そして何よりもまず死んだ人の話がされ始めた。私たちは外国人なので、社会から孤立してしまわないように、同じ教会のカナダ人の友達の家に行った。約1時間後、近くの学校へ行く決心をした。その学校では誰もが落ち着いていて、お互いに親切だった。私たちはそこに2日間泊まり、3日目に神戸大学の留学生センターに移り、2日間そこに泊まった。

留学生センターでは安心でき、風呂に入ったり、温かい物を食べたり、気分をほぐしたりしたかったが、できなかった。余震のたびに背筋に悪寒が走り、体がひどく震えた。息子は単なる風でさえおびえ、一人でトイレへ行くこともせず、私か母親の近くにいた。妻は居場所が変わったにもかかわらず、2週間も寝なかった。郵便受けは世界中の友達や親戚からの手紙でいっぱいだった。私たちは体重が減り、とにかく身内と一緒にいたかった。私たちに手をさしのべてくれた人に感動した。神戸の人は誰もが親切だった。分厚く黒い雲が空を覆っていたけれど人々は自分の持っているわずかなものを分け合った。地震によって生活が壊され、それで私たちは病気になる、希望をなくした。

神戸大震災からの生存者の記録

エバ・マリア（女）フィリピン
神戸大学
（日本語訳：蜂須賀真由美）

私は医者という立場上、災害があれば、その外にいて呼ばれる存在であり、自分がその犠牲者になることなど考えてみたこともなかった。マグニチュード7.2の地震が神戸の町を襲うまで、私は特別研究員として調査をしていた。

地震はとんでもない時間に起こった。私は強烈な揺れで起こされ何秒間かビルは揺れ続けた。地震は、私たちが「地震だ」と理解するのに十分なほど続き、その間は本当に何をしたらよいかわからなかった。とても寒く周囲は暗かったが、強い揺れで家の中がいかにか破壊されたかは見てとれた。皿やカップはすべて割れ、棚の外に放り出されていた。テレビやステレオ、本などは床の上に散乱していた。パニックと恐怖が私たちを襲い、すぐにアパートから出なければと思った。しかし、それが第一のミスだった。私たちはロビーでシェルターになるものを探そうとしたが、ロビーは割れたガラスで埋め尽くされ、とても入れる状態ではなかった。恐怖の中で私たちは、家の中にはシェルターになるような頑丈なものは何もないことを悟った。なぜなら、日本に家には必ずしもベッドがあるわけではなく、私たちは畳に寝ていたし、テーブルも背が低く頑丈そうでもなかったし、ドアも紙で作られたもの（襖）に過ぎないからだ。

地震直後に私たちのアパートの後ろのビルで、一つのビル全体を焼くほどの火事が起こった。私たちは近くの小川から水を取ってきてバケツリレーをして消火活動に当たった。消防車は他の地区にも出動していて、私たちのところに来たのは随分後になってからだった。強風と水不足のため消火活動は難航し、地震後2、3日経って、出火するところもあった。

最初の恐怖が去った後、私たちは生命に関わる重大な問題に直面した。食べ物と水である。私たちの第二のミスは食べ物を貯えておかなかったことと、水を入れる容器を持っていなかったことだった。ラーメンやキャロットジュースを買うために人々は長い列を作った。店を開けることが、経営者にできる唯一のことだったと思う。ミネラルウォーターはあっという間に売り切れた。私たちは近くの小川から水を取ってきて、それを沸かし、味をごまかすためにティーバッグを入れて飲んだ。しかし、お腹が痛くなり出してから、私たちはその水を飲むのを止めた。あの時点で下痢になるわけにはいかなかったのだ。水はあまりに貴重だったし、寒空の下、小川に水を汲みにいくのは楽しいものではなかった。

地震の被害を見るまで、私たちはこのような状態がどのくらい続くのか見当もつかなかった。古い木造家屋はベちゃんこになり、私たちがよく買い物にいていたコープのような建物も崩壊していた。電柱は道路に倒れており、高架線路や高速道路は、電車や車もろとも地面に落ちていた。死者の数は増えていき、何千人という人がいまだに行方不明のままだった。多くの人を負傷し、病院に運ばれた。頭上をヘリコプターが飛び交い、サイレンは鳴り止みそうもなく、そこはまるで戦場のようだった。情報網や交通網はすべて寸断されていた。車やバイクだけが自由に動け、一方大半の人々は、テレビでも報道されたように、線路の上を歩いて移動した。私たちは外の世界とのコンタクトを断たれており、両親が私たちのことを心配しているだろうと思うと気かきではなかった。外国人の私たちには、どのような助けやサービスが受けられるかがわかるのに時間がかかったし、日本語のニュースを聴いたり、テレビで流れている日本語で書かれた様々な情報を理解するのは難しかった。しかし、日本は24時間以内に電気が回復した初めての国となった。電話は48時間で回復したが、まだ完全とはいえない状態である。指定された場所に給水車が来るようになったのは72時間経ってからだった。避難所では食べ物も配られるようになった。交通規制も行われるようになり、食べ物や水を配る車両しか神戸には入れなくなった。

私たちは結局安全のこと、食べ物や水のことを考えて、大阪へ避難することにした。私たちの地区で病気が流行りだし、出来るだけ早く避難した方がいいと考えたのだ。何日か後、病気や疲れのため、私とルームメートはそれぞれの国に帰ることになった。

このような災害を体験して、私は人生で本当に大切なものは何かと考えるようになった。ものをたくさん所有すること？ 名を上げるための学位の数？ 出版した論文の数？ それらはみんな今回のような地震が起きればがれきの山になってしまう。最終的に問題となるのは、私がどのように他の人と関わるかということ、そして神の愛を持って、いかに彼らの生命に携わるかということなのだ。

阪神大震災の後で

ムラト・ドール（男） トルコ
神戸大学
（日本語訳：堀内京子）

私は、博士課程の入試勉強をしていた。なぜかとても神経質になっていたけれど、試験のストレスだと思った。時計を見ると、朝の5時45分だった。水を一杯飲んで、もう1度ベッドに入った。そのとたん、縦方向に猛烈な揺れを感じた。それから、揺れは横の、さらにはげしいものになって、私の体はベッドから跳ね上げられ、テレビと一緒に床に落ちた。そのとき、地震のあったこと、それも巨大な地震だったということがわかった。物が私の上に落ちてきて、床にさえいられなくなってきた。私は10階建てのピルの9階に住んでいて、さらに震源地にとっても近かった。私の経験が本当にひどいものだったのは、そのせいだと思う。揺れは1時間にも感じられた。それがおさまった時、落ちつくこととつとめた。私は自分に、「落ちつくんだ。パスポートと外国人登録証と財布が必要だ。外に出てはいけな。揺れはまたやってくるから。」と言い聞かせた（神戸大学の留学生センターに感謝したい。彼らは、地震のときにはどうすべきかを、おしえてくれていた）。私がそう考えるのと同時に、再び5秒以上の激しい揺れがあった。とりあえず、なにか着た。真っ暗だったので、物を探しているあいだに、たくさんの切り傷をつくってしまった。やっとのことで外に出たが、自分の見た光景は信じられなかった。私たちの美しい神戸が火に包まれていた。近くの家ほとんどは焼け落ちていた。私はみんなと一緒に非常階段を使ってピルの外に出た。そこで、私は1人のおじいちゃんに呼び止められた。「助けて。おばあちゃんが中にいる。」私たちは一気に彼女を助け出した。彼女は血を流して、1月の夜の寒さの中で、小さなパジャマしか着ていなかった。私はもう1度部屋に戻り、おばあちゃんや震えている近所の人たちのために、何か着る物を取ってきた。私たちは、おばあちゃんの血を止めた。しばらくすると、家の周りも全て燃え始めていた。私たちは、近くのアパートから別の女性を助け出せたのだが、彼女の夫はだめだった。彼は叫びながら焼死した。私はとても無力さを感じ、無感情になった。それから、再び部屋に戻って、荷物を詰め、援助を申し出てくれたさくら銀行に持っていった。

私は、研究をしている大学病院に向かって歩き始めた。今まで住んでいたところを見るのもこれが最後だった。もう2度とここに住めないだろうということは分かっていた。火災報知器がすでに鳴り始めていた。私は燃えている家、ガス漏れしている駅、ひびの入った道路、茫然自失の人々の間を通り抜けて行った。途中、多くの日本人が、大丈夫かと声をかけてくださった。疲れたので、道路に座って水たまりで顔を見た。切り傷があり、血と灰にまみれていた。ひとかけらの煎餅を食べ、歩き続けた。方角を見分けるのも難しかった。病院に着くまで4時間かかった。ローソンでは、人々がすでに生活必需品を買ったり、家族に電話をするために長い列を作っていた。家族に電話をしなければならなかったが、時差があり、家族はまだぐっすり眠っている頃だったので、急ぐ必要はなかった。外来病棟に行き、そこで先輩の辻村さんと中町さんに会ったとき、力が抜けてしまった。しばらく休んでから、スタッフと一緒にけが人の手当を始めた。

その夜、2度の強い余震があった。何千回もの強い余震があったが、もう慣れてしまった。電話が不通だったので、すこし遅くなってから、家族に電話をかけた。CNNの報道により、電話がつながった時には家族はもうヒステリックになっていた。この地震のことは、ホラー映画の一場面のように見えていたかもしれない。これは、だれにでも、そして世界中のどこででも起こりうることだ。問題は、次の大きな地震に「備えができていないか」ということだ。今回の神戸の大地震は、日本を訪れたいと思っている人々や日本で勉強しようとしていた学生がその計画をキャンセルする理由にはならない。そして、あなたがた日本人自身から、日本人の優しさや愛を奪うこともできない。私は、ずっと孤独を感じることなく、まだ戦い続けている。私たちはみんな、神戸の瓦礫の中に、より輝かしい未来を築くために、共に戦っているのだ。

kobe,25.3.95



家

段一然（男）中国
神戸大学
（日本語訳：段一然）

私は中国から来た留学生です。神戸に住んでいましたが、地震で家や家財を失いました。私の住んでいた松風荘205号は、ただ4.5畳のアパートですが、私の生活の基地です。その家を失って、学校で泊まったり、友達に頼ったりする生活になりました。

自分の家が欲しいという強い願いをもって、大阪にやって来ました。大阪、梅田。同じような高層ビルに占められています。神戸での山が北、海が南の方向弁別法は全然使えません。青空も高いビルで田の形に切れて、街を歩いたら、「座井観天」のようです。

もっと恐ろしいのは地下街です。一つの地下鉄の駅は25個の出入口があり、入ったら、思わず“地道戦”の映画を思い出してしまうほどです。違うのは場所が日本で、攻められる方が私であります。

「お兄ちゃん、もうちょっと早く来たら、よかったのに。」

「家賃5万円の部屋は大阪にないよ。」

「すみませんが、内は留学生がダメです。」

「この間、ここに住んでいた中国人は悪かったでえ！」

「日本人でさえ、まだ家がないのに」

ほとんど絶望的になった私は、街をとぼとぼ歩いていました。前にもう一つ大きな看板見えました。一か八か入ろうと思って、扉を開けました。

「いらっしゃいませ。」

向かって来るのは若い事務員でした。ちょっと話したら、ワンルームの図面を一つ出してくれました。家賃が月6万円で、保証金が50万円でした。

「これはちょっと....」

事務員はすぐ私の意味を理解したようで、家主さんに電話しました。当分押し問答すると、家賃が3.9万で、保証金が20万になりました。

「こんな安いのはないよ！」

「よしや、これでいこう！」

時計を見ると、もう午後7時で、下見にいく時間がないので、5千円を払って、翌日に全部のお金を持ってきて、契約すると約束しました。

すぐ友達に知らせようと思って、公衆電話で掛けました。

「ほら見付けたじやない....！」

「まず下見にいったから...！」

翌日、友達のアドバイスをきいて、下見に行くと言求しました。前日の事務員に連れて行ってもらい、5階の建物の前に止まりました。玄関の上に「×××マンション」と書いてあります。入って見ると、壁にひび割れ一杯入っています。

「何じゃ、こりゃ！」

地震発生から、溜っている怒りは全部爆発し、カッとなりました。

「お金を返して、何もなかったことにしたら、よろしいでしょう。」

不動産屋から出て、頭がまた真白になりました。空を見あげると、高層ビルに切られている青空です。思わず谷村新司の『サライ』を思い出しました。

「流れてゆく、白い雲に胸が震えた。」

「鄭さんじゃないですか。」

「段、どうした。」

偶然に神戸で一緒にアルバイトしていた中国の女性作家に出会いました。

箕面に家を見つけたらしく、そこにはまだ空部屋があると言います。鄭さんに連れられて箕面に行きました。

大家さんのドアをノックすると、出てきたのは三十代ぐらいの奥さんでした。（後で孫がいると聞きました。）神戸からの留学生と言ったら、すぐ中に連れて行かれ、食事も用意して下さいました。部屋の話をする、2カ月間ただで住むことに決めて下さいました。それは避難の留学生に対して、全部だそうです。

ご飯が済んだら、奥さんは部屋の片付けもして下さいました。しかも、布団と日用品色々出してくれました。最後に机の上に花束を置きました。

緑の葉には黄色い小さな花が咲いています。高価な花でないけど、生き生きしている緑とストーブの光のような温暖な黄色は安寧の雰囲気である。「ここが家だよ。」と言っているようです。

二カ月後、神戸に戻る日です。学校の留学生センターの紹介で、社員寮に入ることができました。荷物を片付ける時に、その花束を発見しました。緑と黄色い色はまだ新鮮です。花瓶の中の普通の水だけで、どうしてこんなに生き生きにしているのでしょうか。どこにそんな力が潜んでいるのでしょうか。

大家さんに別れを告げました。しかし、その小さな花束があの家と一緒に今も思い出されます。

私の経験と神様

ホルヘ・マンリケ・エストラダ（男）メキシコ
神戸商科大学
（日本語訳：マルガリータ）

神戸の地震からもうだいぶ経ったが、まだ潰れているビル、家が見られる。人々は地震のことを話したくない、いまだにおびえている。

1月に地震が起こった時はびっくりした。私も普通の人間なので恐くて、泣いた。いろいろな人に「死ぬと思ったか」と聞かれる時、私は「死ぬと思った」と答えている。日本に来てから、このような地震を感じたのは初めてだった。私はメキシコから来た。メキシコでも、大きい地震が起こったが、実際に、そして、一人で経験したのはこんどが初めてだった。地震の日は、揺れよりも音で目がさめた。土から聞こえてきた轟音がはっきり思い出せる。数秒後、立ちたかったが動きが激しくて動けなかった。なにもできず、神様に祈った。苦しみと悲しみの中、バイブルに書かれているように祈り、神様の答を待った。私の言っていることを信じて、神様は私に安らぎを感じさせ、自由を与えてくださった。私は、肉体的な安らぎについて言っているのではなくて、精神的な安らぎのことを言っている。死んでも、私は神様と一緒にいられると確信をもっていた。多分、私の言っていることは貴方に分かってもらえないかもしれないが、死んだ後に何が起こるのか分かっていて。心は死なないと私は思っている。クリスチャンは、心は永遠であると思っているし、天国と地獄、二つの場所が存在すると信じている。言いたいのは、単純なことである。私が恐怖を感じ、パニック状態になった時に、神様は私を守って、安心させてくださった。私は貴方にイエスキリストがいることを知ってほしい。イエスキリストの中に、優しく、心広く、何でも理解して下さる父を見つけることができる。我々のことを理解できるのは、主イエスが人間として、かつて我々の住んでいる世界に現れたからである。貴方が、神様に心を開いたら、神様は貴方の話を聞いたり、または貴方に話をする。私が言っていることをききなことであると思っはいけない。これは、事実であり、私が他から聞いた話ではない、私がいつも経験していることである。

貴方も私が知っている神様を知るように 祈っている。God bless you !

大震災の思い出

傳 恵南（男）中国
神戸大学
（日本語訳：● 貴生）

壁にぶつかった私はやっと目が覚めた。その後、山が崩れ、地面が裂けたような揺れがやってきた。すぐに地獄に堕ちそうに感じていたが なにもできない。私はいまさら逃げても仕方がない（当時の状況では本当に逃げられるかどうかはいまだに分からない） と思って 大地震の審判を待っていた。明りはなく 周りは真っ暗であった。耳に怪異な音しか入って来ず まるでこの世界に馴染みの音が存在しない。

そのままじっと待っていて 一瞬間も非常に長く感じられた。私はこの自然の罰を受けて 自然の選択に任せた。突然に大地の揺れが静かになった。やがて、この災難から生きのびた私は 再生のチャンスをもらったように感動した。部屋から猛ラッシュで出た。驚いたほかの避難者の顔にも同じ感動が見られた。感謝に満ちた私は電話の前で 生まれて初めて、「もしもし、皆さんのおかげで助かりました」と叫んだ。

いつものように夜が明けた。しかし、地震による怖い景観が人々の目に入った。至るところに傷か出来、まさか危機一発の弾丸地であった。黒い煙はあちこちに充満し、火も燃えていた。泣き声も聞こえてきた。

数十秒で、港街神戸がこのように廃墟になったことを目撃した私は心が痛んだ。数え切れない人が傾いたビルと壊れた壁の下に埋まり、また、火の中で命が奪われた。

人類の面目はまったく失われ、文明と財産もこの大災難の中に無くなった。橋がなくなり どこに行っても凹凸があった。大自然の脅威によって人類は原始社会に戻ったようだ。

しかし ガレキから逃げ出した被災者の姿を見て 私は生命の不滅に感動した。いろいろな救援活動に参加し 災害を怖がらず冷静に対処する人々から、私も未来に強い自信を持つようになった。

すべては またゼロから始まる。人類も最終的には自然に勝つ。私は思う。人類は大自然を征服するために、単純に自然を壊すのではなく、自然を認識、自然と息を合わせ、また自然を利用しなければならない。人類は自然に属しているが、自然は人類に属していない。自然は永遠に動いているため、人類との衝突も永遠に続く。人類が求めるべきことは動いている自然との共存であろう。

被災留学生の心の傷を通して

福野ますみ（女） 日本
近畿大学 留学生センター事務室

いつも朝は6時過ぎに目覚ましで鳴って起きるのに、あの恐ろしい地震があった日は6時前に飼っている犬が嘔吐をくり返している音で目が覚めました。「うるさいなあ」と起きかけた時に地震がやってきました。すぐに終わるだろうと思ったのに揺れは段々大きくなりしばらく続きました。私の家では棚の上にのせていた物が落ちたりしただけで、ほかには特に被害もなかったのも、まさか神戸や淡路島があんなに大きな被害を受けているなんて思いもつきませんでした。

地震後、すぐにテレビをつけ、地震の被害の様子を見ていましたが、刻々と被害がひどくなっていくのを見ていて鳥肌がたったのを今でも覚えています。

地震当日、交通機関がマヒしたため大学に出勤することができず、地震発生の翌日に大学へ出勤しました。大学に着くとあちこちで校舎の窓ガラスが割れていて改めて地震のすごさを思い知りました。留学生センターでは朝からすぐ、神戸市内とその周辺に住んでいる留学生をピックアップし、連絡を取りましたが、電話が神戸方面に関しては全く通じず、被災留学生と親しくしている留学生や各国学友会の委員長または保証人に連絡を取り、何か連絡がないか聞いてみました。それで半分くらいの留学生については無事が確認できました。被災留学生の友人や保証人に被災留学生から電話があったら留学生センターに電話をしてくれるようにと伝えてもらったおかげで、地震後早い時期に被災留学生本人達と話すことができました。連絡のあった被災留学生達はみんな近くの小学校などに避難していて、「だいじょうぶ？」と聞くと、「寒い」、「おなかが減っている」、「のどが渴いた」、「国に帰りたい」またはちょうど試験時期だったため「明日試験なんですけど、どうしたらいいですか」（このことが一番みんな気になっているようでした）などを口々に繰り返していました。またほとんどの学生が「なんとか大阪に来れない？」と聞くと、「行きたいけど、道路は人や車や瓦礫でいっぱいだし、電車はもちろん動いていないし、それにまだ大きな余震が続いているので外を歩くのは怖い。」ということでした。

電話で話すのにも、後ろに長い列が続いていて、またテレホンカードではかかかりにくいため10円玉などの硬貨でかけているため長く話せないらしく、「またかけます」といって電話を切る被災留学生と話していると、聞いてあげるだけで何もしてあげることのできない自分がすごく情けなく感じました。自由に使えるヘリコプターでもあればすぐにでも迎えに行けるのにとつくづく思いました。

各国学友会の委員長たちは被災留学生が大阪に避難してくることができれば泊めてあげられるように手配していて、また地震後4、5日たった頃に彼らは自分達で被災地へ車で何時間もかけて行き、避難している被災留学生を迎えに行きました。地震後約一週間で神戸市内で被災したほとんどの留学生が大阪へ避難してくることができました。

大阪に来てから、友人宅などに避難していたため仮の住まいの手配をすぐに留学生センターでしました。大阪国際交流センターや大阪国際交流財団、また留学生支援企業推進協会等に問い合わせると留学生会館や社員寮などを結構早く手配することができ、留学生も地震後2週間後くらいに引っ越しすることができました。

被災留学生の中には「神戸に仲間がいて、その仲間達も一緒になければ自分一人だけ大阪に避難することはできない」という留学生もいたりしました。

被災留学生に地震についての話を聞くと、「あんなに恐ろしい経験をしたのはうまれてはじめてだ。」「ひとりぼっちで真っ暗なところにいて、死ぬかと思った。」「避難所の日本人の人達がとても親切にしてくれたのでうれしかった。」「避難所で食べ物をもらっていると、同じ量をもらっているのに、なんであんたらがそんなにたくさんもらってるのと言われた。いかにも”外国人なのに！”という感じだったのですごく嫌な思いをしました。」「アパートの隣の人や近くの人が死んでしまって、はじめは悲しくて恐かったけれども、あまりにもたくさんの人の死を見てみると、悲しいとかの感覚がわからなくなってきました。」「大阪へ（徒歩で）避難してくる途中、あまりにものどが渴いてスーパーによったら、その店の前に大きな犬をおいていて、入ろうと思ったら店の人が出て来て、飲み物を買いたいと言ったらペットボトル1本3,000円で、ビスケット1箱2,000円、ソーセージ1袋5,000円で売ってやると言われました。そんなにお金も持っていなかったので買わなかったけど、こんな時にひどいことをする人もいるなあと悲しくなりました。」など様々に経験したこと、感じたことを話してくれました。

私自身被災留学生といろいろ話しをしていて、地震後彼らが大学に来た始めの頃はどのようなふうと話せばいいか少し考えてしまいました。特に大きな被害もなかった大阪にいる私達にとっては想像もつかないほどの恐ろしい体験をして思い出したくもないのにと思ったりしている留学生も入るかもしれないのに、軽々しく興味本意のように地震について聞かない方がいいのかとか考えてしまいました。直接彼らと話していると、「大変やったね。」とこちらが一言いうと、次々と体験したことを話す留学生もいれば、すぐ

に涙を浮かべ「うん」とうなずくだけの留学生もいて、こちらも本当につらくなりました。ただ「もう大丈夫よ。」と一言言ってあげると、非常に安心しているようでした。
また留学生の中には、自分は大阪にいて被災していないけれども、友達が神戸で亡くなったということでショックを受け、アルバイトも休み、すべてにしばらくの間無気力になった学生もいました。
留学生の担当者として、このような災害後の留学生のショックをやわらげてあげるような対応の仕方についてのマニュアルのようなものがあればと思いました。

今回のような大きな地震は関西では初めてで、本学でも大学としてまた留学生センターとして様々な対応に遅れたように思います。今回の経験で、この件に関してはこの機関に問い合わせるといったようなことがよくわかりました。また新聞やテレビからも被災外国人又は被災留学生の多くの情報が得られましたが、かなり情報が分散していて集めるのが大変でした。また留学生本人達も義援金の件や罹災証明書の件などの情報を知らなかったりする学生もいました。
今後このような災害があった場合、ここに聞けば、ここに行けば外国人に関する情報がわかるという機関（国際交流センターなど）を決めておけば敏速に情報を得ることができるのではないかと思います。

最後に、今回の地震では神戸方面の各大学がかなりの被害を受け、日本人学生をはじめ、留学生や留学生担当者の教職員の方たちもかなり被害を受け、本当に心からお見舞い申し上げます。そして一日も早く復興されることをお祈りしています。

癒し難きこの傷

韓 基一（男）中国
神戸大学
（日本語訳：島津 琴子）

私が母志斌の名前を語る時、神戸に在住する留学生と、此の度の大地震に遭遇した留学生達の状況を思いやる多数の海外同胞及び日本の友人達は、直ぐに何かを感じられることと思う。それは12名の若い留学生の生命が、悪魔の様な阪神大震災によって無情にも奪い去られてしまった悲劇である。時の流れ行くに従い、人々は次第に彼等を忘れてゆくのかも知れない。しかし私はこの大地震を経験し、また母志斌の親友として永遠に忘れることは出来ない。天にいる母志斌の魂は私に何を求めているのであろうか？ 彼は自分が如何なる被害に遭遇したかを知っているだろうか？ そうだ、彼はすべての事を知りたいと思っている。今、私は自分の経験を手掛りにして、あの数日間に起きたすべてを回想し、学友であり又同郷の友でもある母志斌の霊を慰めようと思う。

地震発生の前日、私は中国にいる両親や家族に会う為の旅行から帰って来たばかりのところであった。発表を待つ論文が未だ出来上がっていなかったのも、その晩はすぐ下宿先から学校へ行き、急いで論文の完成にとりかかった。学校へ行く途中、私は二度母志斌に電話を掛けた。一度目は彼は不在であった。私は留守番電話のテープに用件を吹き込んでおいた。（今晚、学校へ出て来て過ごさないか？……）私達はコンピュータの問題でお互いに助け合う事が出来るし、また中国から持って帰った土産を、彼に食べてもらいたかったのである。私は彼が常々学校で夜通し研究しているのを知っていたので、夜、十一時過ぎ頃、二度目の電話を掛けた。彼はちょうど家に帰って来たところであった。私は彼に改めて私の気持ちを話すと、彼は返事をした。

「今日はとても疲れている。今晚はもう学校へは行きたくない。明日また会おうね。」そして彼はまた留守番電話に託しておいた私の話の辻褄が合わないとも言っていた。それから私は研究室のコンピュータの前でずっと朝四時過ぎまで原稿を作り続けた。大体、完成に近づいた頃、体も疲れきり、椅子を幾脚か寄せて、その上で寝込んでしまった。しかし誰が予測し得たであろうか。体を横たえてから小一時間ほど経ち、まだ夢見る間もない時に、突然悪魔の如き阪神大地震が発生したのである。私は建物から外へ逃げ出し、六甲山麓の大学の校庭から下の方を見ると、すでに何か所から真赤な火の手が燃え上っていた。この時私はこの地震のたゞならぬ激しさを感じ取った。一瞬、下へ救助にかけつけようかという思いが私の脳裏をかすめたが、いや、消防隊ももう出動している筈だ、私がかけつけて、どれ程の役に立つものかと思うと、その思いも瞬時に消えてしまった。

時々余震が続く、校庭へ避難していた学生達がすでに校内へ戻って行くのを見て私も研究室へ帰った。器具、家具類が倒れ散乱した室内を大体片付けると、また椅子の上に寝た。大方二時間ほど寝たであろうか、もう空は明るくなっており、先生や学生がすでに学校へ来ていて、お互いに最も気にかかっていた先生、学友、親友等の安全を知った。機械料の二人の教授は遠方にある自宅から急遽かけつけて来られ各研究室の人員の安全確認の調査表を印刷して配り、各研究所で調査をした後、記入申告するようにおっしゃった。

当時、研究室にいたのは私一人であったので、所属する研究室の任務をまかされた私は電話等により全員の無事を調査し始めた。

その後、私は現在のまたかつての幾人かの中国人留学生に連絡をした。ある者は無事であった。ある者は電話が不通で確かめようがなかった。母志斌へ電話をしたが、電話の反応はなかった。激しい被害に遭った多くの地区の電話は一切不通になってしまったのだ、連絡の方法も考えられなかった。ただし、彼が無事にいることがひたすら気になった。彼は逃げ出すことが出来たろうか？ 負傷したかも知れない？ と又別の思いが浮かぶ、もし遭難してしまったとしたら、もうどうしようもない。もし負傷をしたら、きっと救助されて病院へ行っているだろう。彼の妹は神戸に住んでいるしまた彼の従姉も神戸の近くに住んでいて必ず彼の住所を知っている。彼の様子を確かに行っている筈だ。また各研究室も皆それぞれ責任をもって安全調査をしている、母志斌は恐らく何も問題はあまい。無事だろう、私は彼の住所も知らないし助けに行きたくても何も出来ない……、私は心中でこの様に考えると、もうそれ以上に何の措置もとらず、そのままコンピュータの前で自分の研究を始めた。この時私は母志斌の所属する研究室へ連絡をとり、彼の様子を尋ねられた筈だったのに、何故だろうか私はそれをやろうとしなかった。しかも、この大事な責任を彼の親類と彼の研究室の人達に安易に頼っていたのである。あれ以来、思い起こすと、全く不思議な心理状態にあった。この様な突発的な危険に遭うと、なんとただ、思う事は自分の勉強のこと、自分の生存の事だけであった。しかも人の為に何かしなければならぬとは考えもしなかった。中国にいて、私の安否を気遣っている父母や妻達にさえ電話をしなかった。ただ、この

様な体験がほとんどなかったと言える。ただし、ニュース、報道等にも関心を寄せていたが、初めの二・三日の報道の死亡人数はそれほど人々を驚かす程の数ではなく、遭難したかも知れぬ総人数を予測し得なかった。それ故、私は地震の危害に対し、それ程重大だとは考えず、しかるべき反応も出来なかったのである。

総ての交通が麻痺状態になり、私は止むを得ず学校に留まり、何時も持っている食糧品で二日間持ちこたえようと、三日目には私は西区の自宅へ帰ることに決めた。その親戚達も大変気をもみ私を一日も早く帰らせようとした。同じ研究室の四回生の学生が車で私を三宮まで送ってくれたので、それから歩き続けて須磨にたどり着いた。途中、通った地区は最も激しい被害を受けた所で、この大地震の全面的な被害と深刻な結果を身をもって強く感じたのである。三宮は平常はにぎやかな街であったのに、この凄惨な姿の変わり様は見るに忍びず、新長田の居住区は一面焦土と化し、さらに白煙の立ち登る残骸の上で悲痛にくれる人々の群が、悲しみの余り泣く声さえも失い、焼土を掘り起しているのを度々見かけるのだった。

三宮を通る時、私はわざわざ市役所へ立ち寄った。心の中で、少しでも救済活動が出来るのではと思ったからだ。作業員が整然と続々救援物資をはこんでいた。私も彼等の列に参加しようとしたがなんとなく入りこみようがなく、自分は外国人だと感ずるとすぐ止めてしまった。実のところ、やはり私の気持ちには切羽詰まる思いがまだ足らなかった。

須磨のある避難所で私は親戚の車が迎えに来てくれるのを待っていた。この時、ちょうど救援物資が運ばれて来て、その場の人々が自ら物資を運んでいた。私もその列に参加し、初めて自分は外国人ではないのだと感じた。僅かな手助けをしたに過ぎないが、それでもボランティア活動に参加したと言えるかも知れない。

西区にある自分の下宿に帰ると、まだ連絡していなかった学友達に電話を掛け始めた。母志斌に電話をしたがやっぱり通じない。平常、お互いに接触している学友とはほとんど電話は通じたのに、しかし

母志斌と他の一人とは連絡がつかなかった。この時、私は何か予感を覚え、母志斌の妹に連絡すべきだ、と以前母志斌が使用していた彼の妹の家の電話番号を探したが見つからず、また他の学友に尋ねても誰も知らなかった。

地震発生後の九日目、ついに神戸大学の同級生から決して聞きたくはなかった母志斌死亡の消息が伝えられて来た。母志斌は被災してしまったのだ。翌日、私はバイクで学校へ出かけた。そして彼の研究室で彼の住所と彼の妹の電話番号を聞くと、地図を持って母志斌の遭難した場所を探した。そこは灘区にあり、丁度活断層の上に位置し家屋倒壊の最も激しい所であった。私の住んでいる西区より遥かに悲惨な状態である。二階建家屋はほとんど全壊し、残った家屋も危険に及びかねない状態である。管理人から母志斌の部屋を教えてもらった。もともと二階建の家は二階部分が下に落ち一階は全部押しつぶされてしまっている。母志斌の部屋は一階の十いくつの部屋の一つで、掘り出した二階部分からやっと彼の部屋を探し出すことが出来た。

管理人の説によると、一階の部屋にはもともと四人が住んでいたそうである。地震の当日の晩、一人は外出して帰宅せず、一人は丁度新聞配達に出ていた。当時倒壊した部屋にいて下敷きになったのは管理人と母志斌の二人だけだった。管理人は地震発生後、五時間たって救出された。管理人の部屋にあった家具によって、二階部分が落ちても、まだ空間があり、彼は助かったそうである。全く怪我は無かった。

母志斌が遭難した場所に来て見ると、こじ開けられた床板の下からほとんど隙間も無い一階が見つかった。掛け布団に血の塊が残っていた。その他は何も見えない。大方、彼は落下して来た二階に圧迫されて身動きが取れず窒息死してしまったのであろう。

母志斌の為に必ず彼の遺品を探して彼の肉親に送ろうと思い、管理人の同意を得て、一着の背広を見つけた。きっと彼のものだ。この時、母志斌の所属する研究室の日本人学生等が幾人か生花を待ってかけつけて来た。私達は相談して、出来るだけ彼の遺留品を探し出そうと決めた。が、余りにも激しく押しつぶされている為に彼が普段学校へ行く時に背おっていたカバンと何時も着ていた数着の服以外最後まで何も掘り出せなかった。

彼等が帰った後、私は、またそこで母志斌の倒れていたであろう隙間を見、彼がどの様にして死んだのかを想像し、同時に写真を幾枚も撮った。それから直ぐ母志斌の妹と従姉に知らせ、彼女達に言った。

「何か私にして欲しい事があったら言って下さい。全力を尽してやります。更に方法を考えて母志斌の大事な遺品を探します。」

しかし彼の妹は「もう必要はありません。」と言って、翌日遺骨を持って中国へ帰って行った。実は、私は彼の従姉と神戸で会って、私があずかっていた母志斌生前の写真を渡し、それから遭難した場所へ行き、もう一度、遺品をもっと探そうと思ったのだが、彼女は仕事が忙しいからと言って、ずっと来ることはなかった。

数日過ぎて、一人の中国人留学生から大阪の中国総領事館が犠牲となった中国人留学生の追悼式を行うことを知らされた。私はこの事を数人の母志斌の学友と彼の従姉に通知し、出来るだけ彼等が参加してくれることを望んでいた。しかし追悼会の当日になると仕事が忙しいとか、あるいは別の理由などの言い訳をして、参加しなかった。その結果、私と私に通知してくれた留学生と二人だけで行った。

追悼会では、言うまでもなく私の気持ちは激しく動き、母志斌の遺影を見ながら彼の生前の周囲の人達の行動と態度を連想し、悲しみに耐えられず、声を放って泣いた。

「母志斌、君の死は余りにも突然だ。役に立ったかどうかはともかくだ。誰も君を助けなかった。私もだ。君は死んで冷たい世界にいる！」
或る記者が私に尋ねた。

「あなたは母志斌に何を話したいですか？」私は答えて言った。

「私は君の為に力を尽せなかった。私は君の友達とは言えません。本当の友達なら君が行方不明になった時、あらゆる方法を考えて探し出すべきだったのです。私ばかりではありません。平常君が思っている友達もです。あの時、君を救う為に力を尽くませんでした。」

母志斌の従姉の話によると、現場にいった医師の判断によると母志斌は一階で圧迫されてから、十分以内に窒息死してしまったそうである。しかし、そう言っても、私はこれは現実であるとは、認めたくはない。地震発生の日、自衛隊が彼を救助に来る前に少しでも早く彼を探し出すのが当然であったのに、誰も彼のところへ行行った者はいなかった。このところ私は自分を責めるだけでなく、彼の生前、周囲にいた人々に問いたい。あなた達は自己を恥ずかしいと思はないか？ 自分の全力を以って母志斌を救う努力をしなかったと思いませんか？ とくに母志斌の妹さん、地震の時、お互に最も気を遣うのは骨肉の間柄であることは誰も承知のことである。何故、貴女はあの時、自分の事ばかり考え、貴女の兄の事を忘れたのか？ よもや貴女は日本人と結婚し、もう自分の同胞を忘れてしまったのではなからうか？

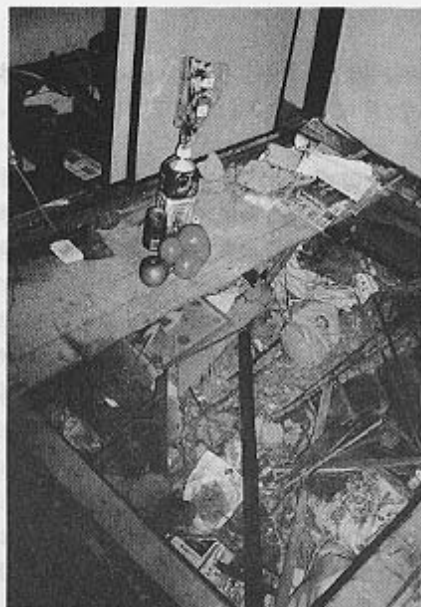
当然、地震の起きた当時、自己の安全の為に他人を想う余裕などない。ただし認めないわけにはいかない。この世界は冷酷過ぎる。人と人の関係はすべて金銭の基礎の上にたち、皆、互いに利用し合っている。お互に自己を無視し、助け合い、温かい心を持つことはすでに見られなくなろうとしている。

母志斌と私達は永遠に別れてしまった。ただし彼の声や、あの笑った顔は何時も私の眼前に浮かぶ。彼は大変な努力家であった。半年間、研究生として通学した後、神戸大学の博士前期課程の試験に合格したのである。彼の指導教授は彼を大へん重視し、正規の課程に入る前に既に研究課題を用意した。そして母志斌も積極的に準備にとりかかった。彼は多くの本と研究に関する基礎書籍を読んでいた。これは私達、留学生の中でも稀に見る学生であった。将に彼は志に燃え、大学院に進み、機械製造の領域で自己の才能を精力的に発揮しようとしていた時に、不幸にも災難はわざわざ彼の身の上に落ちた。中国人民は一人の優秀な青年を失ったばかりではなく、中日両国の友好交流事業にとっても、重大な損失とすべきであろう。

出征を前にして身己に逝く。君の死は君と私達に多大なる無念の想いを残した。もし地震のあの晩、君が学校へ来ていたら、もし地震発生直後、少しでも早く救出されていたら……。

母志斌の死は私達にどのような教訓を残したであろうか？ 沢山あると思う。かつてない恐ろしい経験と人間関係のあり方に警鐘を鳴らしてくれた。人と人との関係は冷ややかになり、災難に遭った時のお互いの同情と助け合いも少なくなった。人々は金銭を以って基礎となす関係からは抜け出そう。皆、自己の愛と奉獻の心をもって、私達人類と自己の魂を挽回しよう。

終



母さんの部屋（1階）

2階の床板をめくって撮った写真で、お供は同じ研究室の仲間が供えたもの、1階は、ほとんど隙間がなかった。



母さんの住居

写っているのは2階部分で、この1階に母さんが住んでいた。1階は、完全に潰れている。

母 志

母さん左から2番目

筆者 右端（横シマのセーター）

韓基一さん



回 想

ミカ ヘルシングウス（男）フィンランド
神戸大学
（日本語訳：片山弘倫）

1995年の始まりはとても素晴らしかった。お正月が過ぎてすぐに、私は留学生仲間で長野にスキー旅行に行った。とても楽しいスキー旅行だった。もうすぐ私はフィンランドに帰るけど、今年の春は何だかいいことがいっぱいあるような気がしていた。

スキーから帰ってきた最初の月曜日、疲れていてあんまり寝てなかったの、私は家で休んでいた。でも火曜日にはゼミと日本語の授業があったので、大学に行かなくてはならなかった。その日はとても静かだった、というのも友人のペーターがクリスマスで故郷のドイツに帰っていて、まだ日本に戻ってきていなかったのだ。ミャンマーのルウィンさんは授業に出てたけど、彼女の友達のキンさんはいなかった。キンさんはレポートで忙しかったのだそう。キンさんはこの春に入試を受けるつもりだったので、やらなくてはならないことがいっぱいあった。キンさんは自分の専門の他にも英語とスペイン語を勉強していた。キンさんは漢字をそんなに知らなかったから、きっとたいへんだっただろう。ルウィンさんもキンさんも生活費を稼ぐためアルバイトをやっていたから、自分の時間はあんまり持っていなかった。

ルウィンさんはこの春にミャンマーに帰ろうと決めていた。ミャンマーではいい仕事を見つけるのは難しいそう、で、ルウィンさんはちょっと悩んでいた。去年の秋にルウィンさんは、アメリカにいるミャンマーから移住した友達のところへ遊びに行った。ルウィンさんはミャンマーに帰る前にオーストラリアかアメリカかヨーロッパあたりを、もうちょっと旅行しようかと考えていた。ミャンマーに帰ってしまうと手続きやお金の問題があって、なかなか海外旅行はできないそうだ。

その週の金曜日に私たちは帰国のことについておしゃべりしていた。ルウィンさんは荷物をミャンマーに送ろうとして、値段を心配していた。ルウィンさんは自転車を持って帰りたいと言っていたし、カラオケの機器も買いたいと言っていた。ルウィンさんがカラオケを好きだなんて、私はそのときまで知らなかった。

ルウィンさんに、コーヒーでも飲もうか、と誘ったんだけど、ルウィンさんは三宮で用事があるとかで忙しそうだったので、そこで別れた。私たちは次の金曜日にとにかく会ってパーティーの計画を立てなくてはならなかった。金曜日の日本語中級のクラスの生徒で集まって、ペーターのアパートでパーティーしようかという話があった。そのパーティーには先生も来るということだった。

実は去年の秋にも私の家でパーティーをやったことがあった。そのときは日本語の授業を取っていた学生は少なかったの、私と先生とキンさんと台湾のチョウさんだけの小さなパーティーだった。ルウィンさんはアメリカに行っていて、他に授業に出ていたルイスさんとチンさんとは連絡がつかなかった。

去年の夏から私たちのグループはまるで小さな家族みたいだった。たぶん少人数のクラスで気楽にやっていける雰囲気だったからだろう。北海道にキャンプに行こうかという話も出ていたんだけど、チンさんは友達がアメリカから帰ってくるとかで帰国していたし、ルイスさんはバりに、ルウィンさんはアメリカに遊びに行く計画を立てていた。私たちは北海道のガイドを読んで、キンさんは友達が前に北海道で撮ったというビデオを見せてくれた。それを見ているうちに、北海道に、しかもキャンプに行くというのは何だか変なような気がしてきた。それで、今回の北海道旅行はやめにして、またいつかどこか別の所へ行こうということにした。

ルウィンさんがアメリカに行っている間、私はキンさんと何回か会った、というのも二人とも特に何もすることがなかったからだ。キンさんがたまにミャンマー料理を作ってくれたり、一緒に神戸に遊びに行ったりした。キンさんは自分の国のことや家族のこと、前にホテルで働いていたときのことなどを話してくれた。キンさんはいつも内緒にしていた自分の年齢を教えてくれた。これは秘密にしておかなくてはならない。

13日の金曜日に阪急六甲から大学に向かって歩いていたときにインドネシアの友達に出会った。彼は、今日が入試があるので休講だと言った。それはまずい。どうやってパーティーの計画を立てようか。まだ時間さえ決めてないし、場所を知らない人もいるのに。とにかく教室に行ってみよう、たぶんみんな入試のことなんか知らないだろうから。

教室に行ってみると、ペーターがもう来ていた。え、なに、休講だって。みんなが同じようなことを言っていた。それで、ペーターのアパートの地図を黒板に書いておいた。後から来た人もそれを見ればわかるだろう。電話番号がわかっている人には電話して、その次の日にパーティーに来るように連絡した。

それから、私とペーターとキンさんとルウィンさんとで宝塚まで食料品と調理用品を買いに行った。その次の日に、女の子たちがルイスさんやニコライと一緒に肉を買いに行っている間に、私たちは飲物を買ってからペーターのアパートに行こうということにした。

ちょっとパーティーの打ち合わせをしてから、私たちは食事に行った。金曜日には、私とペーターは他の女の子たちや神崎先生と一緒に、よくおひるごはんを食べながらいろんなことを話した。ポピュラーな話題は、犬や昆虫のフライなんかのエキゾチック料理のことだった。キンさんはときどきミャンマーの田舎の少数民族の料理について、とても色鮮やかに話してくれた。キンさんは肉を食べないので、よくお弁当をレストランに持って入った。私とペーターはいつもキンさんのお弁当の味見をしたけど、彼女の料理はすごく上手だった。タイ料理に口が慣れてくると、ミャンマー料理もそんなに辛いとは思わなくなった。

ごはんを食べてから私たちは4人で御影に行った。ペーターは御影に行くのは初めてだった。ミャンマーの女の子は、2人とも郡家マンションというその大きなアパートの一階に住んでいた。そのマンションにはもう2人、彼女たちの友達に住んでいた。一階に住んでいるのがエイティンさん、2階に住んでいるのがモーモーフラさんだった。その2人には出会ったことはあったけど、あまりよく知らなかった。

キンさんの家でミャンマーの民族音楽を聞いた。キンさんは今の歌よりも昔の古い歌の方が好きだと言っていた。ミャンマーの女の子たちはよくカラオケに行っていて、またいつか私とも一緒に行こうなどと話していた。ルウィンさんはアメリカで撮った写真を持ってきた。写真はサンフランシスコやロスアンジェルスやアトランタやどこかの国立公園などで撮ったものがいっぱいあって、アメリカ旅行をほんとうに楽しんできたようだった。

それから買い物に行こうということになって、店に何軒か行って食料品をいっぱい買った。こんなにいっぱい食べられるんだろうか、とちょっと心配になるほどいっぱい買った。ルウィンさんはソースなどの調味料を選んでいった。みんなそうは思わなかったけど、ルウィンさんは高いものほど良いと言っていた。ルウィンさんにとっては良かったことに、みんな彼女が選ぶにまかせていた。何と言っても、ルウィンさんは料理に最大限の情熱を燃やしているのだから。ルウィンさんはおいしい料理を食べるのが好きで、ダイエットなんか考えたこともないなどと言っていた。

ミャンマーの女の子達がいつもバイトしてる店にも寄ってみた。外から見たことはあったけど、中に入るのは初めてだった。私は店の人が後で私たちのことをなんて言うんだろうと思った。その店は阪神の駅に近かったので、よくキンさんと一緒に前を通り過ぎることはあった。一緒に神戸に行って帰って来たときに、キンさんは何回かバイトにちょっと遅れそうになったことがあった。そんなときに私は道路の反対側にたって、キンさんが大学が忙しいとか何とか店の人に言い訳するのを聞いていた。キンさんと一緒に京都に行ったときのことは私は覚えている。最初キンさんはインフルエンザにかかったことにしようと言っていた。でも、それじゃ雇い主が夜に電話してくるかもしれない。キンさんは結局、大事な講義があるとか何とか言い訳を考えついたみたいだった。

買い物が終わってから、キンさんの家でコーヒーを飲んだ。キンさんがどこからか持ってきたドイツのビスケットについて私たちは話し合った。ルウィンさんはそのビスケットが好きで、ペーターにもっと送ってくれるように頼んでいた。

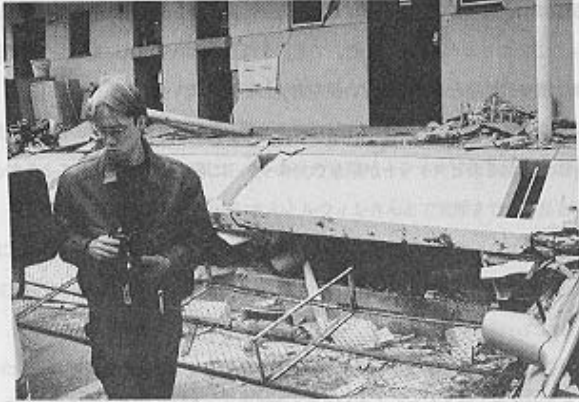
ペーターがチョコレートをあげると約束したのでルウィンさんはとても幸せそうだった。コーヒープレイクの後、私たちはそれぞれ別れ、ミャンマーの女の子たちはアルバイトに行き、私たちは日本語の授業の前に宝塚に食料品を買いに行った。

それは素晴らしい土曜日だった。ペーターの家で食事の準備をした。ルウィンさんはとてもいきいきしていた。ルウィンさんは、私たちがビールばかり飲んで手伝ってくれないと文句を言っていた。ルウィンさんが鍋の野菜を刻んでいるところを写真に撮った。キンさんはとても陽気で、ルウィンさんをからかったりしていた。とにかく、とても楽しかった。ハクさんという中国人の女の子は自転車でけがをしたとかでパーティーには来ていなかったけど、神崎先生は来ていて、ペーターが椅子の代わりに使っている大きなボールをととても好きみたいだった。みんなで料理を始めると、ルウィンさんもビールを飲んだ。ルウィンさんはペーターの持っていたアバのCDが好きだと言っていた。今まで知らなかった彼女の新しい一面だった。私たちは7時間にわたって音楽を聞き、食事を楽しんだ。7時間というのはちょっとした記録だった。

夜にキンさんは私の家にやってきた。私の家はペーターのアパートから庭をちょっと横切ったところにあった。よく晴れた満月の夜だったので、キンさんに私の望遠鏡を見せてあげた。キンさんと神崎先生は私が買っていた日本語の本を見ていた。キンさんは私の持っていたビデオを見ていて、テレビでやっていたときに見のがしたブラックレインを貸してほしいと言っていた。いつか一緒に見よう。私がキンさんのくれたクリスマスカードをテーブルに置いていたのを見て、キンさんはとても喜んでいて。それは本当にかわいいカードだった。ルウィンさんとキンさんは、何か思い出になるものが欲しかったようだ。私たちは写真を撮っていろいろと話した。いつかミャンマーに行ってみよう。1月の末にみんなで伊勢に旅行に行くことにしていたので、詳しい予定についていろいろ話した。

夜がふけてきたので、私とペーターはミャンマーの女の子たちから借りていたガスコンロや鍋なんかを運ぶのを手伝って一緒に駅まで行った。電車はすぐにやってきた。私たちは電車が行ってしまうまでお互いに手を振った。それは土曜日の夜遅くのこと、空を見上げると満天の星があった。

火曜日の朝、5時46分、強い地震が神戸地方を襲った。郡家マンションの1階は崩れ落ち、50センチくらいの高さにまで押しつぶされてしまった。ワイ・モー・ルウィンさんとキン・テト・スウェさんは重傷を負い、そして、亡くなった。



写っているのはミカ、
ルインさんとキンさん
のアパートで
見えているのは2階で
1階は埋まっている。



私の人生の変な2ヶ月

どういふわけかそんなに不自由は感じなかった。私は半分眠っていて、ちょっと変な夢を見ていた。そのうち、私はもう起きていて、これは夢ではないということが少しずつわかってきた。部屋は強く揺れていたのに、体はとてもだるかった。とても強い地震みたいだなあ。おもしろい。映画みたいだ。ようやく私は起きあがって自分の体を守らなくてはならないことに気がついた。部屋の中の何もかもが落ちてきそうだった。台所はきつとめちゃくちゃだろう。壁は押しつぶされて変な音を立てていた。いつつぶれるかわからない。天井もすぐに落ちてくるだろう。地震の時にも安全だと言われていたドアの下にもぐっていよう。ドアのところまで這って行って、ドアを閉めた。椅子と棚がすぐ隣にあった。部屋全体が強く揺れていたのでもっと不自由だった。棚にあったものが全部落ちているのがわかった。棚と壁の間に挟まっているものもあった。畜生、もし私が大丈夫だったら、部屋中に散らばっている漢字のカードを揃え直さなくてはならない。壊さないように気をつけて眼鏡を探さなくてはならない。

しばらくして、揺れは止まり静けさが戻ってきた。結局、私は死ななかつたようだ。窓の外を見てみると隣の建物も大丈夫みたい。ペーターと坂根さんも生きているだろう。真っ暗だ。5時46分。まだ早い。もうちょっと眠ってから、今日どうするか考えよう。停電だし、何もできないし。寒いので外には出たくない。でも、ガスが漏れていたら家はすぐに燃えてしまう。たぶんすぐにみんな出てきてやかましくなるだろう。そうなったらもう寝てられない。だるいけど、もう起きた方がいいみたいだ。

眼鏡を見つけた。本棚は崩れているようだ。ラジオもテレビも何もかも床に落ちている。短波ラジオは本棚の下にあるみたいだけど、重くて下から取り出せない。私はとてもラッキーだったみたいだ。もし本棚が逆の方向に崩れてきていたら、私はきつと重傷を負っていただろう。懐中電灯はどこだろう。地震の時に使えるようにいつもベッドのそばに置いているのに。何を探すのも難しいみたいだ。とりあえずガスと電気を止めたほうがいいだろう。かぜをひきたくなかったので、着替えた。おとなしくしていたほうがいい。何かの病気が蔓延するかもしれない。この辺りには亡くなった人々がいっぱいいるだろう、社会の状態もしばらくはめちゃくちゃだろう。私はそのとき、イランの地震を思い出していた。そのとき、テレビは雪の降る中でテントの前に立ち尽くす人々の様子を報道していた。まるで映画「ザ・デイ・アフター」のアスファルトの戦士みたいだ。今こそ、映画でみたサバイバル技術を試すチャンスだ。

真ん中の部屋はだいたい大丈夫だった。そこには家具を置いていなかった。カメラは机の上にあるみたいだ。よかった。そのカメラは私の家にあるもの全部を合わせたのと同じくらい高かったのだから。この大災害の写真を取っ

ておこう。人生でまたとないチャンスなのだから。

よく見えなかったけれど、台所はめちゃくちゃみたいだった。冷蔵庫が部屋の真ん中にあった。50センチも動いたのだ。割れたガラスやお皿が部屋いっばいに散らばっていた。部屋に何とか入ってガスのバルブを閉めた。ストーブは落ちていなかったのだからガスは漏れていなかった。

食器棚もずれていて、中身はその辺に散らかっていた。テーブルは私の台所には少し大きすぎたんだけど、結果的にはその大きなテーブルが食器棚の倒れるのを止めてくれて、そのおかげで壊れずにすんだものもあった。しばらく片づけてから私はドアを開けた。私はずっとそのドアが嫌いだっただけで、どうして内開きなんだろう。靴なんかをドアの前に置いておくと、なかなかドアは開けられない。

外では塀の一部が崩れて自転車を押しつぶしていた。階段は大丈夫みたいだった。隣の人はもう外に出ていて大丈夫だった。まもなくみんな外に出て来始めた。

建物の責任者が歩き回って損害状態をチェックしていた。それからすぐにペーターと坂根さんに会った。2人は大丈夫だったけれど、部屋はめちゃめちゃだそう。坂根さんに懐中電灯を借りて自分の部屋に戻った。今度は簡単に私の懐中電灯は見つけられた。ラジオがあったけれど音が出なかった。壊れてないようだったけど電池がなかった。カメラは大丈夫みたいだったのでまず部屋の中とアパートのまわりを撮った。太陽が上ったら写真を撮り始めよう。

ペーターはカメラを取りに戻った。全然火事が見えないのでちょっと驚いた。どの家もガスをつかっているのだから、どこかの建物は燃えているはずだと私は思っていた。フィンランドではガスは危険だと思われているので、家庭ではあまり使われていない。他の場所はどうなっているのだろうか。

私たちはその辺りを歩き回った。フェンスが壊れていて道路には裂け目がたくさんあった。阪急の線路は曲がっていた。たぶん何週間も電車は通れないだろう。壁と屋根が壊れている家があったし、つぶれてしまっている家もあった。そのうちに救急車がやってきた。けがをした人がいたのだ。山の近くでは公園が1メートル近くも沈んでしまっていて、道路を通れなくしていた。線路のそばに大きな裂け目ができていて、車が一台その中にはまりこんでいた。

ポータブルラジオを聞いている人がいた。震源は淡路島の近くで、マグニチュードは7だということだった。ここでさえこんな状態なのに、震源地はもっとひどいだろう。

酒屋さんの近くで倒れたアサヒビールの販売機を起こし上げようとしている店の人を手伝ってあげようとしたけれど、それはあまりにも重すぎた。私たちは、夜にビールを飲みたいときにはいつもその酒屋さんに行っていた。別の人が、揺すった後の瓶は破裂しやすいよと注意してくれたので、自動販売機を起こすことはあきらめた。店の人が、神戸ではビルが倒れ火事が起こっているニュースを聞いたと言っていた。

アパートに戻ると電気は通じていた。テレビを床から持ち上げてスイッチをいれたけど最初は反応がなかった。プラグが全部ソケットから外れていたのだ。プラグをつなぐとテレビは破壊の様子を映し始めた。それをビデオに録画した。テレビは死傷者のことを報じていたけれど、自分の目で見ていなかったからか、最初はそんなに大したことだとも思えなかった。

水道がまもなく止まるようだったから、空き瓶に水を詰めた。しばらくして水道が止められた。みんな列をなして電話をかけたので、情報網は大混乱に陥った。学校では災害時には電話をかけないように教えられているはずなのに、どうしてみんな守らないのだろう。開いている店があれば、食べ物と飲物を買っておいたほうがいいうのだ。

テレビで御影の様子を見た。建物は何れもひどい状態で、ほとんどは完全に壊れていた。そして大火事だった。御影に住んでいる友達は大丈夫だろうか。倒壊した高速道路のすぐ近くに住んでいる芦屋の友達は大丈夫だろうか。私とペーターは西宮まで歩いて行って、そこに住んでいる中国人の友達を探そうとした。そして、カメラとフィルムを持って南に向かって歩きだした。

行き方はすぐに分かった。いつかの夜に三宮のバー、イズント・イットで私たちはカクテルを飲んだことがあった。ちょっと酔っぱらった韓国の女の子におごってもらって、とても楽しかったのだから、私たちは遅くまでそこで飲んでた。駅に行く途中に、その日は国民の祝日で電車は休日ダイヤで動いているのだから最終電車がいつもより早いということを感じた。西宮北口まで行けば電車はまだあるけど、私たちが西宮に着く前に宝塚行きの最終電車は出てしまっているだろう。結局その通りで、私たちは歩いて帰らなくてはならなかった。タクシーは高いので乗りたくなかった。小林まで50分ほどかかったけど、帰る道は分かった。次の日は1時頃まで寝ていて、目覚めは最悪だった。

西宮に向かって歩いていくと、被害はずっとひどかった。仁川でさえ被害はかなりのものだった。甲東園近辺の様子もひどく、家がたくさん倒れていた。店がいっぱい入っていた駅の近くのビルは、1階の部分がなくなっていた。そこの2階には友達のアパートがあったのだから、そのビルのことは私もよく知っていた。友達はそこに住んではいなかったけれど、子どもの英語教室としてそのアパートを使っていた。彼女の姿はなかったけれど、大丈夫だったらたぶん自分の家を片づけているのだろう。全部で亡くなった人の数はどれくらいになるのだろう。

門戸厄神と西宮北口の間では倒壊した家はかなり多かった。家の残骸は阪急の線路に散らばっていた。まだ煙が出ている家も見えたし、そこらじゅうでガスの臭いがしていた。

西宮に向かって歩いていくと、開いている店があった。人がいっぱい入っていたけど、商品のほとんどはもう売り切れていた。それでも何とかカップヌードルとソーセージとビスケットを買って、歩きながら食べた。西宮の友達は、私たちと出会う時はいつも駅まで迎えに来てくれていたのだから、彼の家を探すのはちょっと難しかった。しばらくその辺りをうろつきまわった後で、私はその友達のアパートを見つけた。

周りの家は崩れていたけれど、そのアパートは何とか持ちこたえていた。ドアをノックすると友達が出てきた。

彼もアパートも大丈夫みたいだった。ものが落ちてきてガラスとお皿が割れていた。彼はちょっといらいらして、これからどうしようか考えていた。すぐにでも日本を離れて中国に帰りたいようだった。幸い、彼の奥さんと子供は地震当時は北京にいて被災は免れた。彼は中国に電話したが、親戚みんなとても心配していたそうだ。

午後になって私は故郷の両親に電話をかけようと思った。地震があったのはフィンランド時間で早朝だったので、フィンランド人はほとんどまだ地震のことは知らないはずだったから。電話がつながった。私は小さい地震があって町の中には壊れた所もあるけれど私は大丈夫だと言った。両親は朝のニュースで地震のことを知っていた。私ははっきりしたことがわかったらまた電話すると言って電話を切った。

電話をかけてからもうしばらく友達の所にいてチョコレートやビスケットを食べたりした。歩いて帰ると私のアパートまで一時間もかかるうえに夕暮れが迫っていたので長居はできなかった。そのうえまだ多くの場所で電気が通っていなかった。

歩いて戻る途中にもっとひどい現場を見た。新幹線と高速道路の橋げたの残骸があったのだが、コンクリートは崩れていて、鉄筋はガラスのように曲がっていた。ある場所では新幹線のコンクリートの脚が50センチほど地面に埋まっていた。古い家ほどひどい被害を受けたようで、中には瓦礫の山と化してしまっているところもあった。新聞を見ると新たな犠牲者数が見積もられていた。その時点で400人を越える人々が犠牲になっていた。信じられなかった。

夜にはラーメンを食べビールを飲んだ。水はなかったけど冷蔵庫にはビールがいっぱいあった。ダイエーで輸入ビールのセールをやっていたときに味見をしてみようといろんな種類のビールを買い込んでおいたのだ。それがとても役に立った。断水してからはビールを水の代わりに使ってカップヌードルを作ろうと考えていた。ときどき私のアパートにも余震が感じられたけれど、素晴らしい夕食だった。そんな時には、石油ストーブのスイッチを切っただけでも逃げられるようにしていた。大きな余震がくるかもしれないという情報があったので、窓から逃げる心づもりもしていた。

夜に芦屋と御影の友達に電話をかけたけどつながらなかった。呼出音はしたけど誰もでなかった。電話機が壁から切り離されていたのだろうか。私にはどうしようもなかった。すぐに芦屋と御影に行ってみようかとも思ったけどこんな暗闇の中じゃ行き方が分からないだろう。とにかく今夜は寝て明日の朝早くに出発しようと思った。あんまりいい夜じゃなかった。余震のたびに目がさめ、友達のことが気になった。テレビを見ると御影の近くのビルが燃えていた。

朝になって私は歩いて出発した。電車だと40分で行けるのだけど、歩いてならどれくらいかかるだろうか。ペーターは自転車まで六甲に行った。途中で御影の様子を見ていくと言っていた。

西宮北口から阪急の線路に沿って歩いていった。すぐたくさんの人たちが大阪に向かって逃げようとしていた。中には何時間もかかって西宮北口まで歩いてきた人もいた。スーツケースを持ったサラリーマンもいたし、赤ちゃんを抱いたお母さんもいた。手押し車を押したお年寄りもいた。それは、アメリカ映画で見た、カンボジアの人々がクメールルージュに追われて都市から田舎に移住させられる光景に似ていた。

人々が逃げていた一つの理由は港のどこかでガスが漏れていたからだった。テレビを見ると芦屋と東灘区の一部に避難勧告が出されていた。私は大阪に向かって逃げていく人たちは反対の方向に向かっていたので、警察や自衛隊に尋問されるかもしれないと思っていた。

夙川の近くでは阪急電車が壊れていた。それはまるで空爆の後のようだった。道がなくなっていたので、私は他の人たちがやっていたようにフェンスをよじのぼって線路の上を歩き始めた。芦屋まで線路の上を歩いて、私は友達の家に行く道を見つけた。ガスのせいでその辺りにはほとんど人はいなかった。テレビではもしガス爆発があれば100から200メートルくらいの火の玉ができて、そのうえ風にあおられて辺りは火の海になるだろうということだ。そんなことになる前に逃げ出さなくてはならない。

人を避けるために狭い道を選んで進んだ。ヨーロッパだったら警察が道路を封鎖して人々が危険な場所に近寄れなくするのに。とにかく私の身には危険は及んでこなかった。なにもかもが混沌としていて、誰も他人のしていることにかまっている余裕はないみたいだった。

倒壊した阪神高速道路の辺りで、報道陣が集まっていた。私は倒れた高速道路の様子をカメラにおさめた。高速道路の下を歩いた時には、頭の上の道路が壊れていたので気をつけなくてならなかった。誰も私を止めなかったのどこへでも歩いていくことができた。近くの豪華な家は崩れていた。とても現実とは思えず夢を見ているようだった。

ようやく友達のアパートがわかった。彼女は家にいなかったけど建物は大丈夫そうだった。きっと誰か他の友達のところに行っているにちがいない。私は書き置きを残して御影に向かって歩き始めた。西の方に進んでいくと被害はますますひどくなった。大きな家が倒れていて、車がその下敷きになっていた。線路の様子もひどかった。復興には長い時間がかかるだろう。

阪急御影にたどりついた。倒れた建物が道路を塞いでいて通れないところもあった。電線は倒れた電柱にぶらさがっていた。辺りはガラスの破片でいっぱいだった。友達のアパートの近くはほとんどが燃えていて家の残骸の中からまだ煙が出ていた。その様子を立ったままじっと見つめている人もいた。家をなくしたか家族をなくした人だろう。

友達のアパートに行こうとしたけど進むことができなかった。辺りはすっかり変わり果ててしまって、前に見たことがある建物がどれなのか見分けられなかった。一時間近くも歩きまわっても、結局どれが友達のアパートなのかわからなかった。足に疲れがきていた。これから家まで3時間歩かなくてはならない。宝塚に着くまでに暗くなるだろう。

どういうわけか私は、その前日にテレビを見ていた時と同じような気持ちになっていた。今までの自分の経験か

私はそれがどういうことかわかっていた。これから私はそれが正しいということを確認めなくてはならない。御影駅の近くの販売機でビールを買ってまた線路沿いに歩き始めた。すぐにちょっと酔ってきた。足にはかなりきていたけど、気にしないで歩き続けた。10時間か11時間も歩いたのだろうか、私が家に着いたのはもう深夜だった。大学に行ってきたペーターに会った。大学は大丈夫で大学の近くに住んでいる友達も大丈夫だということだった。御影ではペーターも友達のアパートを見つけられなかったらしい。またその次の日に二人で行ってみることにした。自転車を買うことにしよう。自転車があればもっと楽に行けるだろう。電車は当分通らないだろう。テレビでは新たな死亡者数の見積もりが出ていた。それは2000人近くにも上っていてまだまだ増えるということだった。長田区ではまだ火事が収まっていなく、瓦礫の中に埋まったまま炎で焼かれている人もいた。

その次の日は私たちはちょっと休んだ。宝塚の街中に行ったけど被害は小さかった。フィルムとビデオテープを何本か買った。わたしの地震のドキュメンタリー計画はまだ続いているのだ。隣に住んでいる坂根さんと一緒に自転車を買いに行った。金曜日に大学に行って、それから三宮に行く予定だった。御影にも地図を持って行くつもりだ。地図があれば行きたいところに行けるだろう。

次の朝にペーターがやってきて、留学生センターで瀬口先生から聞いたことを話してくれた。ルウィンさんは亡くなってキンさんは生死がわからないようだ。しばらく沈黙があった後、とにかくその場所を探してみようということになった。神戸に向かう途中、私たちは彼女たちのことについては話さなかった。

最初の1キロはなかなか進まなかった。自転車が小さすぎて、乗りにくかったのだ。ペダルブレーキがついてなかったので注意しなくてはならなかった。倒壊した家をすりぬけて進み、所々で写真を撮った。交通事情も最悪で、車とバイクと歩行者と自転車が同じ道路を使っていた。道路には倒壊した建物が横たわっていたし、アスファルトの破片もあちこちで見られた。ガラスには特に注意が必要だった。もしタイヤがパンクしたら自転車を押して帰らなくてはならない。

芦屋に着くとまた友達の居所を探した。彼女はいなかったの、ペーターの電話番号を書き残して置いた。それから水曜日にも行った御影に向かった。地図があったので正確な場所はわかったけれど、何もかも変わり果てていてそこがどこなのかよくわからなかった。燃え盛っている建物のそばに何人か人が集まっていた。みんな大丈夫だけど、何もかも失ってしまったと言っていた。私はその人たちに友達の住所を見せて、そこがどこなのか聞いてみた。ローマ字で書かれた住所は読みにくかったみたいだったけど、その燃えている建物が友達の住んでいた所に間違いないようだった。ペーターは続けて話していたけど、私はちょっと離れてその周りをみてまわった。水曜日にも同じ場所を見たはずなのに、そこは全然知らない所ようだった。その時、建物の1階が完全につぶれて50センチくらいの高さになっているのに気付いた。ドアが地面に転がっていた。そこには名前と住所が書かれていた。キン テッ スウェ。まさにその建物が彼女のアパートだったのだ。

写真を撮ってから山の方に向かって出発した。燃えていた建物の近くにいた人が、犠牲者は阪急御影駅の北の病院に収容されていると教えてくれた。確認しておきたかったので、そこに行ってみた。短い急な坂を上ったところにその病院はあった。患者のリストがあったので調べてみた。そのうち何人かの名前の後には死亡日時が書かれてあった。キンさんの名前はなかった。遺体のリストも見てみたけれどミャンマー人の名前はなかった。病院の人は他のリストもチェックしてくれたけれど、キンさんの消息はつかめなかった。どこもかもとても混乱しているようだった。誰もキンさんがどこにいるのか、亡くなっているのなら遺体はどこにあるのかわからなかった。神戸のどこか他の市だろう。病院の人は私たちの電話番号をとりあえず控えておいてくれた。大学に行くのはあきらめた。もう時間がなかった。私たちはブルガリアから来ていたニコライとスラフチョのアパートに立ち寄った。彼らは家にいなかったの、ペーターは書き置きとパンを2人のために残した。それから私たちは三宮に向かった。

その日、自衛隊のヘリコプターがたくさん見えた。自衛隊は物資の運搬を積極的に行っているようだった。王子公園の近くには大きな自衛隊の駐屯地があった。まるで戦争のようだった。木曜日に宝塚の私のホストファミリーの笠松さん夫妻に出会った。笠松さんは何もかも戦争直後のようだと言っていた。戦後の混乱をまたこうやって見ることになろうとは思ってもみなかったそうだ。少なくとも私にとってはこれは人生に一度の経験だろう。人生って何て短いだろうと私は思い始めていた。

三宮でまた倒壊した建物を見た。阪急三宮駅、兵庫県国際交流協会、神戸国際会館、そごう、三宮センター街。全てが多かれ少なかれ被害を受けていた。阪急の北側の飲み屋街はひどかった。建物は倒れ、ウイスキーのボトルが割れて転がっていた。復興までにはかなりの時間がかかるだろう。

少し被害を受けていた三宮センター街にも行ってみた。ガラスの破片に気をつけながら写真を撮った。誰も私たちに出て行くように言わなかった。おかしいことだ。いつもならエスカレーターで遊ばないようにという警告のテープが店の中で聞こえるのに、今は次の余震が来たら倒壊しそうな店の中を私たちはこうやって歩いている。店の中には私たちの他にも何人か歩いていた。みんな使い捨てカメラで写真を撮っていた。この状態もやがて変わってしまうだろう。人は崩壊する前にその場所の最後の写真を撮ることができる。古い神戸の最後の日々を、50年後に回想できる何かを写真に収めておくことができるのだ。

三宮センター街から中華街、南京街に行ってみた。中華街の入り口にスヌーピーの像があった。それは壊れていなかった。近くのビルからガラスの破片が落ちて辺りに散らばっていて、そんな中に立っているスヌーピーはとても場違いに思えた。警告が貼ってあったけど、スヌーピーに近づいて写真を撮った。風と余震でまだまだガラスが落ちてきそうだったので、そこにはあまり長くいないほうがいいようだった。中華街ではもう店を開けているところもあった。外国のテレビ局が取材をしていた。ソーセージをそこで買った。インスタントラーメンとよくあうことだろう。少なくともある面では生活は普通の状態に向かって動き出しているようだった。

中華街にしばらくいてから私たちは帰途に着いた。何回も道を見失って困った。日本の街を通るのはとても不便

だ。地震から復興するときには日本は道路をもうちょっと便利に作り直すべきだ。古い時代の悪い点を受け継ぐ必要はない。戦後廃虚の中からいい街を作り直すチャンスが日本にはあったはずだ。なのにその結果が神戸や大阪や東京のようにごみごみした都市ばかりだ。道に迷ったあげく、ようやく私たちは家にたどりついた。辺りはもう暗かった。とても疲れた。自転車に乗ったのは2年ぶりのことだった。すぐに眠れそうだった。

土曜日に阪急清荒神の近くのペーターのホストファミリーのところに行った。そのアパートは大丈夫だったけど中はぐちゃぐちゃだった。ホストファミリー宅のご主人は教授をしていて、本をたくさん持っていた。床中、落ちてきた本でいっぱいだった。元に戻して整理するのにけっこう時間がかかるだろう。私たちは掃除を手伝った。その日の午後には堺に行く約束があった。しばらく話してから温かい食事をいただいた。

食事の後で阪急に乗って梅田まで行った。宝塚線はもう復旧していたのだ。梅田で御堂筋線に乗り換えて地下鉄で北花田まで行った。すごく時間がかかったけれどもおもしろかった。何日も入浴していなかったのも、私たちの服は汚れていた。神戸とは裏腹に大阪はまったくいつもと変わらなかった。人々はふつうの服装をしていたし、若い女性はパーティーか何かに行くみたいだった。こんなに近くなのに人々の様子はまったく違っていった。

堺でペーターの友達の野口さん一家に会った。野口さんはペーターのことを心配していて堺に来るように言ったのだった。野口さんはヒッピーファミリークラブの会員で留学生とよく交流を持っていた。野口さんは日本に親戚もいなく言葉も不自由な留学生が地震の中でどうやっているのか心配していた。野口さんはカップヌードルとガスボンベをくれた。私たちがガスがなくて、なかなか料理できないことを知っていたのだった。

最初の夜に私たちはシャワーを浴び、食事することができた。野口さんの友達がまだ何人かやってきていたけれどその夜はとにかく休んだ。野口さんと2人の子供に出会ったのはその時が初めてだった。ペーターは子供達と遊んでいたけど、私は少し話してからニュースを見た。大阪湾の反対は崩壊しているというのに、私がここでこうしていることがとても不思議なことのように思えた。ベトナム戦争のトラウマのことを思い出して、今の私ならあのトラウマが理解できるような気がしていた。

次の朝に瀬口先生から連絡があった。キンさんが亡くなったことは確実であるようだった。予想してはいたけどやっぱりその知らせは私たちを落ち込ませた。その日に野口さんの友達がまた何人かやってきて、みんなで一緒に食事し、ビールを飲んだ。宝塚では余震に備えて食事中にはビールを一缶しか飲まないようにしていたのだけれど、堺では余震を気にすることもなくビールを飲むことができた。

午後、遅くなって雨が降りだした。最悪だ。雨のために被災地で地滑りが起こるかもしれない。多くの家で瓦がはがれ落ちてしまっているの、家の中は雨漏りがしていることだろう。堺では風が強く嵐のようだった。私はその夜のうちに宝塚に戻ることにしていた。宮谷さん一家と食事をする約束をしていたのだ。野口さんはこんな天気だからもう一晩泊まるように勧めてくれた。坂根さんを通して宮谷さんに連絡できたので、私は直接宮谷さんに電話はかけなかった。

その夜は、大人も子供もいっぱいいた。みんなトランプをしていて、私もちょっとやってみたけど、あまり乗り気にはなれなかった。わたしはちょっといらいらしていた。御影に行って何が起きたのかもっとよく見てみたかった。瀬口先生から、キンさんと一緒に住んでいた別のミャンマーの女の子のエイ・ティンさんが生きていたという連絡があった。彼女は夜遅くまで勉強していてこたつで寝てしまい、結局そのおかげで家は倒壊したけれど助かったのだそうだ。他の女の子たちはベッドで寝ていたので状況は最悪だったらしい。でもルウィンさんは地震の後、しばらくは生きていたのだそうだ。彼女は助けを求めていたけれどそのうち力つきてしまったらしい。後で私はエイさんが六時間以上も瓦礫の中に埋まっていたと聞いた。エイさんは長時間圧迫されて右手に重傷を負って、使えるようになるまで時間がかかるそうだけど、だんだんよくなってきているそうだ。

月曜日に宝塚に戻って宮谷さん一家に会った。一緒に食事して少し話した。その日は別に予定もなかったのも、台所のガラスを掃除し、壊れた本棚から本と書類をどけた。してみると棚は完全に壊れていて捨てなくてはならないような状態だった。台所もかなり壊れていて、私のガラスとセラミックのコレクションもだめになってしまっていた。帰国する前にフィンランドに送ろうと思っていただけにショックだった。でも、とにかく私は生きているんだし、ものをなくしたとしてもそんなことはどうでもいいことだ。

火曜日にまた御影まで自転車で行った。その時にはもう迷路のような道からうまく御影に行ける行き方を私はわかっていった。ガラスと鉄パイプから身を守るために私は皮のジャケットを来てマウンテンブーツをはいた。私はキンさんとルウィンさんの持っていたものが瓦礫のなかに残っていないか探してみようと思っていた。そのほとんどはコンクリートの下敷きなのだろうが、何かちょっとでも残ってはいないだろうか。二人とも亡くなってしまい、エイさんも病院にいるというのに誰に何ができようか。たぶん私は彼女たちの遺品をミャンマーの両親のところへ送ってあげられると思う。それはきっと娘の形見となることだろう。

キンさんたちのアパートの被害は本当にひどかった。今回は建物の反対側も見てみたけど、反対側の地面は砕けたコンクリートでいっぱいだった。救援隊は2階の部分から床に穴を開けて、1階部分の被害状況をみていたようだった。辺り全体が本と日用品でいっぱい、何もかもがコンクリートの破片と入り交じっていた。私はめっちゃめちゃに砕け散ったテレビを見つけた。それはキンさんのベッドのすぐそばに置かれていたものだった。

私は2階部分から中に入った。西側の壁は崩れていた。開けられていた穴から1階部分の様子を見てみた。空間はほとんど残っていなかった。中にはまってしまいそうだったので、1階部分には行かないほうがよさそうだった。キンさんのベッドを見たときに、私はそこで何が起こったのかはつきり分かった。

その近くの地面で私はレターコーナーを見つけた。私は鉄の棒を拾って地面を掘り始めた。しばらく掘っていくとルウィンさんの手紙が出てきた。救援隊が穴を開けたときに、その手紙は地面に埋まってしまっていたようだった。他にも本や書類なんかがあったけど、全体的にはほんのわずかししか出てこなかった。まだいっぱい埋まっているようだったけれど、たぶん二度と掘り出されることはないのだろう。残念だ。彼女たちの写真かビデオを見つけ

たかった。ルウィンさんがアメリカで撮った写真は大事なものだっただけで、見つけることができなかった。

その日は遺品を見つけたことができなかったのも、また翌日に戻ってくることにした。電子メールに何か情報が入ってきているだろうと思ったので、大学に行ってチェックしてみることにした。研究室に行ったけれどそこには誰もいず、机と本棚が倒れていて部屋中散らかっていた。私は自分の資料とコンピューターディスクを整理しながら、もうこれ以上日本で研究を続けることは不可能だと思った。書類をかばんにつめて、めちゃくちゃになった研究室の写真を撮ってから私はそこを出た。3階で林先生に出会った。先生も奥さんも無事だったようだ。ご自宅の方は、瓦は落ちたけれど被害は大したことはなかったらしい。でも先生の研究室は実験器具が故障してしまい、研究を続行するまでに何ヵ月かかかるらしい。

留学生センターで瀬口先生に会って、地震以来何がどうなったか話し合った。中国人留学生が5人亡くなったそうだが、名前を聞いても私には誰のことかわからなかった。たぶん顔ぐらいは見たことがあったかもしれない。30人以上の日本人の学生が亡くなって、多くの学生が重傷を負ったということだった。大学がこれからどうなるのか誰にも分かっていなかった。ホームレスになった人々が大学に避難していた。4月に大学が始まるまで、一時的に帰国しようと考えている留学生もいた。

留学生センターでメキシコからの留学生シャビアーとミネルバにも会った。シャビアーの家は崩壊したけれど、彼自身は大丈夫だった。彼は、ソフィアも大丈夫で半時間ほどしたら留学生センターにやってくるだろうと言っていた。私はソフィアのことをずっと心配していた。彼女が来るまで待てよう。ソフィアや彼女の友達は、神戸で住むのが難しくなっていたので大阪に移っていた。ミネルバは日本から離れたがっていた。帰国して家族の元で少し休んでからまた日本に戻って来るそうだ。国際電話の無料サービスをすぐ隣でやっていて、ミネルバもシャビアーも実家に電話したいと言ったので、そこまでみんなで歩いて行った。

そこはスポーツセンターのようなところだったけれど、ホームレスの人たちが何人か避難していてNHKのニュースを見ていた。私は国に電話して両親と話した。2人でエストニアに旅行に行くところだったらしく、あまり話している時間はなかった。両親は私の在籍しているフィンランドの大学に、日本の私の現状を報告すると言っていた。両親は私がいつ帰ってくるのか知りがっていた。すぐに帰ってきてほしいようだった。できるだけ早く帰ると約束はしたけれど、神戸港が壊れているので荷物が送れるかどうか心配だ。

それからすぐに私はソフィアに会った。ソフィアはとても疲れているようで、帰国したがっていた。彼女自身は怪我はしていなかったけれど、研究を続けるのは不可能だということだった。どうやってレポートを書こうか、これからどうしようか、彼女は思い悩んでいた。悪い夢を見るとかで睡眠不足のようだった。私たちは彼女に、落ち着いてちょっと休むように言った。これまで彼女はずっと忙しそうにしていたのだから。

ハンガリーの友達のヤノシュにも会った。彼はポートアイランドの学生寮を出たそうだ。水も電気もなく、料理もできないらしい。ポートアイランドの寮には今では5人しか残っていないらしい。私の友達は、みんなばらばらになってしまったようだ。すぐに帰国するという友達もいる。今や人生はとても孤独なものになってしまった。私たちは二度と神戸大学で会うことはないであろう。

それからまだ多くのことが起こったけれど、私にはそのことについて語っている余裕はない。私は日本を離れることにした。既に荷物は送り返してしまった。来週の金曜日の飛行機で私は帰国する。この間に起きた出来事を忘れたくないので、実家に帰ったらもっと詳しく書いてみようと思う。日本最後の2カ月の間に私は何度か御影に行って、キンさんが仏壇の上に置いていたものを探した。加古川市民病院のエイさんのところにも行って、キンさんのことなどについてちょっと話した。住むところも友達もなくしてしまって、エイさんはすごく辛いだろうと思う。また彼女に会いに行ってみよう。

地震の後の1週間は忙しくてあっという間に過ぎた。それから少しは時間もできて日本語の勉強などをやろうとしたけれど、私の気力はほとんどゼロだった。CDプレーヤーを買ってきて、夜になるとtrfの熱狂的な歌を聞いた。焼酎とビールを飲んだ。その頃にはもう余震のことなんかほとんど心配していなかった。キンさんが死の直前に貸してくれたミャンマーの音楽テープを聞くこともあった。キンさんの形見としてこのテープをずっと残しておこう。

私は重要な決定を迫られていた。私は日本で働くことになっていたのだけれど、震災後そのことについて考えている時間がなかった。その仕事はとてもよい仕事だったけど、両親は私に帰ってきてほしがっていたし、私自身もフィンランドでやり残したことがいっぱいあった。結局、私は今は帰国して、またいつか日本に戻ってくることにした。今は実家に帰ってフィンランドの大学を卒業した方が良さそうだ。それからどうするか考えよう。その時には、現実の全てと直面できる用意が私の中でできていることだろうと思う。日本にいた2年間で私は多くの死を見てきたが、取り乱すようなことはなかった。日本に来るときも祖母が病気だったので、後ろ髪を引かれる思いだった。祖母は、私には将来があるのだから、どこにでも行きたいところへ行こうに言ってくれた。それからちょうど2カ月後に祖母は癌で亡くなった。祖母は最後まで私の幸運を祈ってくれていた。それからまもなくして祖母の兄が亡くなり、また実家の近所の人や、別の昔からの知人も亡くなった。去年の夏に、父の叔母が亡くなってから2カ月後、祖父が肺炎で亡くなった。私の周りの死はキンさんとルウィンさんと最後にはならなかった。2週間前に兵庫ワールドユースから手紙がきて、私の友達だった坂口さんが癌で亡くなったという知らせを受けた。こういった知らせにはもう慣れてきてしまっている。地震の後で、日本の死についての詩の本を買った。いつか私もそんな詩を書くべきだろう。私は自分が葬儀屋になってしまったような気がする。たぶん私は間違った仕事を選んでしまったのかもしれない。

日本最後の日々に私は何人かの友達と会った。2晩おきに送別会があった。誰かとはまた会うこともあるだろうし、誰かとはこれっきりになってしまうだろう。先週の金曜日に神戸大学で慰霊祭があって、エイさんに出会った。大きなホールの中に座って、亡くなってしまった人たちの写真を見た。キンさんの2人のお兄さんと、ルウィンさ

んのお兄さん夫婦にも出会った。みんなミャンマーから慰霊祭にやって来たのだ。何週間か前にミャンマーに手紙を出したのだけれど、幸い彼らは日本に来る前に私の手紙を受け取っていたようだ。彼らは私にヤンゴンに来るように言ってくれた。今年は無理だけどまたいつか行ってみよう。地震の前に、私はキンさんとルウィンさんにいつかミャンマーに行くと約束した。悲しいことに、それは墓地を訪れる旅になるのだろうが、私は約束を守るつもりだ。人生とは不思議なものだ。

震災後私のした事

洪 景 鵬（男）中国
神戸大学
（日本語訳：洪景鵬）

私は、二年前に自費で、日本に留学した。一年間日本語をゼロから学び、二年目から、神戸大学理学部に入学、従来の地球科学研究分野に戻った。昨年十月、博士課程に入った。研究課題は「東アジア横ずれ断層と相関堆積盆地」と決めた。私は中生代の断層運動を研究したかったが、それに着手する直前に、今度の阪神大震災で、本物の横ずれ断層と出会った。地震の四日前に日本に来た妻と二人共、無事だったが、その地獄に落ちるような揺れや、耳が痛くなるほどの轟音やまた、息ができないぐらいの埃とその独特な臭いなどを感じながら、以前、大学の講義で学んだ自然災害の厳しさを確認した。震災後、一週間ぐらい避難所で茫然としていて、何をしたらいいかわからなかった。毎日、救援隊やボランティアたちにお世話になった。自分も元気だったので、段々何かしなければならぬ気持ちになって来た。

ちょうどその時、やっと指導教官の宮田先生と電話が通じた。先生の話によると、今度の地震で、前にわかっていたいくつかの活断層が新たに動いた可能性が非常に高い、ということだった。先生はこれから、それを調査しに行こうとするところだった。私にも「大丈夫だったら、一緒に行かないか」とおっしゃった。「はい、一緒に行きます」と私は喜んで答えた。その翌日から、二ヶ月にわたって、地震を起こす活断層の調査に入り込んだ。最初一週間は、六甲山に入って、活断層の野外露頭の現場に行って、その断層が動いたかどうか確かめに行った。結局、確かに動いた断層もあったし、あまり動いてなさそうな断層もあった。そして動いた断層による神戸市地域の平野地帯の延長部の被害はどうだったのか、市街地の被害ゾーンの調査に入った。調査の方法は、先ず地裂や建物の倒壊などの調査から始まった。毎日、先生の車に乗って、市内を走り回った。その期間中に、何を調査すれば、神戸市街の被害分布のゾーンが分かるか、よく考えた、街を調査する時、電柱があちこち傾いていたり、倒れたりしていた。先生は、段々、それに注目し始めた。電柱は、建物と違って網のように一定間隔を置いて、市街に分布している。また、円柱の形をしていて、規格も揃っている。地震の時、電柱が一緒に衝撃を受け、その受けた衝撃の方向と強さによって、傾くから地震の強さの分布を良く示すものと考えられる。それを調べてみないか、と先生は私に頼まれた。それは全市街にわたって、決まったルートを歩きながら電柱を一本ずつ調べる事だ。量が多いので大変な仕事と言える。その困難さのもう一つは、足がないことだ。私のバイクは、地震で下敷きになって、壊れた。歩いていけば、遠い所に行けない。その時、ちょうど義援金を二十何万円もらった。それを使って十四万円で新しいバイクを買った。それからバイクで毎日、全市街を走り回った。一ヶ月半かけて、神戸市の西の妙法寺川から、東の芦屋川にかけて千三百余本の電柱を調べた。そのデータで、図を書いて見ると、神戸市街の地下に潜在する活断層のゾーンが、見事に現れた、そして、電柱のデータを主に、地裂と建物の倒壊のデータも合わせて、先生と一緒に、四月十二日に、大阪市立大学で、共同発表をした。発表した時、この研究結果は、とても注目された。翌日、神戸新聞にも載った。友達は、新聞で私の名前を見て、驚いたり、喜んだりして、私もそれを誇りに思った。ある友達が「洪さん、そんなに一生懸命にやって、多少手当でもついているの」と聞いた。「いいえ、ついてなかった。」と答えると、相手はどうも信じてくれなかった。だって、留学生としては、いつも神戸市のお世話になっているし、自分の専門知識を生かして、ボランティアで、できる事をしたらいいのではないか、且つ、義援金を手当として考えても良いだろう。今から振り返ると神戸の街に市街図を持って、電柱の傾斜を測っている時、街の人々が時々話しかけてくれた。私は留学生で、地震調査をやっている事を知ってた人達は「頑張ってや」と暖かく激励をしてくれた。そのことで心に満足感と充実感を感じた。これからまた東京で、先生と共同発表する予定がある。まだまだ頑張り続けなければならない。

[「神戸新聞」1995年3月14日、記事転載あり、掲載略]

地震発生の後

黄 華（男）中国
神戸大学
（日本語訳：黄 華）

中国旧暦の戊年は私の厄年である。戊年の間に私は交通事故に2回あいまして、600年ぶりの大地震にもあいました。確かに戊年は本当の厄年でした。

今年正月に私はアメリカへ旅行しました。大自然が人類に与えた災難、地震の体験のために、1月13日太平洋の向かい側から日本に戻りました。大地震が発生した時、アメリカとの時差の関係で寝られなくて、今日は何をやるかということを考えていました。突然、私はベッドからつき上げられ、また落とされて、また、つき上げられ、また落とされた。約5、6回であった。続いて揺れが約5、6回あった。その後電気も切れてしまいました。

その時、私は大地震が発生していることがよくわかりました。逃げようと思いましたが、震動の幅は20cmぐらいなのでなかなか動けませんでした。地震が弱くなると、すぐ服を着ながら、外に走りました。

私は会社の寮に住んで、留学生は全部で9人です。外に出ると、留学生たちと寮生たちはほとんど出ました。みんなは地震の体験を話しながら、また津波も心配しました。地震でみんなが無事であっても、津波で命が無くなれば、もっと気毒だろう。

その後、だれかが自動車のラジオをつけました。みんな一緒に集まって地震情報を聞きました。津波が発生しないことを確認してから、少し安心しました。

ただ、周りに火事の煙と光があちこち見えますし、寮の処のガス漏れの臭いもすごく心配でした。火事の発生とガス爆発の恐怖は地震の恐怖と同じように人々の心を圧迫します。

我々留学生は寮の周りの様子を見に行きましたが、日本式の2階建ての建物はほとんど1階になりました。道路の横の一戸建の中でだれかが助けを求めています。そこで、一人がその人と話ながら、他の人たちはすぐ寮に戻って寮生に知らせて、道具を持ってきて、その人を助けました。

その人の上肢は梁で圧迫されて、折れてしまいました。その人を外に出すには、梁を上げれば可能性があります。その時、余震が時々あるし、ガス漏れもひどい状態でした。建物がいつ倒れるか、火事がいつ発生するか、誰にもわかりません。みんなは一生懸命1時間ぐらいやって、とうとう、その人を助け上げました。

その時、すぐ病院につれていきましたが、病院での状況はもっと怖いものでした。負傷者たちの体は血だらけでした。新しい負傷者も次々続いて来るので、建物の中と庭は大勢の負傷者でいっぱいでした。負傷者に人工呼吸をしている人もいました。犠牲者も出ていました。この状況を見ていて、今回の大地震のおそろしさが、だいたい分かりました。

以上のことは地震が発生してから2、3時間内のことですが、これは私の人生経験で一番恐ろしい体験でした。

阪神大震災の体験

黄 宗南（男）中国

神戸大学

（日本語訳：黄 宗南）

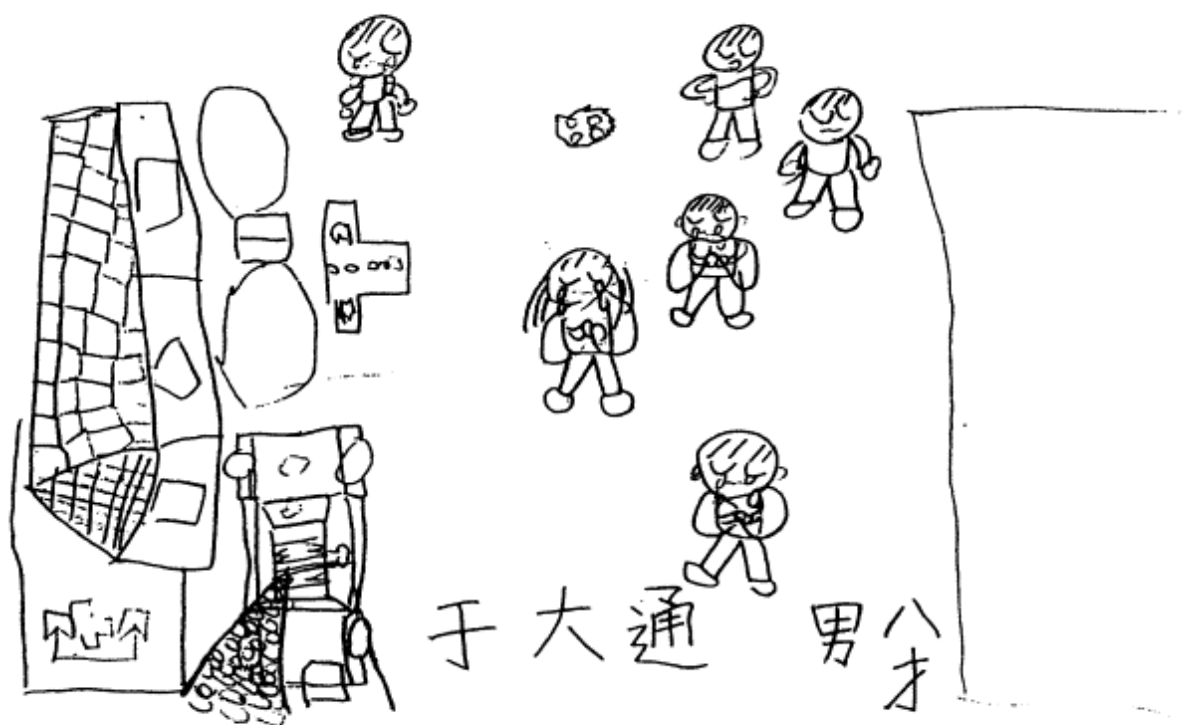
阪神大震災からもう二ヵ月半ぐらいが過ぎました。学校へ向かう道のあちこちでこの地震で崩れ、変形し、傾いてしまった建物を目にすると、また、テレビから映し出される避難所の報道を見る度ごとに、大震災当日のことが生々しく蘇ってきます。

1995年1月17日、午前5時46分神戸で震度7の大地震が発生しました。神戸市灘区楠丘街2丁目5番21号のアパートの二階に住んでいた私は、その強烈的な振動に目を覚ました。その振動は、大きなパワーで、下から上に突き上げられた感じでした。最初の揺れが収まった後、夢か現実か確かめようと思って、ベッドのそばのまどから外の様子を見ようと思いました。そのとき、更に強い、今度は横揺れが始まりました。食器やガラスが落下し、割れる音があちこちでして、私の方はベッドから落ちそうで、両手でしっかりベッドの柱をつかんでいました。苦しい、恐ろしい気持ちでいっぱいでした。妻は私より反応が速く、大声で「頭まで布団をかけて」と呼びました。布団の中で、体を必死でこわばらせ、何が何だか分からないまま、激しい揺れに身を任せるよりほかはない状態でした。後で聞くとところによるとほんの二十秒ぐらいだったそうですが、「これでもか、これでもか」と数分間は続いたと思われるくらい長く、長く、感じられました。やっと、揺れが止まって、頭を布団から出すと、部屋中はほこりっぽく、電灯をつけようとしたのですが、停電でした。身の危険を感じ、妻に「外へ逃げ出そう」と言いました。私たち二人は倒れた家具につまづきながら、一步一步ドアの方へ向かいました。やっとドアを見つけましたが、ドアは簡単には開きませんでした。仕方がないので、足で蹴って、ドアをあけました。そして、階段の方を見ると、二階から地階への階段が目に入りません。地面がやけに近くみえます。眼鏡をかけていなかった私は、暗くもあり、自分の目が信じられないので、目に見えているものが本当なのかどうか、妻に確認してもらいました。妻は「そのまま一歩踏み出すともう地面なのだ。」教えてくれました。私は、びっくりして、妻と一緒に急いで外へ出て、近くの公園の方へ走って逃げて行きました。

そのとき、公園から東南の空を見上げると、稲妻が二本ピリピリ、ピリピリピリと走っては消え、走っては消えていました。恐怖のあまり、声も出ませんでした。公園に逃げて来る人はどんどん増えてきました。私は下宿の一階に住んでいる大家さんの親子がどうなったか心配になりました。そこで、再び下宿に戻って行って、大きな声で二人の名前を呼びました。返事がありません。表から見ると一階はペシャンコです。だめかと思いました。それでも何度も呼び続けました。だいぶ経って、返事が聞こえてきました。下宿の表に止めてあった車が支えになり、わずかな隙間ができ、命拾いしたのです。私達は手を取り合って再会を喜びました。それから、私は大家さんの息子さんと一緒に生埋めになった人を救出しに行きました。

日が照り始めて、見渡す限り、倒壊した住宅が見えました。遠くの火炎の煙も見えました。そして、即死した人、重体の人、重軽傷の人々……。この一瞬で、多くの人々の運命が変わってしまったことが、どうも不思議で、現実のこととして受容できない気持ちがしましたが、一方では悲しみもわき上がってきました。私は妻に「生きて残って、よかったな。」と言いました。妻は涙が溢れていました。生まれてから、一度も遭難したことがない二人は、この地震で住むところは全壊してしまい、また、知合い人の命もなくなって、……。このことは、一生忘れられないでしょう。

最後に、この大震災で犠牲になられた方々に深く哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。また、お世話になった方々に対して心から感謝致します。神戸の復興が一日も早く成し遂げられるようにお祈り申し上げます。



于大通男才

外国人の居場所を求めて

井上 雅史（男）日本
神戸芸術工科大学

神戸芸術工科大学には、留学生のためにチューター制度があります。

私は2年間、チューターとして留学生と交流してきましたが、やはり、留学生は言語、文化の認知など、日本で生活して行くのには十分とはいいきれません。

そこに阪神大震災が勃発したわけですが、身寄りのない留学生の安否が気になりました。

19日、私は留学生を助けるために、長田区にある避難所を探してまわりました。結局、私の探していた留学生は大阪まで避難したらしく、無事でしたが、避難者名簿には数多くの外国人の名前が書かれていました。

これから日本では、もっと国際交流を考え、他国の人々が住みやすい環境を整える必要があるのではないのでしょうか。

考察＜地震の後に＞

ジーン・ジョウイチ（女）アメリカ
神戸大学
（日本語訳：井田暁子）

私はワシントン大学と神戸大学の留学生交換プログラムの研究生として、日本でこの一年半を通し、さまざまな体験をしてきました。私の一番大切な思い出は、日本人の恩師やゼミ生に始まりフィリピン、トルコ、ブラジル、中国、韓国、ブルガリアやニュージーランドなどの国々から来ている外国人の友人たちとの間に友情を培ったことです。異なる社会文化や習慣を持っていても、私たちは、皆同じように喜び、悲しみ、愛し、嫌い、達成感や挫折感を味わうPEOPLE（人々）なのだ、とわたしは気づきました。又、これらの違いから、私は自分自身の文化をより良く理解することができるのです。

最も忘れられない経験、と言えば、もちろん「阪神大震災」のことです。災害の以前にも、神戸は国際都市として目されていましたが、神戸はますます人々が共に協力しあう国際都市となりました。例えば私の近所では、午前9時半頃に火災が発生しました。その場に消防車が来ないので、隣人たちは急いでバケツリレーを始めました。日本人もフィリピン人も、アメリカ人もドイツ人も、それぞれ隣合って立ち、水の入ったバケツを互いに手渡ししました。長田区のような地域では、韓国人と日本人が料理や食事や生活を共にしていました。災害に心を痛めた多くの国からも大変な量の支援が寄せられました。

神戸は、世界中からの友人とその励ましによって国際都市であり続けることでしょう。この地震を経験したことによって、新しい友情と関係も生まれたのです。陸を越え、海を越えて新しい友人を得、また他の人々をほんの少しでもより理解する機会を得て、私はこの出来事が、世界の中で更なる強調と平和につながってほしい、と願っています。

世界中の友人たちと1995年の阪神大震災で被災された方に、この歌を捧げます。

世界中の友達

カイビガン、アミーゴス、チンダー、プリヤマテリ、アルカダシュ、ポンユウ、友達
言葉ではみんな違って聞こえても
みな意味は同じ
喜びと悲しみのあるこの世界で
私たちは「友達」になれる

世界中の友よ
みんなで立ち上がろう
共に静かに
手を取りあって

私たち別々のところからやってきた
ほんとうに遠い遠いところから
習慣もことばも
さまざまに違うところから

人はどこへ行こうとも
気持ちと愛を宿す
心をもった
「人」なんだ

友達ってとくべつなもの
あなたもそう思っているといいな
ともだちとして一緒に
ハーモニーを作って歌おうよ

* くりかえし

世界中の友達
ずっとずっと友達として
あなたと私
一緒にいよう

恐_____怖

カン・イルソン（男）韓国
神戸改革派神学校
（日本語訳：孫 京淑）

私は韓国人で、日本に来て、3年になります。私が住んでいたところは、神戸の東灘区の御影でした。阪神大震災が起こった時、家内と娘と一緒に寝ていました。いきなり縦に揺れはじめて、横に揺れました。横に揺れた時には、住んでいるマンションがすぐに横に倒れるのではないかという恐怖感を強く抱きました。地震の振動が一回だけでなく、何回もありました。その揺れている時間がどんなに長く感じられたか分からないほどでした。体中で地震の恐怖を体験しました。

すぐ、家内と娘を連れて、外に逃げました。その時、もっと恐怖を感じたのはガスの臭いでした。いま、すぐにもガスが爆発するのではないか、という恐怖でいっぱいでした。駐車場に向かって走りました。逃げようとする考えの中で、今、車に乗って逃げるとしても、果たして、逃げるところがあるのだろうか、ということが頭の中に浮かび上がったのです。それで、私が勤めている教会に逃げようと、いつも通っていた道を選びました。しかし、道はなくなって、ありませんでした。建物が崩れて、道をふさいでいたのです。今度は視覚を通して、恐怖を体験しました。臭覚、視覚を通して、体、全体で地震の恐ろしさを感じました。

私達の顔

金 銀姫（女）韓国
大阪コミュニケーション専門学校
（日本語訳：金 銀姫）

地震が起きてから、もう3ヵ月と言う時間がすぎて、私達は二度と感じたくない、そのおそろしい思いを忘れようとしています。

今、まわりを見廻していると、この難関を克服するための熱気がいっぱい、一生懸命にエンジンをかける機械のたくましい音が、なぜか心細い私達には心地よく聞こえてきます。今回の地震のせいで、多くの人々が死に到って、私が愛していた神戸がこんなに無惨なかたちになってしまった事にとうぶん絶望の中へ沈んで行くばかりでした。しかし、よく考えて見たら、多くの死亡者のあとにのこされた私達には、今のれわれの生き方をふりむいて考えなおす機会とたくさんの宿題がのこされたとも言えるでしょう。

地震の時は家の近所の小学校に避難していました。そこで夜露にぬれながら「家もなくしたし、お金もない、家族もないこんな状況なら死んだ方がよい」と、みしらぬとしよりの言葉を今もわすれる事ができません。もえつつける太陽があり、土と海がある。こんなにすてきなところで、死が生きる事より幸福だとなぜそう思わなければならないのでしょうか。もっとも体もよわそうな老人の絶望的な一人言だったので、よけいに悲しく聞こえてきました。

老人のそのような話には、私達が生きている今の社会的な問題が深刻である事を示していると思います。私達は、私とは関係ない事ならかわることをおそれている。話かけてくるのさえ拒否してはいませんか？ 今、となりにどんな人が生活をしているのか知っていますか？ 私はいま自分にむかって、たくさんの質問をなげたい、そして、このようなことを書きながら心からふかく反省をしようと思っています。

崩れた家、道路、その場所には以前よりもっとすばらしいビルと家が、また、すがたを見せてくれるでしょう。でも、きえかけている私達の人情と愛はいつごろ私達のむねにまたおとずれてくれるのでしょうか……

神戸の春

金英福（男）韓国

神戸大学

（日本語訳：金英福）

1月16日夜7時頃。

研究室でコンピュータ作業をしながらテレビを見ていた。NHKのNewsで、地震の情報があつた。震度2で、震源地は淡路島あたりだったと。‘神戸は地震なんかないよ’という話は神戸での生活が始まって以来、ずっといわれたから、人のことみたいな感じであつた。その晩、11時頃下宿に帰ってまもなく、国の後輩から電話があつた。留学問題で悩んでいた。先輩である私にコメントを求めてきたが、あまり力になれそうなコメントはできなかったことが残念だった。

それから、2時間ほどは、彼女からの手紙などを読みながら過ごした。やっと布団のなかへ入ったときが2時30分頃だったと思う。それほど深く眠りに付かない頃だったと思う。非常に変な動きが体全体へ伝わってきて目が覚めた。本能的に布団を蹴り出し立ち上がって、電灯を付けた瞬間であつた。部屋の全体が揺れ始めた。まっすぐ立ってられない状態で押入がある所の柱を頼りにするしかなかった。付けておいた電灯の光が暗くなったり、明るくなったりする状態で、キッチンの冷蔵庫が飛んでいた。部屋の奥にあつた本棚が、先ほどまで夢のなかを走っていた布団の上に倒れ掛かつてきた。

電灯の光が完全に消えた後、間もなく地獄の夢から目が覚めた。懐中電灯を取り、ズボンを探した。光が当たる所には、口で表現できない状況ができていた。立っているものはほとんどないし、一步も先へ進めない状態のなかからやっと、着物を探しだして、拘束されてしまうかもしれないその場から逃げ出そうということだけだった。

一步一步進んで、玄関のところまで行った。そのとき、外から

「皆大丈夫か！」

という、おじさんの大きな声が聞こえた。その声で、すこし落ち着き、方向感覚が戻ってきた感じであつた。

「はい！大丈夫です」

と答えながら、玄関のドアを開けようとしたが、なかなか開けられない。‘ どうしよう。手をはじめ、全身が震えた。これやばいな’、ハンドルまわしながら力強くドアを蹴り押した。開いた。

閉鎖されたところからの解放感を感じとろうとする瞬間、手前のマンションから

「助けてくれ！うちの子供が下敷になっているんだ」という悲鳴と子供の

泣き声とガスくささ、まさに阿鼻叫喚だった。気を失った状態から、後ろへ目を向けると、隣の年寄りの方が、ドアの方へ倒れ掛かっているものを寄せながら、ドアを開けようと一生懸命だった。ドアのガラスを叩き壊し、倒れているものを寄せてから、出られるようになった。その瞬間まで、大きな揺れではなかったが、依然と激しい地盤の動きは続いた。とりあえず、立っている建物から遠い所にいたほうがよいと考え、家からすこし離れたテニスコートへ向かった。

大勢の人々が家から逃げ出してきていた。暗くて物体の形だけ見える状況で、いま何時ごろかはまったくわからなかった。寒い風が体の深いところまで染み込んできた。そのとき、近所の先輩の具合が気になった。大丈夫かな。先輩が住んでいたマンションの入口は壁が倒れ、危険な状態だった。ほんとうに大丈夫か。

テニスコートには、放送による地震の情報などは、まだ届いてない状況で、不安な雰囲気が冷たい風に凍っていた。

立ったまま、何も考えずに、時間が経つことだけが気になった。それまで見えなかったとなりの人々の顔が見られるようになった。自分のようにズボンと靴下まではいている人はほとんどいなかった。重い布団を掛けて、裸足で、スリッパと運動靴をばらばらにはいた姿だった。そのなかで、先輩の顔も見えた。喜びよりは安心感溢れる対面であつた。

まわりが明るくなるとともに、建物の悲惨な姿の群れが現れた。いままで見たこともない出来事が自分の近くまで襲ってきたという恐怖感で、頭の中が真っ白になった気分だった。ひびが入っているテニスコートを歩きまわった。

「先輩、いまからどうします」「…」。

そのとき、白い雪が降り出した。いや、それは雪ではなかった。灰だった。どこかに火事があつたようだ。

やっと気がついて、すこし遠いところをみると、黒い煙で四方が囲まれていた。

ガスくささで、明るくなっても下宿に戻るという自信はなかなか持てなかったが、隣に住んでいるおじ

いさんの行動に勇気付けられ、玄関のドアの前まで行ったが、普段よりかなり長い時間が経った気がした。穴があいた天井と、家全体に入っているひび、表現できないほどの恐ろしい様子に気を落した。

とりあえず、家のなかを片付けようと思って、中へ入り大事なもののだけを探し出した。それからしばらく、北区に住んでいる友達が車で走ってきた。抱き合い、喜びを交わした。三人が集まってから、阪急線南側に下宿をもっている後輩達が心配になった。そのときから、いける所まで車を走らせた。途中で目に入ってくる倒れた建物、奇妙に上がっている道路と切れた線路…。まっすぐ立っているものがほとんどない群の中から、後輩の声が聞こえた。

しかし、一番状況が酷かった六甲道あたりの後輩の身元は確認できなかった。下宿が完全に壊れ、その姿さえ見えない状態であった。

とりあえず、北区の友達の方へ避難し、夜になってから再度探しまわった。真っ暗な町を通り、見覚えがあ

る病院あちこちを尋ねた。一つの可能性を頼りに、入院者と死亡者の名簿を調べながら、血だらけにになっている灘区役所隣の病院を最後にその日はそのまま引き上げたが、翌日、避難所から下宿に戻ってきた彼女に会えた。それから、約8人ぐらいの避難生活も三日めに終え、国へ帰る人もあったが、下宿も気になり、

自分は学校へ戻った。建物自体は大丈夫だったが、研究室の中は下宿の状態と全く同じ様子であった。暖かく迎えてくれた先生、しかしそれだけではなく、いままで共にしてきたうちの研究室の競君の死が待っていた。下宿が倒れ、下敷になって亡くなったらしい。信じられない現実はどう対応すればよいかわからなかった。

それから、不安感と共に、おにぎりとパンだけの毎日が始まった。24時間聞こえてくるサイレンで、不安感はなかなか治まらなかった。

研究室の整理と掃除で四日が経ち、ある程度、本来の姿へ戻った。目的もない何日かを落ち着かない気持ちで過ごした後、十日目になってから神戸から出られる機会ができた。仕事で名古屋に来ている友達に連絡ができ、早い時期に来て欲しいと声を掛けられた。旅に出る感じで荷物をカバンの中に入れ、疲れた体を連れ出した。

JRの芦屋駅まで歩いた。至る所で家屋やビルが倒壊し、その門あちこちには、家族の行方などを知らせる紙が貼り付けられていた。電車でしばらくを走っても、あんまりその状況は変わらない。無言でじっとその悲惨な様子を見ているだけだった。20分も経たない間に、目の前が完全が変わってきた。大阪駅近くになるとともに、なんにもなかったような平和な顔が街中に溢れていた。一瞬腹がたって、にこにこしている顔を殴りたいくらいになり人間は薄情だと思った。

名古屋行き新幹線の窓側に席を取ったが、震災のためか、好きなところはどこでも座れる程、客はすくなかった。電車が走っている間、外から目に入ってくる風景の上に神戸の悲惨な姿が重なってきた。倒壊、火事、そして、競の死。その間に、目の前がゆらゆらしてきた。涙が流れていた。恥ずかしいとかなんかは眼中にもなかった。

懐かしい人と逢え、完全に伝え切れない自分の体験を並べ立てたが、なにより無事であったことで話を終えた。

それから、もう春が訪れてきた。桜が満開で、部屋の中のぼくらを誘い出しているんだ。近所のおばあさんからお礼の言葉を頂いた。地震の当日からずっと言われているが、自分がそんなお礼を頂けることをやって上げた記憶はない。それも地震のおかげだろう。

昨夜まで明るく電気が付いていた家が、今日の朝になって火事で姿を消してしまうことが、数日前まであった。

もう春は来ているが、家を失い、居所もないまま避難生活をされている方々の心に、暖かい日ざしはいつ尋ねてくるんだろう。淋しい夜景のなかで、ひもすがら続くサイレンが胸をときめかすことが極めて少なくなったのは、賢明に対応しているみんなの努力のおかげであるが、写真でしか見られない競君の死で胸が痛い日々がまだまだ続くと思う。

最後に、この度の震災で被災された方々にお見舞申し上げます。また、神戸の一日も早い復興をお祈り致します。

神戸．．．フェニックスのように (地震後の日記)

マルシア 河野（女）ブラジル
神戸大学
(日本語訳：マルガリータ 山田)

阪神大震災が起こってから、もう何ヵ月か経ったが、いまだに...信じられない。多くの人々は元気を取り戻し、自分たちの生活を立て直している。しかし、自分の中で迷っていて、放心状態になっている人々もいる。このような、静かな悲しさを見るのは、愛している神戸の街の崩壊を見るよりもつらい。

関西にいと、特に神戸にいと、自分の家（里）にいとるように感じる。人々は親切で、気さくで、一年で神戸のとりこになった。しかし、周りの破壊と痛みを見ると、泣きたくなる。しかし、近いうちに神戸、及び悲しんでいる人たちもフェニックスのように生き返ると確信している。

私にとって地震は、一つの区切りだった。私の日本での生活は、地震前と地震後に分けられる。感じたことを表現するのにミニ日記を書いた。あなたたちにこの日記の一部を読んでもらいたい。

地震前-思い出

地震の前、94年の4月から95年の1月まで、勉強と楽しむことで忙しい毎日を送っていた。毎年3月にある、大学院の入学試験を受けるために、日本語と経営の勉強をした。楽しみの方は、国内旅行、新しい友達を作ったり、ボーリングとカラオケへ行ったりしていた。そして、私の彼（婚約者）に特別に心を尽くしていた。このように私の世界は構成されていた。心配の無い、幸せな、普通の学生生活と変わっていなかった。

一日、一分、一秒ごと楽しい生活をおくっていた。私の人生は幸せそのものだった。

地震の前は、3つの大きい問題を抱えていた：住むマンションを探すこと、大学院の入学試験に受かること、ブラジルに一度、帰ること。

1月になり、新しい年が始まり、私の夢（大学教授になること）を叶えるためにもっと努力をしようと自分に約束をした。この夢を叶えるためには、大学院に入る必要があった。

1月の上旬に、リラックスするために、神戸大学の長野県志賀高原スキーツアーに参加し、5日間スキーをした。とても楽しかった。

帰ってから、マンションを探し始めた。15日に東灘区、御影、阪神駅の近くでアパートをみつけた。その後、試験のための準備とブラジルへ帰る準備に集中すればいいと思っていた。

地震とその後の状況-引越

17日の夜明け、ベッドで勉強していたが、ちょうど眠くなってきた時に、緩い揺れを感じた。道に大型トラックが通っているように感じた。しかし、急に、全部動き始めた、ベッドの上に座り、なにもできず、ただ揺れだけを感じた。物が落ちる音と人々の叫び声が聞こえていた。その時になってから、地震であったことがわかった。自分がその場、地震が起こっている所にいることと地震が起こっていること自体、信じられなかった。「今、死んだらダメ、愛している人たちから離れた所で、このようなバカな方法で死にたくない」と思った。このようなことを思ったからこそ、その時、何をすれば良いのか考える力がわいてきた。

揺れが止まってから、部屋を出る決心がついた。住んでいた寮の暗い廊下で同じ階に住んでいた女の子たちと一緒にになった。警報器が鳴って、警報器は火事、ガス漏れなどの警報の可能性があったので、建物の外へ出るように言った。いくつかのドアを開め、一人の女の子を部屋から助け出すのに協力した。建物の外へ出た瞬間、もう恐怖がなくなり、冗談で笑う余裕さえ出た。

一日中、ニュースを見ていた、余震が起こるたびに、皆、走って外へ出ていった。慣れるまで、私もそうしていた。亡くなった人々の数、みつからない人々の数が多すぎて信じられなかった。自衛隊などどこにいたの？ 政府の援助は？ なぜ、テレビ局の人たちが被災地に先に着くことができたの？ その日、最初に感じてた恐怖は悲しさと反発の感情に入れ替わっていた。しかし、落ちついていった。

地震が起こった数分後に、家族と恋人に連絡がついたので、とてもラッキーだったと思う。私の祖母は電話で泣いていた、というのは祖母は、関東の大地震を経験しているので、私が同じようなことを経験するとは夢にも思わなかったようだ。私は落ちついていたので、愛している人たちを安心させた。

私は3日間、当時住んでいたポートアイランドに残ったが、とても悲しい時期だった。みんなは心配していた。水、ガス、食べ物は不足していた。島から出る方法は一つしかなかった。歩いて三宮まで行く方法だった。スーパーの前には千人以上の長い列があった。人々のニュースは、推測によるものが多かった。六甲アイランドとポートアイランドは沈むと言われていた。私はそれをずっと信じなかった。

19日には、船でポートアイランドから出られた。関西空港ゆきの船だった。私はマミ、スエリー、ミネルバと後、何人かのタイとニュージーランドの留学生たちと一緒にだった。私、マミとスエリーとミネルバは、滋賀県にある、私の恋人の家へ行った。彼にまた会えて、良かった。

1ヵ月半の間、滋賀にいた。最初のころは、テレビを見て、痛みや苦しみをみるたびに涙が出てきた。なにもできない自分に心が傷んだ。

そこで、まず留学生センターと留学生の間の情報センターとして働きはじめた。しかし、これは十分ではなかった。ボランティアとして活動したかったので、いろいろな団体、機関などに連絡をしたが、反応はほとんどなかった。

それで、ブラジル大使館に連絡して、私たちは元気であることを報告し、その他の人たちのために何か手伝うことはないかと尋ねた。電話を受けた女性に、私は神戸に住んでいると言ったら、どういう問題があるのか、と失礼な態度で尋ねられた。私には、特に問題はないが、我々は元気であるということを報告するのに電話をした、と答えると、彼女は、元気にしているのであれば電話をする必要がないと言われた。そして、神戸には何人のブラジル人がいて、どのように連絡がとれるのかを逆に聞かれた。彼女の態度と情報不足は私にとってショックだった。自分の国の人々を助けるために日本にいるのに、なぜそのような態度をとったのか私には分からない。何人かのブラジル人が電話をして救助を受けたようだったが、私の頭の中には自分が体験したときのイメージだけが残った。

電話でボランティア活動をしたいと申し出ても、反応が無かったため、宝塚、西宮、芦屋、長田、東灘区、六甲の避難所を訪問して、直接ボランティア・グループに入った。

最初は、ラテン・アメリカ人とアジア人の通訳として活動した、電話で情報を提供していたが、除々に、情報を手に入れるためにではなくて、誰かと話をして、感じたことをすべて自分の心の中から吐き出すような電話がかかってきた。そしていろいろな話をした。

避難所を訪問したとき、何回も、食べ物を持って行って、悲しそうに、落ち込んでいるように見える人の横に座って、話しかけた。前田さんと初めて会ったのは、このようなことからだった。

前田さんは、71才のおばあさんで、一人だった。彼女と話し始めると、「死にたい」と言いだした。ご主人と一人息子は地震の時に死んで、住む所も無くなっていると語った。「私には、生きる理由が残ってないでしょう」と聞かれ、何と応えたらいいのか分からなかった。彼女の手を強く握って、静かに、彼女と一緒に泣いた。その後、「あなたが、死ななかったのは、まだ果たすべき使命が残っているからです。神様はそう思っています。努力して、元気になってください、そうすると、長い経験と今までの知恵を出して人々を助けることができますよ」と彼女に言った。彼女は何も言わず、ほほえみかけた。

3日間続けて、彼女と会った。2日目に、彼女に名前を聞かれ、「マルシア」と答えたら、彼女は驚いた。ブラジル人であると知って、「あんたは心が広い、外国人なのに、手伝ってくれている」と言われたが、私は、「国は関係ない、大切なのは私たちは皆人間であり、人はお互い助け合わなければならないでしょう」と答えたら、彼女は私を抱きながら泣いた。前田さんは私のもう一人のおばあちゃんになった。

彼女は三日目には少し元気になって、もう一人の人と話をしていた。私とその前の日に言っていたことをその人に話していた。その後、引っ越したことを知ったが、住所は分からない。しかし、きっと元気であると確信を持って言える。

大学院の試験に合格することが私にとって大きい目的であり、心配していた問題であったが、忘れてしまっていた。時間のあるときに勉強はしていたが、指導教授、留学生センターの皆さん、私の家族と婚約者、友達たちなどからの支援のおかげで、試験に合格できたと思う。心から感謝をしている。

幸せの概念が変わった。一秒ごと、楽しい人生をおくりたいが、自己実現のためだけではなく、愛している人たちを幸せにする努力も重要である。

神戸？ I love you ...かんばって！

私からのメッセージ

私が、見たいのは
あなたの泣いている姿、絶望、悲しさではない
見たいのは
あなたの回復である
あなたは生存し
起こされ、成熟し
人間として成長した
永遠に、過去を振り返る必要はない
過去は戻らない、たくさんの出来事が今から起り始めようとしている、
気楽ではないでしょうけど
皆の力をあわせたら、出来る
フェニックスのように、灰から生まれ変わる
立ち上がり、ほこりを落とし
私の手を握って...

神戸の地震

ペーター・クレツマン（男）ドイツ
神戸大学
（日本語訳：ホルガー・ブングシェ）

ヨーロッパの人が持っている日本のイメージと日本の現実とはかなり違います。つまり、むこうのイメージは部分的にだけ正しいと思います。例えば、日本の主婦たちが電子レンジだけで料理をするというイメージは間違っています。もちろん、どんな家でも、ガステーブルがあるし、そして、暖房が全くない日本の家というイメージも間違っていて、寒い冬には石油ストーブなどで部屋を暖めるのも当たり前のことです。

でも、日本は人口が多い国だということは確かに誰でも知っています。密集地の大阪と神戸の間には電鉄会社が三つも営業しているのに、電車はいつでも込んでいます。

さて、1995年1月17日、朝5時45分ごろ、僕が知っていた平和な街神戸は完全に変わりました。その時、開いている店はまだ、少なくなくて、家を出ている人も、あまりいませんでした。前日は休日だったので、夜遅くまで遊んで、平日よりちょっと早く出る最終電車に間に合わなかった人もいたでしょう。夜明けの少し前で皆はまだ寝ていました。自ら体験しなかった人はこの地震の激しさ、恐ろしさは分からないでしょう。信じられないぐらい激しい力で家がゆれたり、すごい音で台所の食器棚が倒れたり、家具が部屋の中で動いたりしました。’もう少し激しくなったら家が倒れるだろう’と、僕の頭には、ただ一つの考えだけがありました。二十秒経って地震が終わりました。また静かになりました。電気がなくて、真暗でした。懐中電灯を探すのにも苦労しましたが、やっと見つかりました。部屋がめちゃくちゃになりました。机の上とか箆笥の上においてあったものが全部落ちてきました。窓の下枠に並べていた折り紙の鶴などの小さい物さえも落ちて、窓の下枠が空っぽです。いつも台所の角にあった冷蔵庫が今では、部屋の真ん中にあります。床の上は至るところ壊れてしまった食器とグラスがあるのです。水もないし、ガス也没有せん。

驚くべきことに電話が通じたのです。すぐにドイツにいる両親に電話しました。両親はもう寝ていましたので、地震のニュースはまだ聞いていませんでした。「ここでは大きな地震があったが、僕は無事だから、心配しないで」と速く言いました。

電話してから隣に住んでいるフィンランドのミカ君という友達と日本人の隣の人が一緒に来ました。「大丈夫ですか」と、聞かれ「はい、僕は大丈夫です」と答えました。服を着て外に出ました。まだ、暗くて、寒かったです。本当に強い地震でしたが、見るかぎり、隣の家は大きな被害がなさそうです。ちょっと離れた所に倒れた庭の壁に潰された自転車が見られました。外に出た隣の皆さんが、こんなに大きな地震は今まで体験したことがないと言いました。段々明るくなるにつれ、遠い所から救急車の警笛が聞こえてきました。

家の近くの道を歩きました。倒れた自動販売機、庭のフェンス、そして壊れてしまった家をとおりました。いつも乗っている電車の線路は土の動きによって振じれていました。

修理するまで通学できないなあと考えました。道路はあちこち下から水が出てきて、漏れたガスの強い匂いがしました。でも、その時は、そんなに大きな災害だと思わなかったのです。

地震から三時間がたって電気が戻ってきました。机から落ちたミカ君のテレビはまだうごいていました。テレビで神戸市内の映像を見て、やっぱり大きな災害だったということが分かるようになりました。家が壊れたり、火事があったり、電車の線路と高速道路の橋が落下したりしたことが信じられないのです。市内に住んでいる友達の方に早く電話しようと思いましたが、電話が通じないので安否の確認ができません。友達皆が無事かどうかとっても不安でした。

何をしたらいいかと考えて、まあ、とりあえず、また、そとに出て、もう少し離れた所まで歩こうと決めました。二キロぐらい歩くと、落下した新幹線の線路が見られます。古い日本の伝統的な木造建築があった住宅街では全部の家が倒れてしまっていました。重い屋根が軽い木造を潰してしまいました。本当にひどい状態でした。落ちた屋根瓦、家の壁、家具などで道が通れなくなり、壊れた家の前で人が座ったり、物を探したりしていたのです。テレビの映像より、もっともっとひどくて、とても悲しいと感じました。神戸に大きな地震はないと皆が思っていたので、高い地震保険にはいっていませんでした。

倒れていない家からも屋根瓦が落ちて、瓦の下、屋根をもっと重くする土が見えるようになりました。大体、そういう家も建て直さないといけないと思います。きれいな木造と違って、僕が住んでいる新しいアパートと同じような機能的な醜い建物が大体大きな被害なしに残っています。壁の落ちている家、一階が二、三階に潰されたアパートも見ました。潰された一階に寝ていた人は多分皆亡くなったで

しょう。

地震があった日の夜は、余震が多いためだけでなく、ずっと、友達が無事かどうかと考えていたからあまり寝られませんでした。とりあえず、翌日、ミカ君と二人で自転車に乗って市内の方へ行くことにしました。

翌日、僕が住んでいる宝塚市から神戸まで行くと、道には教えられないぐらいたくさん壊れた家があり、その前を通りました。火事があったところも見られます。通れる道路は車とバイクで込んでいます。停電のため、信号が働かないので、どんな交差点でも交通が混乱していました。自転車を下りて5分ぐらい交通の混乱を見ていました。三つの電鉄会社の線路が、橋のある所で落下していました。片付けて修理するため何ヵ月間かかるのでしょうか。普段、電車が走っている線路を今ではリュックサックとか鞆を持つ人が大阪の方へ歩いているのです。頭上はずっとヘリが飛んでいて、救急車と消防車のサイレンが止まらず、まるで戦争のようだと思いました。

開いているスーパーではもう品物がなくなっていたり、数百メートルぐらいの人の列がありました。飲み水がある所も人が大勢待っています。公衆電話の前もそうです。歩道のそばには、山ほどゴミが集まっていました。壊れた家の木材に火をつけて、身体を暖めて、昼御飯を作る人もいました。

僕たちの友達は大体無事でしたが、二人のミャンマーから来た友達の家だけ見つけられなかったのです。その辺の住宅街は完全に壊れて、道が全く分からないように変わっていました。数日後その二人が残念ながら亡くなったということを聞きました。とても悲しいと感じています。

段々余震が少なくなってきました。テレビ局も毎日の特集番組をやめて少しずつ普通の番組を放送し、電話はまた使えるようになりました。臨時バスが設定されていますが、言うまでもなく、非常に込んでいます。ある日、バスで三ノ宮へ行きました。しかし、そのことが大間違いだったということが帰る時にわかりました。待っている人の列が400メートル。絶対数時間待たなければならないでしょう。歩くことに決心して、友達の家で泊まることにしました。

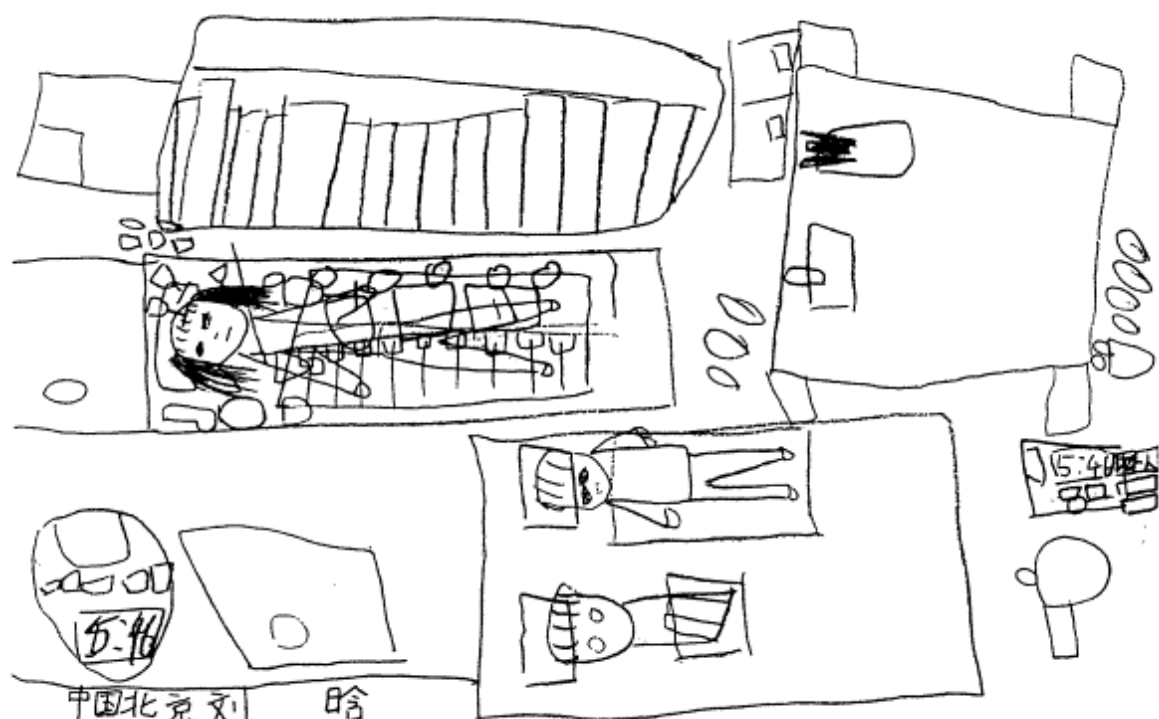
ミカ君と僕は被害があまりなくて、元気にしているのですが、テレビで特集番組やニュースを見るだけで、要求不満を感じています。日本語の能力がまだ足りないから、ボランティア活動に参加することも限られています。

それに対して、日本人が近所に住んでいる外国人に大へん親切にしていることを感じました。日本人の友達は食事や入浴に招待してくれたり、食べ物やお水20リットルも家まで運んでくれました。ガスも止まっていて、一番困っていた時、ガステーブルとガスカートリッジ30本、数ヵ月分のスプライトももらいました。

亡くなったミャンマーの友達の遺品を探すために二回も自転車で神戸へ行きましたが、とても悲しかったです。

結局、私も友達に誘われて、宝塚を後にして大阪で2週間のホームステイをやりました。私達はそれほど被害がなかったのですが、ひどい目にあった人が大勢います。

親戚の人を失ったり、あるいは家を失ったりした人々には心からお見舞い申し上げたいと思います。



中国北京刘 晗

神戸が死んだ日

ハナ・リー（女） ニュージーランド
神戸大学
（日本語訳：ハナ・リー）

揺れの覚えはない。地震だと分かってたが、心に地震の揺れのブロックがある。ベットでぐっすり寝ていた。ものが落ちてくるのに気がついて、頭を守るため、布団を引っばったのは本能だと思う。なにか物がわたしの体に落ちてきた。しかし、さいわいベットのそばの襖だけだった。すぐ、揺れが終わったのも覚えている。大きな地震はもっと時間がかかるはずだと思っていた。

真っ暗で、沈黙が続いた。私たちはショックを受け、次に何をしたらいいか、わからなかった。2階に住んでいた日本人が声をかけたことで、私たちは我にかえった。みんなに声をかけて、みんなが無事であることを確認した。しかし、真っ暗なので、まわりの様子がわからず、家が危険な状態にあることや、生きていることだけでも運がよかった、ということも全くわからなかった。友達のジュン（ブラジル）の部屋は戸口に近かったので、戸から出なさいと声をかけた。ジュンは玄関から出てみたけど、ドアは開けられなかった。2階の日本人は懐中電灯を見つけ、2階で光をつけた。不思議なことに、その光は私の部屋まで届き、ジュンがトイレに立ち、トイレのドアから外へ逃げようとしていた姿が私の部屋から見えて、驚いた。

私の部屋とトイレの間の壁、そしてトイレもなくなっていた。壁が倒壊して、トイレを潰したのだろう。この時、友達のカースティ（オーストラリア）は彼女の部屋にあった壁を指さした。それもなくなっていた。カースティと私の部屋が一つになってしまったことに、あとで気付いた。私たちの部屋の間、そして、家中の襖の扉が私のベットの上や床まで倒れていた。私にパニックがはじまった。徐々にその地震の影響や損害の状況がわかってきた。

ちょうどその時、強い余震がきた。カースティの部屋から、カースティが砕けた石や倒れた襖をのりこえて、私の部屋に飛んできた。2人で私のベットにはいって、襖の下にかくれた。しかし、もし家が完全に倒れたら、その襖には私たちの命を守る力はなかった。まだ真っ暗だったので、余震の恐れがあるが、家からどう逃げるかは、全くわからなかった。その時、隣の家のおばさんが懐中電灯で外のガラスドアを照らしながら「皆さんは大丈夫ですか」と聞いた。カースティは少しパニックになって、「大丈夫じゃない」と答えた。カースティに“shut up”と言って、皆が生きていて、無事であったと答えた。おばさんと近所の2人の男性が前のドアのガラスを割った。おばさんが照らした光で外までの道がわかって、パジャマで裸足のままドアまで進んで、おっちゃんに外へ引き出してもらった。外はガラスでいっぱいだったので、おっちゃんの靴の上ののった。私につづいて、カースティが逃げ出せた。ジュンは台所に進んで、やっとカースティの部屋まで来て、セーフティに引っ張ってもらった。2階に住んでいた日本人、そして友達のザック（オーストラリア）は階段が垂直で、たくさんの段が外れているため、2階から降りるのは大変むずかしかった。なんとか降りてきて、ジュンの部屋、そして台所を通って、ドアの外れた玄関から逃げ出した。たすけてくれたおっちゃんが再び現れ、3足の靴をくれた。靴を履いて、私ははじめてまわりの様子をみた。

私たちの家は隣の家にはっきり寄り掛かって、大きな穴を開けており、隣の家が被害が多かった。私たちの2階建は1.5階建になり、今にも1階建になろうとしていた。庭の洗濯物を干していたところは庭の壁が崩れ、がれきしか見えなかった。これを見て、ショックを受けた。なぜかという、家の状態はひどいとは思っていたが、まだ暗かったので、はっきりわからなかった。しかし、がれきの下に私の物があると思うと言葉で言えない気持ちになっていた。砕け石の中に私の服を探そうとした。やっとジーンズが見つかり、すごくうれしかった。周りの人々は私を変な顔でみていた。

今まで私たちの家のことだけに気を取られていたが、まわりも被害がひどいと気付いた。ゆっくりと近所をみると、隣人は私たちほどラッキーではなかった。道を渡ってすぐの家は完全に全壊し、がれきしか残ってなかった。あと、おじさんとおばさんは助けられたが、おじいさんとおばあさんは下敷きになり、亡くなってしまった。すぐ左の酒工場も完全に崩れてしまった。ある日の朝の3時ぐらいに起きたとき、何人も働いていた。思うに、その朝にも働いていたのだろう。

住んでいた御影本町はすっかり変わった。薄暗い中で家のそばの道路で、ショックを受けながら話したり、知っていたところが崩れてしまったのをみんな見てまわった。混乱の中で、カースティが「大家さんがきた」と言った。めがねもなかったし、暗かったので、よくわからないまま、その人と話していた。結局、大家さんではなくて、小さくて、うるさい犬を飼ってる近所の人だった。その犬のせいで寝られなかった日もあったので、“事故にあったらいいね”とよく言っていた。不幸に生きていた。（動物は地震の予測ができる？）まだ、うるさかった！

他のところは怎么样了か知りたかった。私とジュンは低くなった高速道路を渡った。43号線より北

のほうは私たちの近所より、だいぶひどかった。約6軒の長屋があった。完全に崩れた木造の家から、近所の人や学校で知っていた人達が、がれきの下に埋まっている人達を助けているのを、私は見ていた。どうしたらいいかわからなかった。

私とジュンが手伝おうとした時、10才ぐらいの女の子の身体が家から出された。彼女のぐにゃぐにゃの体はお母さんに渡された。また、別の女の人はおじさんが寝ていたところを指して捜してくださいと頼んだ。おじさんの身体はそこにはなかった。散歩に行ってますようにと祈っていた。私たちは手伝ってるよりも、じゃまになってるようなので、家に帰ろうとしたが、道の途中で近所のおじさんが走ってきて、手伝ってくださいと頼んだ。おじさんのすぐ近くの全壊の家につれていかれ、下敷きになっていた奥さんを助けるように頼まれた。奥さんが寝ていた1階が10センチぐらいまで縮んでいた。おじさんはずっと声をかけていたが返事はなかった。倒れた梁で2階を支えようかと考えたが、無理だった。挫折した私たちは家に戻った。

地震が起きてからたった15分しかすぎでなかった。その時まで津波の恐れを全く考えなかったが、海に近いところだと思い出し、北にある阪神御影駅の方まで歩いてみることにした。公衆電話が使えるかもしれないと思った。

地震直後、私たちの付近が最もひどい所であるよう祈ったのを覚えている。東京で起こった大地震の影響がここまで来たという可能性も考えた。駅の途中で家から物を出していた人がトランジスタラジオを置いていた。何が起こっていたか知りたかった私たちは一生懸命聞いていた。淡路島中心でマグニチュード7.2で大阪と京都に被害はほとんどなかった、という内容でかなり安心した。しかし、当時被害はどのくらいか、被害者の数がどのくらいかわかっていなかった。家から初めて出た時、亡くなった人は50人を超えるかもしれないとカーस्टィが推測した。その時、死者が5500人をすぎるとは思わなかった。

付近を見ながら駅までの8分は沈黙であった。私は眼鏡がなかったが、ビルの中階がなくなったり、道路にひびが入ったり、段差になったりしていることがわかった。どこへ行っても被害が私たちの近所ぐらいか、それよりもひどかった。私たちが知っていた神戸はもうなくなったことがわかってきた。そのことで大きなショックを受け、泣きはじめた。

駅付近は思っていたよりも、大丈夫で公衆電話1台は働いていた。私は先にかけようとしたが、母と父は仕事で、どこへ電話したらいいかわからなかった。日本の時間で6:20amごろはニュージーランドでは10:20amである。すすり泣きながら、直接ニュージーランドのオペレーターにかけ、父に早く電話したかったので、父の仕事場の電話番号を調べてもらい、コレクト・コールを頼んだ。その時には気付かなかったが、そのオペレーターの態度はよくて、よく伝えてくれ、父とすぐ話せた。父との会話はあまり覚えてないが、多分「大きな地震があって、家は私たちの目の前で全壊し、周りの人が亡くなった。みんなが電話を使いたいので、バイバイ」ぐらいだった。父はかわいそう！ザックもジュンもカーस्टィも実家に電話した。その時に年とったおじさんが走ってきた。奥さんを救うため救急車を呼ぼうとしたが、通じなかった。電話がまた使えるようになったので、先輩のジョンに電話した。ニュージーランドやオーストラリアの仲間はみんな無事で、ジョンのアパートでビールを飲んでいるといていた。被害はほとんどなく、クリス先輩の植木が倒れ、葉が折れただけだった。他の先輩を呼んで、私たちの物を家から出しにきてほしいと頼んだとき、ジョンは何のことかわからなかった。住んでいる篠原台では被害はあまりなく、海の方はどんなにひどいか、わからなかったからだ。どこでも家が壊れたり、人が死んでたりしていると説明したら、大変驚いていた。

駅で電話を使ったとき、周りの人はとても落ち着いた様子だった。私たちしか感情を表さなかったようだった。2週間後、日本人のボーイフレンドとこれについて話し合った。泣いていてもだれにも役に立たず、他の人を助けられないと日本人の精神を説明してくれた。この説明を聞いて、理解した。欧米人は、まず自分を助けようとするが、日本人は、やっぱり、まず他の人のことを考えている。やっぱり文化の違いだった。外国の新聞には、地震後の日本人は冷たくて、無関心であったと書かれた。私も皆も泣かずに頑張っていたと見て、最初は、そう思っていたが、近所の人、そして、全然知らない人も私たちに特に親切で、よくお世話になった。近所の人はお互い助け合って共通の目的のため頑張っていた。私はそのようなことが本当にすばらしいと思われた。

朝日が昇り始めた時、ゆっくりと家に戻ってきた。ザックはカメラを家から出し、写真を撮っていた。やっと家に帰って、外に立ちながら、何をしたらいいか考えた。まず、家具を出した方がいいと思って、（今考えると馬鹿なことだったけれど）家に入って、できるだけものをもって、家の前の道に置いていた。私たちはショックを受けていたため、その後のことを全然考えず、地震で無事であったので、もう大丈夫だと思った。台所の椅子をまず出し、その後、ジュンはお腹が空いたのでパンを取りにいった。

私も家に入って、パスポートと服を取った。カーस्टィもパジャマから、着がえた。その時、強い余震が来た。

カーस्टィはドアのわく（ガラスはもう割れてた）を開けずに外に逃げた。私は部屋でショックを受け、じっと立っていた。その時、本当に危険な状態だと気付き、もう入らないと決めた。しかし、私たちは、もうパスポートと服を小さなバックにいっぱい入れていた。荷物を取るとき、私たちの部屋、そして家

全体をみた。部屋のあちこちで洋服だんすやスーツケースや襖の扉など、私たちのいろいろなものが家を支えていた。とても危険だった。

その朝、ジュンが近くの家から、出血し、ぐったりした人が引き出されるのを見た。興味をそそられたジュンが近くまで見にいった。戻ってきたとき、ショックを受け、泣いていた。私もその身体を見たけど、眼鏡をかけていなかったの、ぼんやりとしか見えなかった。家の外で誰かが布団を敷いて身体を寝かせた。後でザックが呼ばれて、トラックの後ろに布団を巻いた身体を運んだ。その時は生きていたが、危ない状態だった。

家から出したものを道に置いていたが、小型の車が来たので道を通すため荷物を下げた。二軒先の家にその車は止まった。その家のお父さんが娘さんと奥さんに支えられ、病院に行くためにその車に乗り込んだ。その時になって、やっと眼鏡をみつけ、見えるようになった。お父さんの足の怪我や、苦痛な顔がはっきりと見え、忘れられない。近所の人々をよく知らなくて助かった。知っていたらもっと悲しいと思うから。

家の外にいと、いろんな友達が心配して、私たちの所まで会いにきてくれた。ジュンの友達の藤田がまず来て、私たちが、無事であったことを確認して、次の友達の所へ走って行った。アリオ（インドネシア）やマルシオ（ブラジル）も地震が起こったとき、近くにいたのですぐ来た。（カースティの友達）のこうちゃんもすぐ来て、しばらくの間、私たちといっしょにいた。その後、先輩のジョンやジェレミーやクリスやジェソンも来てくれた。ジョンは原付で六甲道を通って来たのだが、ジョンによると、六甲道もその近所も全壊して、御影よりもひどいようだった。ジョンはJRの高架が下まで崩れて、タクシーを潰してしまったのを見たそう。運転手のぐにゃぐにゃ足はドアから出ていたそうで、まわりは血でいっぱいだったということだった。

私たちは、とてもラッキーだとジョン先輩は何回も言ったけど、地震にあったことはとても不幸だと思っていた。しかし、その後、家に何回も入ってみてラッキーであったことが分かるようになってきた。地震後、運命について話して、生命を違う方面から考えた人も多いと思う。私は考え方を変えた、とまでは言えないが、ペットの位置や地震の揺れ方と時間が私に運よく作用し、私はまだ生きていると思えるようになった。コンクリートの壁が崩れてきて、私の机を覆ってしまった。私たちの家は、角にあったが、揺れ方の具合で、一番近いとなりの家に崩れた。もし、他の方向の揺れ方だったら、完全に全壊して、私と、カースティとジュンは下敷きになってしまったと思う。もし全壊していたら、私の部屋の上にはタンスなどの物置部屋があるので、特に私は生きられなかったと思う。今考えると、みんなが怪我なしで、無事であったことが信じられない。

その火曜日、家の外で座りながら、地震後の成行き、特に私たちの日常生活に関することについて話していた。どこに住むか、学校はどうなったのか、期末試験はどうなるのか…いろいろ考えることがあった。家から出した椅子に座っていた。しかし、その後、椅子をどこに置いておくのか？家から完全に物が出せても、置くところがないと気付いたので、やめた。一人に一つの小さなカバンいっぱいのもので、私たちの荷物を家のなかに入れておいて置くところが見つかるまで置いておくことにした。家がそのまま残るのを祈った。その日、余震がいっぱいあって、どれでも家を崩す力があるように思われた。

ポートアイランドの留学生寮へ部屋を探しにいくことにした。カースティとザックはカースティのバイクにのり、ジェレミーは荷物を原付に載せていった。私とジュンとジョンはずっと待っていた。その間、まわりの被害を見ながら、話をしていた。何時間か、経ったらカースティとザックがやっと帰ってきたが、悪い知らせしかなかった。三宮までは、どこも破壊されていた。道は逃げようとする車とトラックでいっぱい、道路自体の様子もひどくて、通れないところも多かった。こうちゃんが魚崎から来たときに、倒れた阪神高速道路を見て、壁のようになっていたと話していた。これは、メディア（ニュージーランドでも）でよく映った。高速道路の部分は私たちの所から1キロぐらいしか離れていなかった。

カースティとザックはやっと三宮について、人口島のポートアイランドへ行こうとしたが、一部分がなくなったため、通る橋は歩行者とバイク以外通行止めだった。頑張って通ったが、ポートアイランドに着いたらどこも無秩序状態（カオス）だった。アイランド全体が液状化したため、何センチもの泥が覆った。いろんな所にドライブしてみて、留学生寮が、まだ建っていても、住める状態ではないと気付いて、帰ってきたそう。どうしよう？ジュンは友達のラフェール（メキシコ）の所へ、ザックはクリス（ニュージーランド）の所へ、カースティとジェレミーはジェソン（ニュージーランド）の所へ、そして私はジョンの所へバラバラ泊まりにいった。北の山の所の家はほとんど大丈夫だった。ジェレミーは最初カーペットに醤油の汚れがついただけで以外にアパートは大丈夫だと思っていたが、帰ってみたら傾いていたらしく、大家さんは引っ越ししなければならないと皆にいていた。

ジョンのマンションは電気も水道もあったが、残念ながら、ガスはなかった。そのためシャワーは浴びられなかった。隣のおばさんは皆に夕食を作ってくれた。夜になったらジョンの友達がいっぱい来て、友達の行方を捜そうとしていた。私は岐阜と大阪のホストファミリー、そしてまた父と母に電話

をした。皆は私のことを心配して、混乱していた。ホストファミリーに早く次の電車に乗って、岐阜まで来るように頼まれたが、電車がなくて、大阪まで歩くほか逃げる方法がないと説明した。一日中、ボーイフレンドの俊英の大阪の寮に電話した。大阪にいたと思ってたので、あまり心配していなかった。しかし、やっと寮につながると、まだまだ実家の明石から帰ってないと聞き、すごく心配になった。なぜならば、明石は神戸より地震の中心に近いからである。寮に、私は無事でジョン先輩の所に避難しているとメッセージを残した。その夜、俊英から電話があった。実家はほとんど大丈夫で、私のことをずっと心配していたと言っていた。

夜、テレビで神戸の損害を見ていた。阪神高速道路、電車の線路、道路や三宮のビルを見たが、最もひどかったのは、その夜から何億ヘクタールも燃えた長田区の火災であった。テレビにでた専門家は被害が広大なため、地震は地表から何百メートルぐらいの深さで、普通の横揺れに対して上下揺れであったという学説をたてていた。

その夜、出身のニュージーランドのネルソン新聞から電話があって、地震についてインタビューを受けた。その後、ニュージーランドの全国の新聞とラジオとテレビに出たらしい。メディアスターになってしまった！

ジョンは電話でアメリカの友達と話して、アメリカのテレビで神戸に20%~30%の確率で、震度6以上の地震が起こるかもしれないと地震学者が予言したという話を聞いた。私はその話を聞いて、大変びっくりしてしまい、地震後一番ひどい夜になってしまった。ずっとランプを付けたままだった。その夜は信じられないぐらい長かった。私もジョンも全然寝られなかった。また地震が来るならば、今度は私も絶対死んでしまう、とずっと思っていた。余震は規則正しく起こっていた。地震が来る前には遠くから大きなトラックがそばを通るような音がした。私はジョンのベットの側で布団に寝て、余震が来たら、ジョンは私の頭の上を守るように手で覆った。私は布団を頭のうえにかぶせて、なるべくジョンのベットの近くに転がって近付いた。天井が崩れたら、ベットの下がいちばん安全だと思ったからだ。余震が起きるたびに、これでおわり、もう死んでしまうと思った。大きな地震は来ず、死ななかったが、朝がやっと来た頃には疲れ切っていた。

朝になっても、まだどうするか分からなかったのでテレビを見ていた。私たちの家の近くにガスの漏れがあったらしい！御影周辺は燃えてしまうと思って、2号線より南の御影から魚崎までの何千人もの人が北に避難した。幸いガス漏れは直り、しばらくの間、私たちの家も大丈夫だった。

食事に不自由したことはなかった。スーパーは開いていると聞いたので、ジョンの友達とジョンは朝早くからスーパーの外で並んでいた。帰ってきたら、カップヌードルから水まで多くの種類の物を買ってきた。その食物以外にも、ジョンの冷蔵庫に残ったもの、そして実家に帰った友達のアパートにも食物があった。ジョンのアパートは築2年のため、けっこう安全な所だと思っていたが、昼ぐらいに水道が止まってしまい、神戸に残れないと思った。

ジョンと私は水が止まる前に、水をお風呂いっぱい入れ、その水をわかつて、ビンに入れていた。ガスもなく、トイレも使えない状態だったので、安全に生活できる大阪へ避難したくなった。だから、カースティとジュンとザックに相談したが、もう2時だったので、次の朝まで待つことにした。西宮から電車が出てると聞いたので、歩いて4時間ぐらい離れた西宮に行くことにした。しかし、ジョンのアパートの外の自然のなかでトイレへ行こうとしたとき、近くにこうちゃんが原付で通り掛かった。声をかけたら止まってくれた。その時、こうちゃんは友達と西宮まで歩くことになっていたので原付を貸してくれた。

その夜も隣のおばさんは夕食を作ってくれた。私はその晩もまた、ジョンのところに泊った。夜に大学の友達の愛ちゃんから電話があった。学校の友達、皆は私たちと連絡が取れなかったもので、とても心配していたようだ。愛ちゃんはその朝に他の神戸の友達に電話した。その友達は私の家を見に来たそうだけど、来たことがなかったのによく分からなかったそうで、私たちの家の辺りは全部全壊であったと愛ちゃんに伝えたそうだ。だから、愛ちゃんはもっと心配して、私のボーイフレンドの俊英の寮に電話して（どうして電話番号がわかったのでしょうか？！）、俊英の実家の電話番号を聞いて、俊英と話して、彼からジョンの電話番号を聞いて、やっと私と連絡を取った。愛ちゃんは地震のとき、友達の崇子の芦屋の下宿に泊まっていた。芦屋もけっこうひどかった。崇子のアパートの中もぼろぼろで、手荷物だけを持って実家の京都へ出発した。何時間も歩いて自転車を見つけ、それを借りた（?!）。その後、十三までタクシーにのっていったそうである。崇子のアパートも半壊であった。

余震で死んでもかまわないと思えるくらい寝たかったので、その夜、ぐっすり寝ていた。次の朝、またニュージーランドの新聞とテレビから電話のインタビューを受けた。10時ぐらいになって、やっとジョンの所を出たが、まず、大学の方へ情報を聞きにいった。（残念ながら（!））神戸大学の建物自体は大丈夫だったので、留学生センターを見にいった。神戸大学の552人の留学生中、私たちが初めて留学生センターへ無事を伝えにいったので、留学生センターのスタッフはとても喜んでいて、他の無事であった10人ぐらいの先輩の名前をあげたら、もっと喜んでいて、しかし、下宿はどうなるか。期末試験はどうなるかを質問したら、何にも分からなかった。それよりも他の540人の留学生の行方について心配し

ていた。大使館と連絡を取ったが、大使館も私たちのこれからの生活に関しては何にも知らなかった。

大学でたくさんの人々があるいていた。避難場所になっていた。偶然に、大阪から友達を助けるためにきていた桜井くんであった。バイクで大阪に逃げようと決めたので（ジュンと私はこうちゃんの原付にのって、そしてカースティとザックはカースティのバイクで行く予定）、朝来たときの道を教えてもらった。私たちは出発した。こうちゃんの古くてぼろぼろの2人乗りの原付では遠くまでいけないと思ったが、その原付は驚くほど頑張っていた。どこへ行っても道路の状態はひどく、車は進めないぐらい多かった。普通45分しかかからない道がその日は13時間かかったらしい。どこへ行っても見たことない広い没落と破壊があった。原付ですっと2時間かけて歩道を走り、近道を通り、赤信号があっても急いでいたが、まだどこを見てもひどかった。西宮を通ったら、やっと被害が少なくなっていた。しかし、そこでも、たくさんの家は“Blue Helmets”（青のヘルメット……私がつけた名前）を、つまり屋根に青いシートを付けていた。

ジュンはヘルメットなしで、私たちは交通ルールを全部破った。3時間後やっとホストファミリーが待っている大阪の箕面市についた。4人でホストファミリーのところで泊まっては悪いと思っていたので、まず、前の年に通っていた大阪外国語大学へ行った。前の先生たちに無事であると伝えて、外大の留学生の部屋を貸してくれるように頼んだ。さすがに部屋があっても貸してくれなかったが、コーヒーとお菓子を出してくれて、他の寮に電話してくれた。やっと前、住んでいた関西留学生会館に3月末まで無料で入れることになった。汚くて狭いが、ベットも机もあり、やっと1人で寝れるようになった。外大でシャワーをあびたら、ずっと待っていたホストファミリーの寺内さんのところへ行った。すごいごちそうも寝心地のいい布団も用意されていた。ぐっすり寝ることができた。

次の夜も私は寺内さんのところでゆっくりして、地震のこと以外について考えようとした。月曜日に俊英が5時間かけて、北の山まわりで電車で箕面にやってきた。やっとまた会えて、とてもうれしかった。俊英と地震について話したときだけ本当の気持ちがあわかってきて、泣いてしまった。何日後、俊英と会いにいくため寮へ行ったが、なんとなく、また泣きはじめ、ずっと3時間泣き続けてしまった。

情報を得るため、ずっとテレビを見ていた。知っていたとおり、電車は全部不通で復旧まで何ヵ月もかかりそうだった。阪神高速道路は修復に少なくとも3年間かかりそう。三宮の50%のビルは3ヵ月以内に営業できない。たくさんビルは建てなおさなければならない。被害は何兆円である。地震のことはテレビで毎日24時間やっていたので、いろんなことに詳しくなってきた。阪神高速道路が崩れたことについて、たくさん放送していた。何年も前の大阪の万博に間に合わせるため、急いでいて、柱に木材が入っていたそうで全体は弱くなっていた。日本の建物の耐震規準は世界で一番といわれていた。25年前コンクリートに10センチ隙間に鉄筋を入れるような規準が導入された。この規準で建てられたビルはほとんど大丈夫だったが、崩れてしまったビルもあった。世界で6番目に大きい神戸港も厳しい規準でたてられたはずだったが、神戸に地震が少ないため、東京港や横浜港ほど厳しく建てられなかったらしい。神戸港の復旧は2年かかるはずだ。被害以外、国内そして海外からの日本政府に対する批判が出てきた。政府の地震の反応は遅くて、足りなかったらしい。自衛隊や他の援助が来るまで何日間もかかり、政府はいろいろな国際援助の申し出を断った。

その日曜日、カースティといっしょにホストファミリーの所へ行った。その夜、神戸で雨が降りそうとテレビでいっていた。雨が降ると私たちの家は完全に崩れると思ったので、すぐ原付とバイクにのって神戸へ出発した。カースティとザックはカースティのバイクに、私はこうちゃんの原付に、そしてジェレミーとジェソンは原付でついていった。また交通ルールを無視して、楽しく2時間かけて行った。家に入るのはとても恐かったので、3回ぐらい入って荷物を取ったら、また入れなくなった。いつでも家が崩れてしまうと思ったからだ。危なかったのでヘルメットをかぶったまま、はいつたが、それで壁などに頭をぶつくと、家全体が危険で動いた。写真や感傷的な物や服などはほとんど出した。幸い、たくさん物はステレオを載せていた棚板の上に置いていたので、割合、簡単に取れた。私はステレオまで取れ、ザックもコンピュータが取れたので、うれしかった。神戸へ行く前、ジュンと連絡が取れなかったのがジュンのものも適当に取った。

たくさんものを家から前の道に出したとき、暗くなっていた。原付でジョンの所へ運んで、しばらくの間ジョンのところで置いておくことにした。原付いっぱい荷物を積んで、何回もジョンの所まで行った。普通10分で行ける道は通りづらかった。車は渋滞で進めず、道路の状態もひどかった。1時間後、アリオとやっとジョンの所につき、隣のおばさんにジョンの鍵を開けてもらった。帰りにガスタンクでガソリンを入れて帰った。そこでは、手でポンプを動かし、ガソリンを入れていた。原付いっばいに荷物を積んで、ジョンの所へ何回も往復した。5回目で、10時ぐらいになり、やっと終わった。ジョンのベランダは荷物でいっぱいになった。おばさんが作ってくれたカレーライスを食べた。食べたなら、大阪へ、また戻った。つかれていた。

どこかへ行って、何かしたかったが、大学の期末試験の予定が分かるまで、何にも出来なかった。次の週の1月31日（火）やっと学校で説明会があった。しかし、その日曜日の夜、大家さんから電話が掛かってきて、月曜日に家の解体を申し込むので、荷物を出してくださいと言われた。皆は、前行った

ときに忘れたものがあった。私は、おばあちゃんが亡くなったときにもらった真珠のネックレスをわすれていたの、なるべく取りたかった。ザックと大阪外大の生協ヘワンボックスのレンタカーを予約しにいった。神戸まで10時間もかからないように（平日の昼間には神戸まで10時間かかる）朝の3.30amに出発した。驚くほど早く着いたので、朝日が昇まで寝ることにした。ザックは家の外の小さな道に車を止めたが、地震が来たら、倒れてくる物に近すぎると（私だけではないでしょう！）心配なので広い弓場線（道路の名前）まで移った。しかし、私たちは寝られなかった。

日がやっと7時ぐらいに出てきたときに、最後に家に入っていた。地震よりも自分の荷物が大切だと自分に言い聞かせ、自信を持って、いろいろな物を取った。ほとんどの服（しかし、洋服ダンスが傾いて壁を支えていたため、中に入っていたスカートやドレスは無理）やこたつと地震2日前に買った電気カーペットや布団やおばあちゃんの真珠や本などが取れたので、満足であった。私はちゃんと整理するたちなので、夏の服はスーツケースに入ったままで、また、いろんな物はちゃんとした袋などに入っていたし、どこにあったか分かったので、すぐに簡単に物が取り出せた。部屋に入ったときに、壁に掛かっていた絵に気付いた。その壁全体は机のうえに倒れてきたが、絵はかかったままで、垂直に立っていた！地震はやはりすごかった。10時ぐらいまで、取れる荷物は全部出せたが、やはり大きな荷物や家具は無理だった。レンタカーの天井まで、いっぱい荷物を入れたら、ポートアイランドのショーン（ニュージーランド）先輩の部屋に入れておくために出発した。何時間もかかって行っただが、やっと着いたらショーンの部屋も天井まで、ものが置いてあった。ショーンは何日か前に、帰ってこないつもりでオーストラリアへ行っていた。

学校へ遅れて2.30pmに着いた。教室は人でいっぱい、私の友達の中には5時間かかってきた人もいた。予想通り期末試験は中止で、その代わり1000字以内のレポートがあった！私たちは喜んでいた！

法学部だけで7人も亡くなった。全校で39人。知っていた友達は皆、無事でやっと、ゆっくりと話げできた。

大阪に持っていききたいものをレンタカーにいっぱい入れて、神大の留学生センターへ行ってみた。留学生7人が地震で亡くなってしまった。私はその中で中国のジェーしか知らなかった。年末の留学生パーティで1回だけ会ったが、よく話して、大変好きだった。カースティと経営学部でいっしょで、カースティと友達であった。他の留学生と同じマンションにすんでいて、二階がおちてきたためジェーと他の学生は亡くなっらしい。遺体をみつけるまで、何日もかかったが、ジョンとアリオは友達としてお葬式に出席した。私はジェーの両親について考えた。地震がもうちょっと強かったら、私の両親も同じ立場だった。ジェー以外他の知っていた人は皆、無事であった。

留学生センターによくお世話していただいた。食物と飲み物もくれたし、お見舞い金やホームスティなどについて、いろいろ教えてくださった。文部省からの留学生へのお見舞い金以外、友達やホストファミリーなどから、いろいろいただいた。また生活を立てなおせるようになったので、大変感謝している。

次の朝、岐阜のホストファミリーの所へ行こうと思った。そこなら静かにレポートを書きながら、お母さんに甘えて、ゆっくりできると思ったからだ。その朝、ザックといっしょに甲子園と芦屋まで新しい下宿を探しに、そしてお見舞い金をもらいにいった。しかし、電車はまだ不通のため、代替バスで行かなければなかったが、列がすごかったので、やめた。岐阜へ行く途中、京都で愛ちゃんから授業のノートをもらった。4時間ぐらいで、久しぶりに岐阜に着いた。やはりホストファミリーは世話してくれた。お母さんは私には精神的そして情緒的なストレスがたまっていると思ったので、教会の牧師を家に呼んで、私のため祈ってもらった。牧師さんと話したら、ストレスがたまっていることに始めて気付いた。毎晩、横になって寝る前や、じっと何もしていない時、いつも地震のことを思い出してしまった。部屋に入る時、まずレイアウトをみて、また地震が来たら、何が倒れてくるか、私はどうやって逃げるのかをチェックした。いまでも、電車がかどを通ると時や、遠くにトラックが通っている時や先日の雷の時でも、恐くなって、地震のことを思い出してしまう。

神戸から出た時から、とくに岐阜にいた時、だれと会っても皆は「地震はどうでしたか。恐かったですしょうか。知っている人は亡くなったのか・・・」などの地震に関する質問を聞いてきた。最初は皆にちゃんと答えていたが、いまは、もううんざりしている。地震について毎日考えて、思い出して、悲しくなりたくないからだ。

ニュージーランド航空からやすい往復チケットを売ってもらったから、9日岐阜を出て、大阪へもらいにいった。アンセットオーストラリア航空からオーストラリア人は普通の4分の1のきっぷ、5万円の往復チケットを売ってもらったので私もニュージーランド航空に電話してみた。5万円は無理だったが、10万円で売ってもらったのでうれしかった。2月16日から6週間ニュージーランドに帰ることになった。レポートを書きながら、俊英とよく会えた。テレビや新聞ではまだ地震のことばかりだった。地震のことが多すぎると思ったが、私はまだよくテレビを見ていた。地震から3週間後、テレビと新聞では“人”のこと、つまり、避難所に住んでいる人のことやそのストレスやこどもの精神などについて報じていた。ある日の英語の新聞に出ていた記事をよく覚えている。ある避難所で夕ご飯として、うど

んが配供されていた。ある日本人はうどんの汁だけほしかった。給仕する人はボスに聞いてみたが、そのボスは他の人と相談して、結局駄目だったみたい。日本の官僚制度では決まった手順を通らなければならない。地震のような特別事情があっても融通がきかない。

帰る前に、俊英は先輩のバイクを借りて、2月14日、2人乗りで神戸にいった。やはり、道はまだこんでいて、時間がかかったが、後ろですることがなく、初めて阪神の間をゆっくり見ることができた。地震から神戸に帰るのは、4回目だったが、西宮と大学の間はほとんどまだそのままだった。大学ではニュージーランドに帰る予定を言って、大学の寮に申し込んだ。3月20日に結果が分かることになっていた。入ることができたら、その後、ゆっくり下宿を探そうと思っていたが、全校から女性50人しか入ることができないということだった。ほとんど無理だと思ったので、留学生センターへ行ってホームステイの本を見せてもらった。俊英の実家から近い西明石に女性2人のホームステイがあったので電話して、その夜、見に行くことになった。新しいところで、私とカースティのプライバシーも結構守られているようなところだったので、ニュージーランドから帰ってきてから、しばらくの間住むことにした。

俊英と私は御影の家を見にいった。もう解体は済んでいると思ったが、行ったらまだ前のままだった。ブルドーザーが隣の家を解体していた。俊英は地震後の神戸をはじめてみた。他の人と同じように自分自身でみる神戸はテレビや新聞で見るよりも、ひどいと言っていた。俊英は私たちの家を見ても大変驚いていた（写真よりもずっとひどい）。私たちがとても危険な状態から運よく助かったということが分かってきた。

朝だったので、壊れたドアから光が家のなかまで入ったので、もう1回家に入って写真を撮ろうと思った。私も俊英もなかに入ることは不安であったが、思い切って入った。俊英は洋たんすのドアを開けるのを手伝って、残っていた服を取り出すことができた。家から全部のほしいものを取り出せたので安心した。

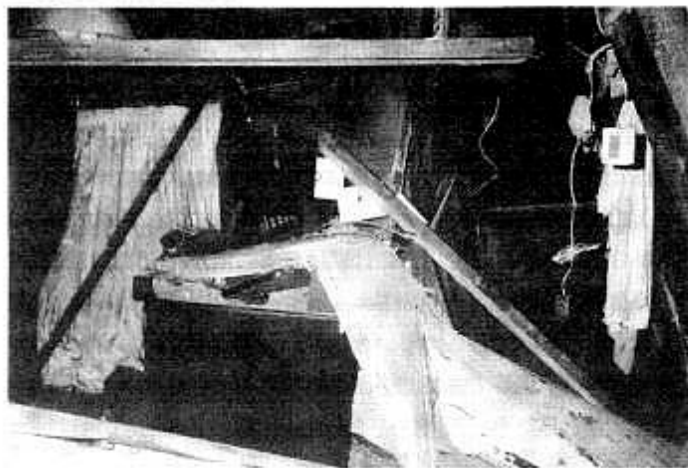
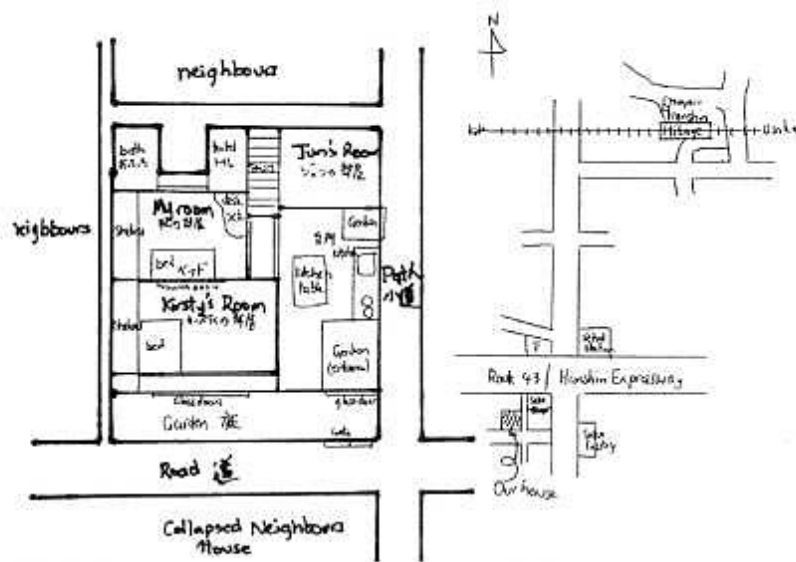
その後、ポートアイランドの寮へ銀行の通帳や、教科書を取りにいった。三宮は地震の被害がまだひどかったのも、バイクの後部座席から写真を撮った。ビルの解体はもう始まって、白い防音シートで覆われたビルが多かった。ポートアイランドはまだガスと水道のないままであったが、フレンドリーな雰囲気であった。ポートアイランドから神戸の西にある俊英の実家のある明石にいった。その日、バイクで5時間を過ごしたが、まだどこを見ても被害が大きかった。長い一日だったが、私たちは改めて地震の大きさに驚嘆した。

俊英の実家で俊英の両親と久しぶりにあった。よくお世話になった。幸いに明石は神戸ほどひどくなかった。次の日の昼ぐらいに明石を出て、3時間をかけて大阪に帰った。また、被害に驚いた。

2日後、大阪と神戸の思い出と別れて、ニュージーランドの実家に帰った。帰ってから3週間目。どんどん恐怖を忘れたが、地震について考えていない日はない。ニュージーランドに着いて1週間は、また地震か他の天災に会うような気がして、ずっと恐かった。夜は1番恐くて、1回あまりにも恐かったので母と父といっしょに寝てしまった。今はもう回復して平常心が戻ったので、もう大丈夫だと思う。また神戸に戻って、新しい生活をはじめたい。まだ、どこへ行っても、いろんな人に地震のことを聞かれる。あまり、そのことについて言わず、スマイルだけするようになってきた。地震のことはもううんざりだ。普通の生活に戻りたい。住むところも、私も、ライフも、戻してほしい。

皆、特に母と父と、大阪と岐阜のホストファミリーによくお世話になったときに、いろんな人に愛されていて、皆私のことを心配してくれているとよく分かった。

これからはどうなるか分からない。3月30日、日本に帰る。しかし、どこへ行くか、どこに住むか分からない。分かっているのは私は日本に戻りたくて、大学の生活を続けたいということである。私は地震ぐらいでは大学をやめてニュージーランドには帰らないとよく人にいった。今後は大変と思う。下宿もすぐには見つけれないと思うが、頑張りたい。また日本の友達や俊英と話したい。彼らだけが私の本心が理解できて、手伝ってくれると思う。この文章を書くことなどで挫折や恐怖が薄れてきた。しばらくしたら、部屋に入るとき、地震が来るときの隠れるところを最初に探す癖はなくなるでしょう。死ぬような危険な目にあったが、私は神戸の町が大好きです。神戸に戻って生活を立てなおしたい。忘れられない経験だが、年を取ったら孫に語れるおもしろい話になるでしょう！



帰る途中で

蘭 青（女）中国
京都教育大学
（日本語訳：蘭 青）

毎週一回、京都と神戸を往復するのになれてきた。阪急電車は、私がいつも利用できる重要な交通機関である。神戸から京都まで片道でも2時間半ぐらいかかる。電車では、いつも本を読んだり、ウワークマンを聞いたりしている。

1月16日の晩、いつもと同じように、京都へ帰る道へ足を踏みだした。梅田駅で河原町ゆきの電車に乗り換えた。電車の中では、座席に座ったまま、なにもしたくなかった。本も読みたくなかった。何も考えずに、窓から外を眺めると、夜空には星がいっぱい出ていた。輝くネオンのようであった。無意識のうちに、神戸ゆきの電車を流し目に見た。一瞬、気持ちが沈んだ。のびのびとした気分ではなかったが、理由は分からなかった。何かに、見捨てられてしまうような感じがした。涙が滲んできた。その電車を見ると、神戸にもう帰れなくなるような気持ちになった。

寮に着いたら、もう9時半になっていた。火曜日の授業の準備をした後、同じ寮の春名さんと挨拶してから、寝た。

朝早く、猛烈な揺れに、起こされた。春名さんと私は、すぐ地震だと思った。お互い、安否を尋ねた。ラジオによると、神戸はひどい状態であった。そのことを聞いて、心配した。17日の正午、河原町駅にきた時、電車の運転が中止された。私は河原町の高島屋デパートの中で座ったまま、運転再開の情報を待っていた。午後、4時ごろ、阪急電車は梅田まで運転を再開した。ただ、梅田に着いた時、その駅員に聞いたら、今晚は神戸に行けない、ということが分かった。

京都は次の日、すべて正常に運転された。18日、電車は西宮北口まで運行できた。西宮北口は地震の影響で交通機関は破壊されていた。大勢の人々は神戸へ向かって、歩いて行った。私も例外でなく、人の流れに沿って、神戸に戻った。沿道には、壊れた家、鉄道から落ちたレールがあった。道で出会った人々は、顔も洗っていないかった。彼らは壊れた家から取り出した物を持って、親戚の家へ身を寄せるようだった。その時の様子は、普段の日本人の外見とは違うようだった。

芦屋に着いたら、スーパーは営業していた。店の人は、棚から品物を取って、売っていた。お客さんは、順序よく待っていた。人々が公衆道徳を守っているのに、敬意を感じた。東灘区では、救援の消防車、救急車のサイレンがなっていた。上を見ると、倒れたビル、下を見ると、地震の影響で、地面も変になっていた。寒気を感じた。

4時間歩いて、やっと神戸の中心、三宮に着いた。いつもは、賑やかな三宮もその時は沈黙していた。以前高く聳えていたデパートは、中ほどで切断された状態で、目の前にあった。それは、泣いているようだった。お客さんに愛された商店も見られなくなっていた。私がよく行った国際交流会館の笑顔もなくなっていた。

神戸と別れるのは、もう間違いないと感じた。信じられない事実は本当のことだった。神戸と「さよなら」というのは嫌なのに、仕方がない。その時、16日の晩、電車の中で抱いた気持ちが、分かった。たぶん、あれは予感であったのかもしれない。私は神戸と本当に別れることになった。地震、天災のせいで、私のせいではない。地震、天災のせいである。。。。。

Aさんとの出会い

前田 歌澄（女） 日本
神戸大学

私は1月17日のあの地震を加古川の家で体験しました。加古川はだいたい明石と姫路の間にあり、地震による被害はほとんどありませんでした。しかし、交通がとだえ、身動きがとれなかったため、ただ家で不安に過ごす日々が続きました。

そんなある日、クラブの顧問である瀬口先生から電話で、神戸大学の留学生であるAさんが重傷を負い加古川の病院に入院していることを聞きました。私は彼女とは面識がありませんでした。そのため、マンションが壊れ、友人を亡くし、その上自分自身、重傷を負うというひどい状態にある彼女を、他人の私が見舞いに行って彼女が何か嫌な思いをしないかどうか不安がありました。しかし、とにかく同じ大学の学生で、何かあれば、手伝いぐらいはできる人間が近くにいることだけでも彼女に伝えようと思い、病院を訪れました。

私は、正直に言うと、彼女が神戸から少し離れた加古川という所で知り合いもなく、不便で寂しい思いをしているのではないかと思っていました。しかし、彼女には、はるばるお見舞いに来るような親しい知り合いがたくさんいるようで、入院生活に必要な物もだいたいそろっていました。そのため、私は最初、彼女がとてもすごい体験をしたわりには結構元気でしっかりしているので良かった、と思っていました。私のこともすぐに受け入れてくれたと思ったので、頻繁に病院に行く生活が始まりました。しかし、すぐに彼女の体験したことはあまりにも大きなことで、彼女はやはり精神的にも打撃を受けていることがわかりました。彼女の身の辺りの手伝いをしながら、彼女と色々な話をしていくうちに、彼女の不安や悩みがとても深刻であることがわかりました。彼女の亡くなった友人のこと、残された家族のこと、自分の勉強のこと、けがのこと、これからの生活のこと……。そして私も事態が少しでも良い方向にむかうように願いました。

彼女は私によくお礼を言いました。しかし、私は、お礼を言うべきなのは私の方だと思っています。地震後、心配な思いを抱えたまま、何もできずにいた私に、とにかく行動する目的を与えてくれたのは彼女です。彼女と一緒にいることで、たくさんの人々と会うことができ、様々なことを学びました。彼女と色々な話をする中で得たものもたくさんあります。彼女は、崩れたマンションの下からひっぱり出されて助けられた時、何も持っていない状態でまるで生まれたままの赤ん坊のような気がしたそうです。私にはその言葉がとても印象に残っています。そして、地震後という普通ではない状態で出会ったAさんと私だから、現在のような、まるで姉妹のような関係がもてたのかもしれないという気がします。

私は今回の地震が一体どういう意味をもつものだったのか、ここでまとめることはできません。とにかく、私はそれをきっかけに貴重な人と出会い、貴重な経験をしました。お姉ちゃん、本当に色々ありがとう。そしてこれからもよろしく。

“死を感じた一瞬”

カースティ・マッキャン
(女) オーストラリア
神戸大学
(日本語訳：大野木 輝之)

その日の朝早く、私はトラックが通りすぎる時に感じる様なガタガタという振動で目が覚めた。その瞬間、“何だろう”とは思ったが、毛布にしっかりとくるまっても意味のない程の寒さと、二時間もすれば授業に出る為に起きなければいけないという思いで、頭がいっぱいで他のことはほとんど考えていなかったように思う。

次の瞬間、突然、地球の中心から湧き出た様な大きな揺れが私たちの家を襲った。最初はゆっくりと、そして段々と強くなり、ついには家具が倒れ始めた。恐ろしくなった私は、本能的にお腹の中にいる時の赤ん坊のようにひざを抱え、布団にくるまり自分の体を守った。そして、やっとこれが地震だということに気付いた。全く動けない状況の中、さっきまでの安らかな眠りからは想像もつかない厳しい現実には気持ちを切り換え、同時に、家が壊れていることに気づいて、何も落ちてこないように祈っていた。ほんの数十秒間は、その時の私にとって本当に長く思われた。

私が、この阪神大震災がたった22秒間の出来事ではなかったことを知ったのは、二、三日経って人々が落ち着きを取り戻し始めた頃だった。

しばらくしてやって来た静けさの中では、何の話し声も物音もしなかった。それは、恐らく今まで誰も経験したことのないようなものであった。でも私には、この出来事が私たちの家だけに、いや私の部屋だけに起こっている様に思われた。とにかくひどいことになっていた。混乱した状況の中で私は精神のバランスをくずし、現実の前に打ちのめされていた様に思う。とにかく私は朝が来るのを待とうとしていた……

私はゆっくりと布団から顔を出したが、生々しい地震のにおいをかいで息が詰まりそうになった。そのとき、私達と同じ下宿の2階に住む日本人学生の一人（実を言うと、地震のその日まで言葉を交わした事はなかった）が『大丈夫ですか？』と叫ぶ声が聞こえた。その声に、いっしょに住んでいるハナ、ザック、そしてジュンが答えた。私は彼らの無事を知って本当に安心した。ザックが、マッチをつけるように頼んだ。少し間をおいて彼が、今度は、さっきよりずっと激しい口調で叫んだ、『駄目だ！ マッチをつけるな、ガスのにおいがする！』真っ先にジュンがこの壊れかけた家から脱出しようと試みた。私たちはジュンが、落ちている色々な物の上をまたいで、玄関の方へ、あちこちぶつかりながら歩く時のにぶい音を聞いた。

私たちが恐れていた、しかし微かな望みをかけていた玄関のドアはおしつぶされていた。私たちは監獄に閉じ込められたのだ。ジュンが、ハナと私にそれぞれの部屋のガラスの窓を試すように言った。彼の方は裏口を試そうとしていた。私が考えていたのは、以前、ハナのボーイフレンドに『一階と二階との間にヘビやネズミがいっぱい住んでるよ』とおどかされた事だった。私は全体の被害はわからなかったけど、少なくとも屋根が落ちていることだけは分かっていた。その時の私には自分をとり囲むたくさんの洋服やシャツなど全てが、ヘビやネズミに見えておびえていた。私は全く動けなかった。

ハナが自分の部屋に来てほしいと私に言った。私はすぐ側に誰か居るとどうかが分かって気が楽になった。私がベッドを出てから、隣の部屋までの長い旅が始まった。ガレキや、倒れたフスマを乗り越えてハナのベッドまで辿り着いたとたん、初めての余震が私たちを襲った。私には地震の大きさや、最初の揺れからもうどれ位経ったのか分からなかった。しかし目の前にある現実が、私の今までの人生の中で最も、恐ろしいものだということは、その時ははっきりと確信していた。

『私はもう死ぬかもしれない…』ハナと私はパニックになり、フスマで落ちてくるものを防ごうとしたがほとんど役に立たなかった。私たちは絶望の中、互いにしっかりと抱き合っていた。激しく地面が揺れ軽いものが私たちが隠れているフスマの上に滝の様に落ちてきた。しかし幸運なことに揺れは、より大きな被害を引き起こす前におさまった。

再び逃げ出す方法を探しているうちに、私たちはハナの部屋のドアも開かないこと、そして家全体が全くおかしい角度に傾いている事が分かった。

ジュンがトイレも調べたが、そこもやはり駄目な様子だった。ふとトイレの方を見ると、壁で隔てられて見えないはずのレオの姿が私たちの部屋から見えた、『壁がない！』

この地震の凄さを垣間見た私たちは、改めて恐ろしくなった。

ちょうどその時、生存者を探しに来た人達の懐中電燈の光が窓の外に見えた。助かるかも知れない、そう思った私にとって、それは自由と希望の象徴であった。『全員、大丈夫か？』という声に、とり乱していた私は『大丈夫じゃないです！』と思わず叫んでしまった。ハナが私をすぐに制して『全員無事

です、でも外へ出られません』と私の言葉を訂正した。（私も本当はそう言いたかったのだけど、その時の私は言葉を失っていた。）

彼らは私たちの為に、全員が安全に通れる位の大きさの穴を開けてくれた。そして私たちは彼らの待つ外の世界へ、ようやく辿り着いたのだった。

森島 涼子（女） 日本
神戸大学

震災後2月15日から、T r u s s（トラス）は、神戸大学留学生センター相談指導部門のアドバイスを受けながら、活動しました。T r u s sは、昨年3月に設立された神戸近郊の大学生の団体で、留学生の日本への生活適応をサポートし、日本人学生と留学生との交流を深める事を目的とし、ボランティア部門、イベント部門、研修部門等々から成り立っています。

震災後のT r u s sの具体的な活動としては、留学生センターに交代制で詰め、救援物資の分別・配布、情報収集・提供等をしていました。留学生センターで、私は数多くの留学生と出会いました。最初の頃、まだ水道やガスの通じていない地域が多く残されていた頃、やって来る留学生の顔には、緊張と不安が見られました。彼らが住んでいる所とセンターはかなり離れており、なおかつ、交通網は寸断されていた為、救援物資がセンターにあるという情報を彼らが得ていたとしても、センター迄やって来るのは大変な苦労の様でした。加えて、レポートや入学試験もあり、とても忙しそうでした。その為か、センターにきた留学生は、自分の分だけでなく友人の分も、と紙袋いっぱい救援物資を詰めて帰って行く姿が見られました。

日が経つにつれ、交通やライフラインが徐々に回復して来ると、留学生からは物資よりも住居、収入源である奨学金やアルバイトを探す切実な声が多く聞かれる様になりました。

この約二ヶ月間、センターでT r u s sメンバーが、留学生といろいろな話をした時に、一部の留学生が日本人なら当然知っている様な情報を知らず、驚かされる、という場面にたびたび出会いました。例えば、建物に貼られている赤・黄・緑の紙の事や義援金等の給付金についてなど。しかし、もし親しくしている日本人の友人がたくさん居たなら、そんな情報はもっと早く得られたのではないのでしょうか。非常事態の中、情報はとても重要です。その重要な情報をつなぐのは、人と人です。

非常事態の中、T r u s sメンバーの1人として留学生と接し、T r u s sの様な活動をもっともっと推しすすめなければならない、と強く感じました。非常時の助け合いは、もちろんとても大切な事です。が、それを支えるのは常日頃からの結び付きです。留学生が留学生だけで固まってしまう事なく、日本人学生が日本人学生だけで固まってしまう事なく、常日頃から、互いに同じく大学に通う学生として交流があれば、困った時の助け合いがもっとスムーズに出来たのではないのでしょうか。

この震災で、平素のあまり目立たない、けれども深刻な問題（老人、障害者、在日外国人等々に関わる問題）が、陽の当たる所へと出て来た様に思われます。それを震災後の一時的な事としてしまうのでは無く、私達の身近なところから出来る事をしていかなければ、そしてその身近な活動の一つとしてT r u s sの活動があるのではないか、と思います。

大学が始まり、新入生を迎えたキャンパスは、地震が無かったかの様な活気にあふれています。この震災の経験を生かし、日本人学生からも、留学生からも、手を互いに差しのべ、平素からの力強い結び付きを作っていく為に、T r u s sはこれからもがんばって活動していきたいと思います。

震災・友情・奮闘 -阪神大地震についての感想-

牟 宇（女）中国
神戸学院大学
（日本語訳：牟 宇）

1月17日人々は楽しく正月を過ごしていよいよ新しい年の生活に向かっていました。私は1年半ぶりで中国へ帰る日を楽しみに待っていました。そのドーンという大音響が全部の平和をすっかり破壊しました。この突然の大地震は人々には思いもよらない損失と補えない精神的な痛手をもたらしました。しかしその時、体験した人間の情と愛が一番感動することでしょう。人々が恐怖を乗り越えて努力している姿は人が自然に打ち勝つ証明でしょう。

神戸市西区に住んでいる私はわざわざ恐怖や避難体験を書くべきではないでしょう。でも私の生涯で忘れることができないことがいっぱいあります。揺れに揺れたあと、驚きあわててどうしてよいか分からない私たちはパジャマのままで外へ出ました。その時に寒風の中で泣いていた私たちの近隣のおじさんが毛布と食べ物を持って来て慰めてくれました。「大丈夫です。皆がいるから何があってもお互いに助かる」簡単なことばですけれども、家族と別れている留学生たちには精神的に支えるのは宝石よりもっともっと貴重です。同じ研究室の先輩、西山博士と奥さんは18日に私の寮に来ました。「PassportとTicket（原定1月24日中国へ帰る）だけ持って私たちと一緒に行きましょう。」と誘ってくれました。そして私は加古川にある西山夫婦の実家に一緒に行きました。その後5日間西山夫婦とそのお母さんは私が安全に中国へ帰れるようにいろいろと援助してくれました。その時、西山博士の博士論文は長田区にある印刷会社の火事で全部なくなりました。西山さんは自分の論文を整理し印刷することを考えていなかったのです。私のためにいろいろなところと連絡してくれました。最後に福岡から北京までのルートが一番確実ですから、そのルートが決まりました。私を親切に援助してくれるのは西山夫婦の責任ではないし、なんの目的もありません。彼のお母さんはずっと言っていました。「中国にいる家族は、あなたを持っていますよ。せっかく勉強のため日本に来るのに。是非安全に中国へ帰って欲しいです…」と。1月23日西山夫婦が、私を福岡ゆきの新幹線まで送ってくれました。その時、私は何にも言えなかった、心から友達の平安を祈っておりました。

一年ぶりに家族の皆と会えたし、中国の伝統の春節も来たけれども、私はそんなに嬉しくありませんでした。本当に神戸市の皆さんを気遣っていました。日本に帰ったらどの様な生活が私を待っているのかわかりません。しかし、私は日本で学ぶことがまだいっぱいあるし、私を気にかけてくれる友達がいるから、毅然と日本への飛行機に乗りました。

私が空港から出た時ちょうど夕日が海に映えて美しいところでした。快適なJRで窓から美しい海を見て心も気楽になってきました。JR線の住吉から灘までの間代替バスがあって皆はきちんと並んでいました。つぶれた家だけまだ私に地震の後の酷い光景を思い出させましたが、人々の顔から悲しみや悔しさはぜんぜん見られませんでした。私の勇気も増してきました。

ひさしぶりに研究室に来て先生、先輩たちと会って嬉しかったし、研究室はきちんと実験ができるように戻っていて安心しました。一方、皆さんの痩せた姿を見て私は申し訳ない気持ちになりました。水、電気、ガスがなかった状態で皆さんは種々困難を乗り越えて頑張りましたから今の良い環境ができました。私はとても感動してこれからもっと頑張りたいと思いました。

日本に来てから一年半経ちました。私は美しい神戸がとても好きなので、いつか時間があったら三宮、神戸のハーバーランド、ポートアイランドに遊びに行って写真を撮ろうと思っていました。けれどもこのたびの地震で実現できないことになりました。すごく残念でした。つぶれた建物でも撮りたい気がしてカメラを持って街に行きました。美しい光景はないけれども私はほかの光景に感動しました。人々は悲しみ、悔しさを乗り越え、本格復興、再生への自立の決意を示す「がんばれ！」と書かれたのぼりがはためき「ファイト」と名付けた店が開店しています。大地に確かな春の息吹を感じました。

留学生として日本に来て知識と日本文化を身につけるために頑張っております。大地震に遭ってまだまだ生きているのはよかったです。大変だったけれどもいろいろな体験をしました。特に日本人の頑張る姿を目のあたりにしました。これが資源が少なく、国土が狭い日本が戦後こんなに早く豊かになった原因であると深く納得しました。この度の地震から得たいろいろな体験と日本人から学んだ奮闘努力の精神が私には人生の財産だと思います。1995年1月17日は一生忘れず、廃墟の中で立ち上がり新しい生活に向けて頑張っている人々の姿も一生忘れないです。早くきれいな神戸ができることを祈っております。

私が地震で奪われたもの

呉 美英（女） 韓国
神戸大学
（日本語訳：呉 美英）

何かの激しい揺れに驚いて目が覚めた。部屋の中はまだ真っ暗で何も見えなかった。わけもわからなく、私は再び寝ようとした。その時だった。どんっと大きい爆弾のような音と同時に、家が激しく揺れた。すぐおさまらなうと思った。しかし、私の期待はずれてしまった。天井の破片と土壁が勢いよく崩れ落ちてきて、私はつい恐怖におののいてしまった。もう片方の壁面は崩れてしまったし、部屋の床面は大きく傾いていて、気がつくとは私は床と壁の間のすき間に、ふとんと一緒に吸いつけられているところだった。あ、死ぬということはこんなものなのかなということが頭の中をかすめていった。

家族の顔が浮かんできた。亡くなったおじいさんの顔も。家はちょっと前と変わらず、揺れていて止まろうとしなかった。私は激しい恐怖感におののき、つい、助けて下さいと叫んだ。私の叫んだ声が天に伝わったのか、その瞬間、そんなに激しかった揺れはやっとおさまった。はっきり見えなかったけれども、部屋の中はめちゃくちゃだった。部屋の中をあちこちうろろしている間に何かが足を刺し、痛みが伝わってきた。強烈な恐怖感によって、ほかのことを考える余裕はなかった。早く出ようという考えだけで、私はトイレから顔を出して「助けて！助けて！」と繰り返し大声で叫んでいた。隣の家からも助けを求める声が聞こえた。何かによって下敷きになっているようだった。ちょっと離れたところの通り道からも人の声が聞こえてきた。それでも、脱出した人もいるとわかり、少しは安心感が生まれた。

以前よりもガスの臭いがひどくなってきた。でも、どうしても私の力ではその部屋から出ることはできなかった。なぜかという、私のアパートは女性専用だったので、窓には全て鉄柵がついていたからであった。涙が出そうだった。トイレですっと救助を待っている間にも数回の余震がきた。トイレの窓から見える隣の家の壁が前よりもさらに近づいたように感じられた。隣の家がこちらの方に倒れたらどうしよう。みんな何をしているのかな。本当に絶望的な状況であった。その時だった。暗いすき間から二人の男性の影が見えた。その人たちは私に、安心して待つようにと言った。私はその時になってからやっと落ち着いて、静かに救助を待ち始めた。二人の男性はトイレの鉄柵をはずすために力を入れひっぱたが無駄だった。それを少しもはずすことはできなかった。今度は台所の鉄柵を取ろうとした。家が全体的に崩れたせいか台所の方は少し感触があった。私はぎりぎりのすき間の中を体を横にして脱出に成功した。「足下に気をつけて下さい」と言われたので、出る前にトイレにあったスリッパを履いてから二人の男性の後についてそこを出た。

外に出てみると、隣に住んでいたお姉さんと正面のへやに住んでいた人が先に出てきていた。本当に怖かったといいながら、私たちは抱き合った。寒さと怖さで体が震えていたが、いつの間にか太陽が昇って明るくなった。私達はその時になってからやっとまわりを見る余裕ができた。JR六甲道を通っていた線路の高架橋が全部倒れ、電信柱も傾きあちこちで火災によって火が噴き、燃え上がった。

私達が住んでいたアパートは完全に崩壊し、二階建てのアパートは一階になっていた。私は二階の一室に住んでいたが、そんな私が窓から歩いて通りまで出たのであった。以前まではまったく考えられなかったことであった。時間がたって余震が少なくなってから、今まで各々の家の中にじっとしていた人達が少しずつ歩いて出てきた。その時の人々の表情は戦争の時に避難する人のようであった。しかしながら、更に時間がたつと前とはちょっと違って人々は忙しく動き出した。家の中で下敷きになった人達の救助作業や火災による退避、会社や家族、または親戚に電話をしようとする人によって道は混んでいた。私達はそのような人々の動きをぼんやりと眺めていた。

何かべたべたする感じが足の方から伝わった。それは血だった。土で汚れていた足の裏から血が出てきてべとつくのであった。隣の部屋に住んでいたお姉さんも二階から飛び降りる時手と足をけがして、私たちが立っている道路は血だらけであった。私たちは前の家に住んでいたおじいさんに頼んでバスタオルを一つもらった。お姉さんと私はそれを切り包帯として巻き、残りは体にかけた。そして、住んでいたアパートの近所を歩いてみた。大家さんの家も倒れていた。アパートの一階の部屋はすべてつぶれ、窓からは人の足だけ見え、呼びかけても答えは返ってこなかった。すでに死亡していた。私が見た最初の遺体であった。その時から私は動揺し始めた。

私の友達が私の部屋の下に住んでいた。崩れたアパートを外からぐると見てみたが、友達の部屋は少しのすき間もなくつぶれていた。近所の人に助けを求めたが、まず、助けを求めている、すなわち、生きているという反応のある人を先に救助するという返答しか返ってこなかった。できるだけ早く友達を助けないとという思いが痛切だったが、場合が場合だったので、それ以上は言えなかった。しかし、友達がそんな状況であるにもかかわらず、何もできない私自身が恨めしかった。その友達は、私が日本

語学校に通っていた時からの友達で、三年前に出会った。私たちは日本語学校の寮に住んでいた時から親しかった。私たちは、同じ名字で同じ大学に入学したことで、ますます友情を深めてきたのである。時には学校へ一緒に行き、時には買い物を一緒にした。料理を作れば分け合って食べ、CDやテープも交換しながら聞いた。悩みがあれば互いに相談し合ったのに・・・なのに・・・

私たちと一緒にいた私の向かいの部屋に住んでいた人の友達が息を切らせて駆けつけてきた。家が近くにあるそうだ。公衆電話がつながるところが何か所かあるが十円硬貨しか使えないからといって何枚か渡してくれた。その後、向かいの部屋の人をつれてどこかにいってしまった。隣の部屋のお姉さんと私はお金を半分ずつ分けた。十円硬貨四枚、これでどこに電話をかけたらいいだろうと思いながら、公衆電話があるところについてみんなと一緒に並んだ。二時間ぐらい待ち、やっと順番が回ってきた。私はまず京都の伯母の家にダイヤルを回した。しかし誰も出て来なかった。そのため、次に京都に住んでいる友達に電話をかけた。「家は壊れたが無事だから、そのことを伯母に伝えて。」その言葉が終わると同時に電話が切れた。

足から次第に体が冷えてきた。寝巻きで出てしまったので、一月の冷え込みは私にとってはちょっとこたえた。朝、近所の人にもらったタオルをかけたまま、ずっと靴下もはかずにスリッパだけ履いて歩き回っていたのだった。アパートに戻ると下敷きになって亡くなった人達の遺体を出すために、みんな声をかけ合っていた。大家さんのおじいさんとおばあさんは救助されてどこかへいってしまった。隣の家のおばさんの子供の遺体が発見された。私たちがそれを見ない方がいいと思ったからか、おばさんは早く灘小学校に避難するようにいった。私たちは一転して灘小学校に向かった。しかし、じっと座っていると寒くてどうしようもなかった。お姉さんが足に激しい痛みを感じ始めた。その時、どこからか見知らぬおばさんが救急箱を持ってきた。怪我がひどいので早く病院に行った方がいいといったが、病院はすでに死体ともしっかりとひどく怪我をした人でいっぱいだった。そのため、軽く消毒してもらうことにした。けがは思ったよりもひどかった。足首の肉が骨が見えるほど切れていた。すぐには歩きにくかったので、足の痛みが少し良くなるまで灘小学校にいた。けれども友達のことや家のことが心配で、またアパートの方に行った。隣のおばさんのことが気になって途中でアパートに行くのはやめて、通りのところから見守ることにした。その時、サークルの先輩が通るのが見えた。嬉しくて、走って行って挨拶をした後、いろいろと聞いてみた。先輩の家は大きな被害はなさそうだった。家がうちからすぐ近くにあるというので、私は先輩に服を一枚借りることにした。先輩と別れてから、また、灘小学校に行き、そこで一泊した。避難所で寝た時私は夢を見た。私の住んでいたアパートの一階にいた友達が私を見てずっと泣いていた夢を。

長い夜が過ぎ朝が来た。何回かの余震が来て怖かったが、明るくなったので少し落ち着くようになった。区役所から毛布と食糧を配給すると聞いたので学校で一緒に泊まった人達と区役所に行ってみた。毛布は余るぐらいもらったが食べ物は全然足りなかった。八人が食べる食料がみかん八個しかなかったのである。寒くて食べられなかったので、自分のことがわびしく思われた。配給をもらった後、再び避難所に戻ってきたら前日より人が倍以上に増えていた。私たちは場所を確保し、お年寄りにもタンボールを下に敷いて、通路のコンクリートからの寒気が上がらないようにしてあげた。ゴミや割れていた瓶も片付けた。ひびが入った窓ガラスには落ちないようにテープを張った。やっと終わったと思ったら、時計はもう昼の十二時を回っていた。地震が起きる前日に遅くまで本を読み、疲れてそのまま眠ってしまったので時計をはめたままだった。避難所の中で時計をはめていたのは私だけだった。時計をはめていたのでいろいろと助かった。

それから何もせず、避難所の中にじっとしていいたら退屈してきたので、アパートにいてみることにした。京都の友達に伯母への連絡を頼んであったので、電話をしようと思ったけれども、百円硬貨ではかけられなかった。電話はかけずに、アパートにいてみたら、たくさんの人がうろうろとしているのが見えた。また誰かの遺体を出すのかなと思って近くにいてみたら、同じ学校の韓国人の先輩だった。嬉しかった。先輩たちはアパートを見て私が死んだのかと思って部屋に入ってみたら私がいなかったの。で病院に捜しに行き、次に、アパートからパスポートと飛行機の切符を取り出しておいてくれた。なぜ連絡しなかったのか、と怒られたが、当時はお金も全然なかったし、この近くは被災がひどくて他の所も同じだと思ってアパートの人と一緒にいた方が安全だと思ったからだといったら、先輩たちは何も言わなかった。その後、私は避難所から離れて北区にある先輩の家に避難した。

翌日、私は学校に行き、自分の無事を知らせ、それから、経営学部について、友達だった呉さんの死を知らせた。そして呉さんの保証人や中国の両親に連絡することを頼んだ。早くしないと呉さんの遺体を出すことができないことも言った。この時になってから、私は友達の死を心から感じた。しばらく涙が止まらなかった。先輩の車に乗って、もう一度アパートがある所に行ってみた。アパートに住んでいた人の荷物をまとめて来たその人の御両親と少しばかり話をして、まだ友達の遺体がアパートに残っていることを言った。しかし、友達の部屋は完全につぶれ、普通の人では無理なので、救助専門の人に頼まないとだめだし、頼む時も保証人か、両親が頼まないと来てくれないということを聞いて、その日は私はあきらめて帰るしかなかった。

北区の先輩の家に戻ってくると次の日にメリケンパークから関空に行く船があるので、避難に来ていた韓国人留学生はほとんどが韓国に帰ると言った。私は友達の遺体を出してから帰りたかったので、一日だけ延期してもらいたいといったが、食料もないし、後で一人で行くのはとても無理だといわれたので、それ以上はわがまを言えず、残る先輩に呉さんのことを頼んでみんなと一緒に帰ることにした。その日も呉さんは私の夢に出て助けを求めるように、私に向かってずっと悲しく泣いていた。地震が起こってから三日目だった。

二十日、私は余りよくねむれなくて、朝四時にはもう起きて韓国に帰る用意をした。やっとメリケンパークまで出て来て、私たちは関空に行く船に乗った。神戸港を後にしながら離れる時のその心情は何とも言えなかった。その時は二度と戻れないような感じがした。

韓国に帰って友達の遺体が無事に出されたことを聞いてやっと安心した私は、十日ぐらいゆっくり安息を取った。二月二日、私は学校現況を知るためと、大学のレポートのためにまた日本に戻って来た。レポートを無事に終えた私は、三月十七日に行われた慰霊祭に参加した。三十九名の学生の写真と二名の教職員の写真が壇上に置いてあった。慰霊祭が終わった後、私は中国から来た呉さんのお母さんと挨拶をした。涙がずっと出て、言葉がうまく出なかった。その後、私は、日本語学校の時呉さんの担任だった新内先生を呉さんと私が住んでいたアパートのところまで案内し、いろいろ話をした。先生は私に“悲しむのは今日までですよ。今日で呉さんとは別れをして呉さんの分までかんばってくださいね。”と言った。私は無言でうなずいた。

何日か前に亡くなった友達が夢に出た。本当に久しぶりに見る顔であった。亡くなった友達の顔であったが、まだ生きているように親しみが感じられた。その表情から、目が覚めた後、私は友達が天に昇ることができたのだと思った。

今度の地震は、私たちにたくさんのことを考えるチャンスを与えてくれた。我々人間は文明に慣れ過ぎていて、自然の大切さが良くわかっているにもかかわらず、自分たちが便利で快適な生活を送るために自然を破壊する。私は人間というものをどう説明してよいかわからないが、しかしながら、我々神戸の人の生活は目に見えないかもしれないが、少しずつ変わってきた。困難な生活の中でもお互いに助け合い、困難な状況を克服するためにみんなが心をひとつにして頑張ってきているのである。地震は最低でもこれだけの大きなものを我々に与えてくれたのだと私は思う。それは尊い命という大きな代償があったのだが。今でも余震が来たら、私はあの怖かった記憶がよみがえるが、これほど大きな経験は将来の私に様々な形で役立つと信じて、厳しい状況に直面しても頑張ろうと思っている。

それでは最後にもう一度友達を含め皆さんの冥福を祈りながら、この文章を締めくくりたいと思う。

力　　オ　　ス

大田 義治（男）日本
関西学院大学国際交流課長

私は地震の日には、神戸市東灘区田中町にあるマンションの6階に住んでいました。JR摂津本山の駅前のマンションですが、この度の地震で全壊しました。攪拌器の中に投げ込まれたような揺れを体験した後、夜明けをむかえ、ベランダから周囲の風景を見たとき本当に驚きました。ほとんどのビルは傾き、木造の家は崩壊し、空は埃でどんよりくもり、約7カ所から大変大きな煙の柱が立ち昇っていました。周囲は不気味なほどの静けさで、警察も来なければ、消防も来ない、ただ人々が呼びかけ合う叫び声だけが、奇妙にこだましているという状況でした。妻がまず外へ出ようとしてしまいましたが、1Fが崩壊して、外に出られないと言って部屋へ戻ってきました。それなら非常口で、というわけで、今度は私が階下へ降りました。しかし、非常口には、一種のアクセサリーでしょうか、鉄の格子がはめてあって、下まで降りるとカゴの鳥のようになっていました。階下に降りるほどガスの臭いが充満し、爆発の危険性もあるように思いました。近隣に声をかけるとほとんどの家はドアが開かず、結局ベランダの板囲いを打ち破って通路を確保しました。着の身着のまま一家は表へ飛び出し（以後4日間ほど私はパジャマを着たままだ出勤したことになる）、JR摂津本山駅前のロータリーで少し近所の方々と意見を交わし、本山第一小学校の体育館へ両親と共に避難しました。この度の地震のように大規模災害になると、警察、消防、役所の職員といった、本来状況に真っ先に対処しなければならない人が、自らも被災してしまい、交通の寸断も加わって初動が出来ないという事態になります。私の場合もまさにそれでした。同僚が近所に住んでおり、家も無事でしたので大学の様子を自家用車で見に行ってもらいましたが、交通停滞が激しく大学にはとてもたどりつけない、ということで帰ってきました。私の車はマンションの1Fに駐車していましたので全壊で（今日に至るも車の姿は見えていない）使いものにならない、さてどうするかということで、いつも出勤に使っているミニバイクをJR西宮駅前のパーキングに歩いてとりにいくことにした。西宮駅への国道2号線沿いは、まさに瓦礫街道で、神戸で生まれ、神戸で育った私としては見るに忍びない光景の連続で、思わず涙が流れました。途中2カ所でJRの電車も脱線していましたが見物するものは誰もいない。通常であればそれだけでもマスコミで大きく取り上げられる事件となるが、それだけにかえて全体状況の異常さを印象づけられました。

バイクで尼崎市立花町にある妻の実家に立ち寄り、全員の無事を報告し、大学へ行きました。妻の実家では私達の安否問い合わせのための放送局へ送付する原稿作成の真っ最中でした。連絡がとれなかったため相当心配していたようです。

関西学院へ到着したのは午後7時頃でしたが、建物は見た目にはしっかり建っていたので本当にほっとしました。私の部署へ入ろうとしましたが大型ロッカーやカウンター類ははすべて倒れ、ファイル類はまき散らされ、コンピューターも床へ放り出されているというありさまで、事務室にはほとんど入れない状況でした。昼間には担当者（宝塚市在住）が1名出勤していたことを、出会った他部署の課長から聞き（その課長も家が全壊したので、とにかくその日は自分の事務所に家族を避難させているとのこと）、大変安心しました。とにかく少しでも事務所への入り口を確保しないといけないので、当面不要と思われる書類を片っ端から廊下へ放り出し、1日目の作業は終了し、次に外国から来ている客員教授や客員研究員の住宅を見て回りました。本学では比較的外国人教員のコミュニティーが発達しているので、主だった人の家に訪問し、大体の安否を確認しました。当面の避難の方法や、水の状態の質問を受けましたが、私自身このような事態について全く準備がなく、とにかく危ないと思ったら近所の小学校へ避難してほしいと伝えました。全くお恥ずかしい限りです。

留学生についてはほとんど安否確認の方法もなく、「死ぬなよ、死んだらあかんぞ、・・・、君ら若いんやから絶対大丈夫のはずや。」などと心で祈り、また自らを慰めながら東灘区の避難所へ戻りました。芦屋川を越えて西へ来ると街は本当に真っ暗で、さすがに不安になり、「彼らに万が一のことがあれば一体どうすればいいのか。」などと自問自答を繰り返すのみで、そのときは、何の方法もアイデアも思い浮かびませんでした。

地震2日目から本格的に事務室の片づけ作業に入りましたが、私を含めて職員は7名ですが、実働できたのは3人ほどでした。電話は外からはかかってくるが、事務室からはつながらないということで、まったく仕事にならない状況でした。学院全体の動きとしては理事長を中心に、とにかく出勤の出来た教職員を会議室に集め情報交換を行いました。

以降3日目、4日目と、今日に至るまで地震後対策、留学生の安否確認、事務室の復旧、入試、4月の新学期に向けての日常業務等に追われるわけですが、留学生の被災状況の問い合わせには閉口しました。外部の方の、情報が必要という事情は分かるのですが、とにかく学生の状況は帰国者も含め

て混沌とした状態で、正確な数字も分かるはずがない。それでも「分かる範囲でよいから知らせよ」と迫られる。職場も人も被災するという状況の下では、被災状況を知らせよということは、交通事故に例えれば、被害にあって倒れている人に出血量が何CCか、骨の折れ方は単純骨折か複雑骨折か、自己申告せよ、その程度によっては助けてやる、と強要するようなものではないか。留学生のファイル等もどこかへ吹っ飛んでしまって見つからない状況、コンピュータのスイッチを入れても簡単に立ち上がらない状況というのは、テレビだけを見ているだけの人々にはなかなか実感としては分かってももらえないようである。最後には「そんなに知りたければ、自分で勝手に数えに來い。」といった開き直った気分さえなる。私の部署では当初は基本的には被災状況の問い合わせは断わったり（現実的には答えられなかった）、「多くの学生の家屋が倒壊した模様」などと抽象的な回答にとどめました。笑い話かどうか分かりませんが、火災が激しくて神戸の消防だけでは間に合わない。やっと通じた（東京への？）電話で消防車の応援を頼んだ。返事は「何台いるか回答せよ」とのこと。そこで一生懸命台数を計算しているうちにまた火災が大きくなってしまったという話を聞きました。うそか本当か分かりませんが、ありそうな話です。大規模被災に対する支援のあり方には、被災状況の問い合わせや確認も含めて研究課題が残ります。

今後のこのような地震対策として私に何が提案できるかとなると、今でも智慧があまり浮かんでこないというのが実状です。この度の地震は、早朝で、まだほとんどの人が出勤していない時間帯に発生し、季節は冬、ということになります。大学のスケジュールを考えた場合、授業中や試験中に直撃されたらどうなるか、夏休み中に起こればどうなるかなど、想定される状況で対応は全く変わってくるのが考えられます。

特に留学生や客員教授の場合には、この度の安否の確認でも苦労しましたが、うまくコミュニティーを育てておかないと、ともすれば孤立してしまい、行き先さえわからなくなるといった事態も予想されます。この度本学の場合は留学生については結果的には死者はなかったわけですが、例えば救助体制としても大学としてどのようなことが出来るのか、出来ないのか、ということを経済的支援に事前話しておくようなことが、何らかの形で必要だと考えられます。次に経済的支援の問題です。特に住居の問題は決定的です。彼らに対して、どのようにして安心感を与えられるか重要課題であると思います。PTSD（心的外傷後ストレス症候群）の重要性が指摘されていますが、肝心の経済的支援の問題を抜きにしてPTSDを議論してもあまり意味がないのではないかと考えます。被災者に対する学費の減免措置や、特別援助金措置等は、タイムリーに実施されないと大学に対する帰属意識の喪失や、日本に対する根本的な不信感になってしまうのではないかと考えます。この度は、日本国際教育協会が、従来の文教行政では考えられないぐらいタイムリーに「留学生緊急援助金」を被災留学生に交付してくれました。担当課長としては、留学生の救済方法について全く手探り状況の時だったし、手続き的にも簡単な方法で行って頂いたので、本当にうれしく思いました。この度のこの措置は、文部行政の中で、きちんと歴史にとどめるべき重要で意味のある施策だったと思います。

この度のような大規模被災において、特に地震直後のイニシャル・アワーは、行政、警察、消防といった既存の防災組織はほとんど用をなさないことがわかりましたが、その時期にあつていかに留学生を守っていくかは重要な問題です。日本人学生についても共通の問題ですが、日本人と異なるのは、彼らが地域コミュニティーの中で孤立している状況があることです。地域社会の中で孤立をいかに防いでいくかは重要な課題です。都市生活の中で、いかによい近隣関係を構築していくか、いままで危機管理の視点からあまりかえりみられなかった問題ですが、この度の震災で地域住民の救助に大変活躍した留学生の話も聞き意を強くする一方、今後の大規模災害に向けての地域交流の新たな課題を突きつけられているように思います。

最後に、被災地の大学では、新聞やテレビといった情報から遮断された状況が発生します。（特に私のように自分自身が被災してしまった場合は、ニュース類を保管し整理する手段や方法が奪われてしまう。）この度はJAFSA（留学生問題研究会）のメンバー、近隣自治体、留学生支援企業協力推進協会などから多くのファックス情報を送って頂きましたが、それらが生きた情報となって本当に助けられたこととお知らせしておきます。

焼 か れ た 夢

ブラシャント・パルデシ（男）インド
神戸大学
（日本語訳：桐生和幸）

1994年2月2日、私は、インドの文部省から、私が神戸大学で研究をおこなうための文部省奨学金の支給が決まったと一通の手紙を受け取りました。日本は以前にも来たことがあり、初めて来てから何度も訪れている国です。

「神戸」は、日本語では、2つの漢字、「神」と「戸」という文字からなっていますが、実際、その名の示すとおり、神戸を「天国への扉」と呼んでも、決して誇張ではないでしょう。神戸市の特徴は、高度な国際都市であり、そこには、様々な国の人々が調和して住んでいます。それゆえに、私は、このとても美しい町にある神戸大学で勉強する機会に恵まれて、大変幸せでした。

神戸では、新しくいろいろな国の人と知り合うことができました。楽しいパーティーや交流活動など、瞬く間に10ヶ月が過ぎていき、いつの間にか博士課程への入学試験の準備をするときがやってきました。入学願書の締め切りが1995年の1月18日でしたので、その前までに提出論文を仕上げてしまう必要がありました。1月16日、論文が仕上がり、床に就きました。この日からの数日間の予定について考えていたので、すぐには眠ることができませんでした。まだ論文の不必要な部分を修正しなくてはならなかったので、朝6時にアラームをセットしました。1995年1月17日、午前5時46分、ベッドが急に揺れだして、私は目が覚めました。床の上へ飛び出し、あたりを見回しました。壁がまるで振り子のように揺れていました。本は本棚から落ち、テレビとビデオも床の上に倒れて落ちてしまいました。私の部屋はまるで何千頭ものゾウに踏みつけられているかのように揺れていました。しばらくの間、この四階建の建物が崩れて私は死ぬのではないかと思われました。どうしたらいいのか分かりませんでした。何せ、これは私にとって初めての地震だったからです。2階から何人かの女の子が叫んでいるのが聞こえてきて、その声で、我にかえりました。だれもが台所へと駆け込んでいきました。台所は平屋作りだったので、最も安全に思われたのです。私もそうすることにして、立ち上がりました。寮生がみな無事だったのを見ると、驚きと共に安堵感に包まれました。あの40秒の大変短い間に何が起こったのかすべてを理解するのは困難なことでした。

私達は、テレビのスイッチを入れて、ニュースを見ました。私の周りにいるみな顔に、助かったんだという安堵感があふれていました。私はすぐに両親のもとへ電話をかけ、自分は大丈夫だったことを伝えました。その後で、神戸にいる友人の安否を確かめようと連絡しようとしたのですが、通じませんでした。私達は、テレビのニュースに一日中釘付けになりました。生中継で映しだされた惨状を見ると、憂鬱な気分になりました。何度も何度も、人生とは不確かなもので、神を除いては、人生の終わりがいつ来るかを知ることはないとインドの有名な哲学者が言っているのが思い出されました。「天国への扉」である神戸の住民は、自らの目の前で自分達の夢が火葬用の薪の上で焼かれているのを見続けなくてはならなかったのです。



名前 さん

神戸で過ごした最初の日々

秦 慶紅（女）中国
神戸大学
（日本語訳：● 貴生）

飛行機のウィンドーから、海の中に点在しているきれいな島が幾つか見える。それは日本列島で、現代技術と文明のシンボルと若い人々の憧れである。二年間近くも待って、やっと厳しい審査に合格し、主人と私は1995年1月13日に飛行機に乗って日本に来了。日本の家は小さいが、私たち自分のもので新しい出発地である。

私は街を歩くのが好きで、到着の二日目に主人に神戸の繁華街三宮へ連れて行ってもらった。三日目（16日）、日本の友人は私を神戸の高級レストランに招待してくれて、典型的な日本料理を紹介した。その日、須磨の水族館にも行って楽しんだ。

四日目の17日未明、百年間なかった大地震がここで起きた。一瞬、大地が怒ったように全てが強烈に揺れて、何千人も亡くなった。私の小さな家は倒れていなかったが、もう住めなくなった。余震が絶えず来るし、いつ倒れるかわからないので、避難所へ行って3か月間の避難生活を始めた。火災に遭った美しい港街、神戸は水も電気もなかったため、消防隊が来て何もできない。人々は自分の家屋と財産が燃えるのを見て苦しんでいた。私の避難生活の第一夜は神戸大学の食堂で過ごした。山の上に建てられた神戸大学は基本的に影響をあまり受けず電気と水が使えた。寝る場所はないので、食卓で寝ていた。本来ならば私が勉強しに来る所なのに、避難所になってしまった。初めて日本に来了私にとって、“面白い歓迎式”とも言えるだろう。しかし、恐怖や、心配で今後の生活の不安感は強かった。

日本の友人は危険ながら私を見舞いに来て、食べ物も持ってきてくれた。大したものではないが、当時は非常に大事な生活必需品であった。避難者がどんどん多くなってきたため、私たちは体育館に集合させられた。ここに、日本人の友人高岡さん一家も一緒に避難していた。避難生活はかなり厳しかった。体育館の床に毛布を敷いて、百人近くが服を脱がずに寝ていた。熱い食べ物がなく、毎日弁当、パンと牛乳ばかりであった。いつ状況がよくなるか、新しい家がどこにあるか見当もつかないので、退屈でたまらない。

周りの日本人は段々私たちが中国人であることをわかってきた。私は日本に来了ばかりで、日本語が殆どわからなかった。毎日の主なことは日本語を覚えることである。高岡さんの奥さんは主人に中国語を習ったことがあって、非常に熱心に私の日本語の先生になってくれた。避難環境に関係しているかもしれないが、最初に覚えた単語は殆ど食べ物に関係していた。その後、私たちは神戸大学留学生センターの紹介で神戸学生青年センターへ移動した。環境は遥かに改善されたと言える。水も電気も使えるし、ご飯も自分で作れるし、お風呂まで入れた。住むところも二人用の部屋になった。何人かの韓国人留学生と中国人留学生が既に入っていて、センターが提供してくれた便利な情報を紹介してくれた。NTTはそこに無料国際電話を設置したので、故郷の人の声を聞いて大変落ち着いて来た。また、同じ所に避難している友人の紹介で近くのガソリンスタンドで一つ目のアルバイトを見つけた。疲れるが、充実感がある。日本語の勉強になるし、家の収入も補足できたので嬉しい。日本の物価が高いので、家にいて何もしなければとても生活できない。

いいニュースが次々と入ってきた。まず、私たちの新しい家が見つかった。甲南漬の社員寮で留学生に提供した部屋である。安くて交通の便もいい。その次、私は4月から神戸大学で勉強することになった。今度は留学生として神戸大学に勉強しにくることを考えても興奮した。私はいままでずっと本と接してきた。中国で24才まで勉強していた。卒業後の仕事は物理関係で、本を読みながらやっていた。しかし、物理に向いていなかったのか、うまくいかなかった。転職してロシア語の翻訳をやりはじめ、やはり毎日、本と辞書を持っている。

30才になった今、外国である日本の大学で小学生のように五十音図から勉強しはじめた。主人は地震関係の研究をしているため、今回の大地震の後、先生と一緒に地震調査と研究を行い、成果を「神戸新聞」に載せてもらった。この2か月間、彼らが毎日、一生懸命研究していたことの実証になるかもしれない。

神戸は、まだ傷だらけであるが、桜はもう咲き始めた。被災した神戸市を飾り、大地震体験者の心を温めるだろう。美しい春は神戸を忘れないし、私たちも力を入れて神戸の復興に貢献したい。私は桜、満開の季節に自信と希望をもって頑張っていくことを決心した。

神戸で過ごした最初の日々

秦 慶紅（女）中国
神戸大学
（日本語訳：● 貴生）

飛行機のウィンドーから、海の中に点在しているきれいな島が幾つか見える。それは日本列島で、現代技術と文明のシンボルと若い人々の憧れである。二年間近くも待って、やっと厳しい審査に合格し、主人と私は1995年1月13日に飛行機に乗って日本に来了。日本の家は小さいが、私たち自分のもので新しい出発地である。

私は街を歩くのが好きで、到着の二日目に主人に神戸の繁華街三宮へ連れて行ってもらった。三日目（16日）、日本の友人は私を神戸の高級レストランに招待してくれて、典型的な日本料理を紹介した。その日、須磨の水族館にも行って楽しんだ。

四日目の17日未明、百年間なかった大地震がここで起きた。一瞬、大地が怒ったように全てが強烈に揺れて、何千人も亡くなった。私の小さな家は倒れていなかったが、もう住めなくなった。余震が絶えず来るし、いつ倒れるかわからないので、避難所へ行って3か月間の避難生活を始めた。火災に遭った美しい港街、神戸は水も電気もなかったため、消防隊が来て何もできない。人々は自分の家屋と財産が燃えるのを見て苦しんでいた。私の避難生活の第一夜は神戸大学の食堂で過ごした。山の上に建てられた神戸大学は基本的に影響をあまり受けず電気と水が使えた。寝る場所はないので、食卓で寝ていた。本来ならば私が勉強しに来る所なのに、避難所になってしまった。初めて日本に来了私にとって、“面白い歓迎式”とも言えるだろう。しかし、恐怖や、心配で今後の生活の不安感は強かった。

日本の友人は危険ながら私を見舞いに来て、食べ物も持ってきてくれた。大したものではないが、当時は非常に大事な生活必需品であった。避難者がどんどん多くなってきたため、私たちは体育館に集合させられた。ここに、日本人の友人高岡さん一家も一緒に避難していた。避難生活はかなり厳しかった。体育館の床に毛布を敷いて、百人近くが服を脱がずに寝ていた。熱い食べ物がなく、毎日弁当、パンと牛乳ばかりであった。いつ状況がよくなるか、新しい家がどこにあるか見当もつかないので、退屈でたまらない。

周りの日本人は段々私たちが中国人であることをわかってきた。私は日本に来了ばかりで、日本語が殆どわからなかった。毎日の主なことは日本語を覚えることである。高岡さんの奥さんは主人に中国語を習ったことがあって、非常に熱心に私の日本語の先生になってくれた。避難環境に関係しているかもしれないが、最初に覚えた単語は殆ど食べ物に関係していた。その後、私たちは神戸大学留学生センターの紹介で神戸学生青年センターへ移動した。環境は遥かに改善されたと言える。水も電気も使えるし、ご飯も自分で作れるし、お風呂まで入れた。住むところも二人用の部屋になった。何人かの韓国人留学生と中国人留学生が既に入っていて、センターが提供してくれた便利な情報を紹介してくれた。NTTはそこに無料国際電話を設置したので、故郷の人の声を聞いて大変落ち着いて来た。また、同じ所に避難している友人の紹介で近くのガソリンスタンドで一つ目のアルバイトを見つけた。疲れるが、充実感がある。日本語の勉強になるし、家の収入も補足できたので嬉しい。日本の物価が高いので、家にいて何もしなければとても生活できない。

いいニュースが次々と入ってきた。まず、私たちの新しい家が見つかった。甲南漬の社員寮で留学生に提供した部屋である。安くて交通の便もいい。その次、私は4月から神戸大学で勉強することになった。今度は留学生として神戸大学に勉強しにくることを考えても興奮した。私はいままでずっと本と接してきた。中国で24才まで勉強していた。卒業後の仕事は物理関係で、本を読みながらやっていた。しかし、物理に向いていなかったのか、うまくいかなかった。転職してロシア語の翻訳をやりはじめ、やはり毎日、本と辞書を持っている。

30才になった今、外国である日本の大学で小学生のように五十音図から勉強しはじめた。主人は地震関係の研究をしているため、今回の大地震の後、先生と一緒に地震調査と研究を行い、成果を「神戸新聞」に載せてもらった。この2か月間、彼らが毎日、一生懸命研究していたことの実証になるかもしれない。

神戸は、まだ傷だらけであるが、桜はもう咲き始めた。被災した神戸市を飾り、大地震体験者の心を温めるだろう。美しい春は神戸を忘れないし、私たちも力を入れて神戸の復興に貢献したい。私は桜、満開の季節に自信と希望をもって頑張っていくことを決心した。

阪神大震災体験報告

大地震発生、そのとき私は

史 楽平（男）中国
神戸大学
（日本語訳：史 楽平）

突然床に放り出される

十九年前、私は中国で唐山大地震を経験した。そして十九前後に、神戸で大地震に遭おうとは思ってもいなかった。早朝、私は静かな眠りについていた。すると、突然大きな力で放り出されてしまった。私はとっさにもがいて起き上がろうとしたが、この強大な力に対抗できるわけがなかった。地震だ！今日が私の命日になるかもしれない、と思った。

厚い羽毛布団をかぶって部屋を出、真っ暗闇の中、階段を下りていった。五階、四階、三階……、ついに一階の廊下にたどり着いたが、倒れた自動販売機がまるで鉄の棺桶のように横たわり、私の逃げ道を塞いでいた。それを越えて、やっとその場－さくら銀行神戸社員寮－を飛び出した。

しばらくすると、建物の中からたくさんの人が出てきて、女性の泣き声が聞こえてきた。泣いているのは、賄いの藤原さんだった。彼女は重傷を負っていた。賄いの人たちは、寮に住んでいる人たちの朝食を作るために、毎日五時に出勤してくる。突然の地震で厨房内のスチール戸棚が彼女たちの上に倒れて、頭を傷つけ、また割れたガラスが彼女たちの腕に刺さった。真っ暗闇の中で彼女たちは手探りをし、互いに呼び合った。地震の少ない「安全地帯」と言われる神戸で、突然こんな大地震が起きるとは誰も考えていなかったのだから、本当に驚いていた。私は藤原さんに掛け布団をかぶせて、皆と一緒に甲南小学校の体育館へ避難した。

私たちの寮の住人はほとんど二十代の独身者で、それぞれ日本の有名大学を卒業し、厳しい試験に合格してさくら銀行に入行した人たちばかりだ。国際交流を進めるために、私のような外国人留学生もこの寮に入れてもらっている。私は皆に、どうして地震発生後かなりたってからやっと一階に下りてきたのか、と尋ねた。ある人は「この建物は頑丈だと分かっていたから」と言い、またある人は「子供のころから、地震になったらまず落ち着いて、すぐには行動しないで、ベッドや机の下に隠れた方がいいと教えられてきたから」と言った。もちろん寝ぼけた眼で眼鏡を探したり、警報を目覚まし時計の音だと思ったりした人もいた。そして椅子やテーブルが行く手を遮っていて、どうしていいか分からなかった、という人もいた。

夜が明けた。人々はいささか安堵したようだ。このとき、足下の地面が大きく裂けているのがはっきり見え、倒れてきた壁で乗用車がペタンコにつぶされ、大きなビルが崩壊し、平屋もつぶれていることが分かった。電車の線路も大きく破損している。駅前の池も、一つは水が半分くらいに減って、二十数匹の魚がひしめき合っていて、もう一つの池は水がなくなり、数匹の魚が腹を見せていた。

電話ボックスの前には、それぞれ十数人の長い列ができている。私は一番短い国際電話の列に並んだ。やっと私の番になった。テレホンカードを差し込もうとしても、どうしても差し込めない。後ろにいた日本人が、停電しているからコインしか使えないのだと教えてくれた。しかし、私はコインを持っていなかった。親切な人が、役に立たなくなったテレホンカードをコインと交換してくれた。また並び直し、やっと私の番になったとき、電話機はコインでいっぱい状態で、これ以上一枚のコインも入らなくなっていた。

北京の父に電話をかける

余震の合間を縫って、私は家、すなわち寮に帰った。室内は見る影もなく変わり果て、誰かがすべての配置を変えたかのような感じだった。壁にくっついていて机は部屋の真中に移動し、テレビは部屋の南西の角から東北の角に転がっており、書籍は山になり、二組の義歯を捜すのに数十分かった。紙くずの中から電話機を引っ張り出した。幸いなことに電話機は壊れず、しかも通じた。このときの驚きと喜び！私は落ち着いた口調で北京の父に神戸大地震のニュースを簡単に伝え、また市内の中央区、北区、西区と大阪に住む四人の恩師に電話をした。幸い四人とも被害はなかった。

一方、私が住んでいる神戸市東灘区は全市で最も多くの死傷者を出していると言われている。寮の北側の平屋と二階建ての家は、どちらも廃墟と化してしまった。日本人の中には、会社は家同様に大切、と考える人が多く、たくさんの人が様子を見に歩いて会社に向かった。その他の人は被災した場所に戻り、人を捜したり、救出したりしている。家族を救出した被災者たちが、比較的正確で適切な情報を教えてくれるので、救出が順調に行われている。家全体が倒壊している場合は、深く閉じ込められているので、一人を救出するのに非常に時間がかかる。

郷里に残した息子进行

皆で窓枠を切ったり、ドアを破ったり、家具を取り除いて中に進んでいき、とうとう一人の男の子を引っぱり出した。その子の両足は紫色に腫れ上がっていた。続いて、その子の母親を瓦礫の中から助け出した。救出作業中、この人は口をきくことができず、両手をこわばらせ胸の上で組んだままだった。私たちは布団を出してきて親子をくるんだ。車が来たが、一人しか乗せられない。私たちは子供を車に押し込み、母親の方はテーブルの上に載せて、担いで病院へ向かった。その途中でも、多くの家屋が倒壊して道を塞いでおり、私たちは回り道をせざるを得なかった。

この母親を担いでやっとのことで病院に着くと、畳の上に横たわったけが人の列が外の路上まで続いていた。医師は親子を診察して、軽傷だと判断し、夜になってから治療するから、ということで当座の薬をくれた。私たちは仕方なく、この親子を担いで寮に戻り世話することにした。

私たちの寮の百人近い関係者の中で、藤原さんだけが重傷だった。私は、軽傷でやはり賄いの小杉さんを支えながら、病院へ藤原さんの見舞いに行った。道すがら、亀裂が入ったマッチ箱型の八階建てビルの四階から救助隊員が人を救出しているのが見えた。狭い裂け目から救出するという非常に困難な作業で、連日、各報道機関がこのシーンを重点的に報道している。藤原さんが入院している病院はまるで水牢だった。地震で漏水しているのだ。藤原さんは、二階の病室で、腫れを引かせるための大きな氷嚢を顔に載せて、静かに横になっていた。

私は小杉さんに「こんなとき一番気にかかるのは誰？」と聞いた。彼女は「どうやって自分を守るしか考えていないわ」と言った。「じゃあ、息子さんは？」「男の人は自分のことは自分でできるから」と彼女は言った。しかし、男性である私がことのほか思い出すのは、北京にいる息子のことだった。彼が生まれてからの十年間、前半の五年間は私の仕事が忙しく、あまりかまってやれず、後半の五年間は日本に留学して、一度も彼に会いに帰っていない。私はいつも心の中ですまなく思っているが、今は彼に言い訳をしようとは思わない。私は彼に短い手紙を書いた。

「天ちゃん、神戸で大地震が発生した。お父さんはおまえのことを思っている。お父さんはおまえを愛している。おまえの健康を祈っている。ねばり強く、志を持った人であれ。」

大地震の日本で 父より

現在、一切がマヒ状態で、郵便も届かないことは分かっている。しかし、私はこの手紙を投函した。私は必ず死ぬとは考えていない。しかし、いつか死ぬという思いは排除できない。それで、この手紙を書いたのだが、この手紙が遺書にならないことを願っている。

夜のとぼりが下りてくるにつれ、恐怖感もわいてくる。私たち、寮の住人たちは空っぽで真っ暗な寮に帰る勇氣はなく、また甲南小学校に来了。甲南小学校は私立校で、校舎は新しく、頑丈で比較的安全だ。避難地区のリーダーが三階に行くことを提案してくれた。もし陥没が起きても、三階は一番高いところなので比較的安全で、もし一階だと、地下に陥没する可能性があるということだ。

私たちは、震源地以外の場所では陥没が起きることはあまりない、と考えた。校舎は頑丈で、一階の南のホールはグラウンドに面していて、いったん事が起きればすぐに逃げるができる。私たちはドアを開けっ放しにして眠った。みんな「やっぱり命は惜しいけど、地震で死ぬよりは凍死の方がマシ」と冗談を言った。乗用車を持っている人はその中で眠った。

ホールの中は非常ににぎやかだ。一般的に日本人の性格は内向的でおとなしいと言われていて、たとえ人が集まっても中国人のように騒がしくはならないと言われている。しかし、この非常時においては人々にも変化が見られ、見知らぬ人と声をかけ合い、食べ物を分け合い、普段よりもむしろ楽観的で明るくさえあった。

だが、神戸の地震はいつ終息するのだろうか？ 昼間は皆忙しいので感じないが、夜間に地震があると目を覚まし、ホールへ集まってくる。昔話の「狼が来る」という話のように、あまり「余震が来る」と言われると嫌気がさしてくる。もう小さな地震は気にならなくなってしまうた。

夫と再会直前に死亡した中国人女性

勇氣のある行員は、電気はつくものの断水している寮に帰っていった。また多くの行員は、長い道程を歩いて自分が勤務する銀行へ営業再開の準備をしに行った。しかし、私と賄いの人たちは避難場所に残った。実の話、地震は私の博士論文の執筆計画に影響する。だが、この特大の地震を体験し、非常時の日本社会を見たことは、私にとって一つの経験になった。

私は、この大地震で亡くなった中国人留学生のことを忘れることができない。その中の一人、衛紅さんという女性は、天皇ご夫妻の訪中時に通訳を努めた人で、昨年十月に大阪大学の大学院に進学し、経

済学を専攻していた。彼女は大阪日中友好協会の招きで来日し、協会の中の宿舎に住んでいた。しかし、今回の地震でこの宿舎は完全に倒壊し、彼女は瓦礫の山の中から発見された。来日直前に結婚した夫が一月十九日に訪ねてくる予定だったが、十七日未明に地震が起きたのだった。

阪神大震災を振り返って－留学生担当者として

塩川 雅美（女）日本
神戸芸術工科大学

1月17日の朝、連休から滞在していた友人宅で、突然の突き上げるような衝撃に目が覚めた。

停電の暗闇と、夜気の冷たさの中、手探りで携帯ラジオを捜し出し、何が起こったのかと情報を求めた。どうやら、地震が起きたらしい。しばらくして、電気が回復したので、テレビをつけてみた。だが、始めのうちは、まだ全体が把握できるような情報は流されていなかった。とりあえず、車の運転のできない私は、公共の交通手段が遮断されていたので、大学には出勤できそうにないと思い、大学に連絡を取ろうとした。だが、友人宅の電話からの着発信ができなかった。地震のショックで電話が故障したのだと思い、外の公衆電話から連絡を取った。大学も、物が落下、散乱し、とりあえず出勤した職員で復旧をしているとわかった。

やがて、時間の経過とともに、テレビの画面から各地の被害状況が流され、非常な事態になっていること、電話が使えないこと、交通機関が一時的に遮断されたのではなく壊滅状態にあること等がわかってきた。

留学生たちはどうしているのだろう。しかし、電話は使えない。身動きできない。唯一の連絡方法は公衆電話に並び、回線が奇蹟的に繋がるのを利用するしかない。深夜に自宅の留守番電話に留学生たちから、所在や、避難の連絡が入っている。しかし、こちらからは連絡は取れない。

地震発生から4日目によりやく、大学へ出勤した。留学生を含めた学生の安否確認をすでに出勤していた職員が始めていたものを引き継ぎ、留学生の安否確認に専心する。幸いなことに、死亡したり、怪我をした留学生はいないことだけはこの時点で判明した。しかし、留学生、ひとりひとりがどこにいるのか。

「直接、声が聞きたい！」と、再度、国際交流室としての所在確認作業に入った。全員に直接コンタクトをとり、所在確認作業が終了するまで、2週間という時間がかかった。すでに、友人宅、知人宅に避難している者、帰国してしまった者もいたが、とりあえず「みんな生きていてくれた。」とわかり、ほっとした。

この確認作業の中で、下宿が全壊、半壊した学生のこと、これから先入学する学生のことが、頭に浮かんできた。

平時(?)でさえ、下宿を探すのが困難な留学生たちが、新しい下宿を見つけることは、至難のことだと思った。その状況は本学の留学生だけではないはずと思い、近隣大学、JAFSA（外国人留学生問題研究会）加盟大学に被災状況のアンケートを急遽、依頼した。その結果をマスコミや行政に提示して、留学生宿舎の確保を震災後の対策に入れてもらおうと思ったからだ。

ところが残念なことに、回収できたアンケートは被害の少なかった地域の大学からのものが多く、アピールできる結果は得られなかった。

他方、本学の被災留学生のための宿舎確保のために、日頃から本学留学生と交流していただいている外部の方々に電話で協力の依頼をした。おかげさまで下宿が全壊した留学生2名が、外部の方から宿舎の提供をいただけた。

震災後、文部省から国際教育協会を通じて一時金の支給等の支援が行われたが、今なお、副次的に被害が続く現場にとっては「Better than Nothing」の支援であった。つまり、一時金の支給そのものは有り難かったのだが、年度で申請を打ち切ったり、帰国している留学生は申請要件を満たさないというものだった。帰国した留学生のことを「金銭に余裕がある。」とか、「学業を続ける意志がない。」という判断でもされたのだろうか。日本人だって余震を恐れて神戸を離れた。ライフ・ラインの復旧するまで知人や友人のところに、身を寄せることのできる人は神戸を離れていた。日本人学生が親元に帰るように、留学生が親元に帰る、つまり帰国したとして一体何が不自然だったのだろうか。救援物資のインスタント食品を煮るための水も出ない。それをやっと汲んできても、ガスがない。コンロは売り切れ。こんな状況におかれたら、誰だって逃げる場所があれば逃げるのではないか。こういった支援物資や水も、初期は支給される場所が限定されていて、人々が殺気立っている時に外国人の留学生がどんな辛い思いをするのか。考えてみて欲しい。日本人の私でさえ、地震後スーパーに押し寄せる人波にたじろいで、とりあえず「手元にあるもので食いつなごう」と思ったぐらいなのだ。授業が始まるまで、ライフ・ラインが復旧するまで、国に帰ろうと思うのは当たり前ではなかったのか。

そんな中で、有り難かったのはJAFSAに加盟している関東方面の大学の方やボランティア団体の方から「何かお手伝いできることがあれば」と連絡をいただいたり、支援物資を送ってくださったことだった。

また、留学生担当チューターとして在学中活躍してくれた卒業生が、渋滞の中を4時間近くかけて、

京都から留学生にと支援物資を運んでくれたり、別の日本人学生たちが、数名の留学生を自宅に避難させてくれたり、自分の下宿が壊れたのに担当している留学生を探してチューター学生が、避難所を回ってくれた。担当者の私が、身動きできない時にこうして、学生同士が助け合ってくれていたのだ。

留学生担当者といっても、ひとりの人間のできることは物理的にも時間的にも資金的にも限られている。今回のような大震災や非常事態においては、つくづく、多くの人と人の繋がり的重要性を感じさせられた。留学生もお互いに助け合い、あるいは日本人学生と手を携えて、この事態に向き合った。

こうして、今、あの震災を振り返り、自分に何ができたのかと思う時、未だに答えを出せずにいる。しかし、今回の震災は終わってはいない。留学生のアルバイト先はほとんどなくなった。手頃な価格の下宿もなくなった。留学生の保証人が被災して、トコロ天式に被害が及ぶ留学生もいる。そして、被災留学生のための支援金や奨学金等も次々と案内をいただき、震災関連業務は続いている。

あの時、身動きがとれずにただみんなの無事を祈ることしかできなかった私は、少しでも早く、留学生が地震の前に戻れるように支援していきたい。

地震発生から今日までの日々

庄司 祐子（女） 日本
神戸大学

地震が起こったとき私は明石の西に位置する加古川の自宅にいました。初めて感じる地震の揺れにそれが地震と判断するのにしばらくかかりました。本などが散乱する部屋をでて、テレビをつけようにもテレビも転倒しており、聞こえてくるニュースからは地震があったと報じるだけで一体どのくらいの被害がおこっているのかわかりませんでした。大学など神戸方面の電話は一切かからず、とりあえず駅へむかいました。そして駅のアナウンスにより、神戸地区で橋げたの落下等の大惨事がおこっていると知ったのでした。自宅にもどるとようやくニュースが神戸の町並みの映像を流しはじめました。それはにわかには信じられない光景でした。微震さえめったにおこらない関西地区でこんな大規模な地震が発生するなど、一体だれが考えていたでしょう。ニュースでは時間がたつにつれて報じる死傷者の数が増えていきました。神戸方面との電話はなかなかつながらず不安はつのり、皆の無事を祈るばかりでした。そして、ようやくその日の夕方に初めて大学の研究室と電話がつながり、ゼミ生全員無事であることができたのでした。私の研究室には3人の留学生がいます。Aさんは神戸ポートアイランドにあるレジデンスに、Bさんは大倉山ちかくに家族とともにアパートを借りており、Cさんは本山南町にある寮に下宿していました。彼らも無事避難していると知り、安心したのでした。

しかし、電話だけでは安心しきれず、何とかして大学にむかい皆の無事を確かめたいと思っていました。鉄道を初めとする交通網は断たれ、神戸方面へのルートがありませんでした。そこで地震の翌日の夜、車に食料、水などを積み込み、神戸の北側から迂回して大学へ向かうこととなりました。そこには、いつも明るいネオンに輝く町並みが、暗やみのなか無残な傷跡をさらして横たわっていました。幸いなことに、大学に避難している皆は怪我もなく、元気でした。Aさんのいるレジデンスの建物自体は大丈夫だったということでした。Bさんのアパートは半壊状態となりましたが、奥さんも坊やも無事でした。Cさんの寮は壊れなかったのですが、周りの建物はほとんど崩壊し、閉じ込められた人を救助するのを手伝ったとのことでした。3名とも余震の不安、生活確保のため下宿にはもどらず避難しており、互いの無事を確認し喜びあいました。

地震直後から始まった水道、ガスの供給停止は思っていたよりも長引くもようを見せ、鉄道、道路などの復旧も遅々とし、余震が絶えず感じられるころ、国から一時帰国命令がでたためCさんが帰国しました。また、Aさんも研究どころではない生活と、家族の心配から帰国していきました。帰国せねばならなかった留学生には、こちらの情報の伝達を心がけましたが、神戸大学に戻ってきてくれるのだろうか一抹の不安を胸に抱きつつ、街の復旧を見守っていました。

そして、桜のつぼみがふくらみ初めるころ、一時帰国していた彼らも日本にもどってきました。その間にライフラインなどの復旧はほぼ完了し、元どおりの生活を始めることができるようになりました。振り返れば地震が発生したのが約3か月前とは思えない程、地震後から今までの期間がとても長かったように思います。私達日本人でさえ、混乱していた時期でした。日本語による情報の理解もままならず、また日本での知人も少ない留学生たちが私たち日本人学生による助けを最も必要としていた時期かと思えます。しかし、それらの期待に十分応えられていたのだろうか、という思いがよぎります。これからも地震の影響により、または新たな事柄により、いろいろな問題が生じることでしょう。供に手を取り合ってこの神戸大学で歩んでいきたいと思えます。

最後にこの震災により志半ばで亡くなられた同輩のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

困難と共に安楽はある

スダルヤント（男）インドネシア
神戸大学
（日本語訳：スダルヤント）

「まさに困難と共に安楽はあるのだ」（イスラム教聖書[クルアーン]、第94、6節）。

平成7年1月17日に起こった阪神大震災は、私にとって自分自身が体験できた最大の災害である。その時、上述の聖書の一節が、私にとって励みの言葉となった。当時の災害状況は、言葉だけでは現せないが、ここでは、ただ記録として、その体験を報告する。その内容は、私がとった行動をメインにして、述べたいと思う。

16日夜、10時頃、私は来日したばかりの家内と一緒に、東京から帰って来た。疲れがたまっていた、その夜はぐっすりと眠れた。疲れが完全に取れないうちに、礼拝のために朝5時半ごろ起きた。それから、私は浴室に入り手足を洗った。その時、家内は台所で洗濯の準備をしていた。しばらくすると、突然、大きな震度を感じ、揺れている電車の中にいるような感じがした。名神高速道路を走っている大きなトラックが家に飛び込んだのかと思った。立ちあがることもできなかった私は、壊れてきた浴室の壁の破片がお風呂の中に落ちるのを見ていた。それで、私の全身は跳ね返った水と埃を浴びた。その後、実際、何ごとが起こったのか、まだよくわからなかったが、家内の叫び声を聞いて、浴室から飛び出した。浴室の前に、ドアに挟まれ、痛みをこらえている家内がいた。そこで、浴室が一番安全なところだと思い、家内を連れて、また入った。

しかし、地震だということに気づいた私たちは、すぐに部屋を出た。外では、次々と出てきた近所の人たちの姿が見えた。お風呂の水による濡れと外の寒さを忘れ、三階建てマンションの二階にある私たちの部屋を下から眺めていた。周りの壁が落ち、その落ちた破片が駐車中の車の何台かを潰してしまっていた。その時、近所の人がラジオのニュースを聞かせてくれて、この出来事が5時46分で、自分のところだけでないことが分かった。

少し明るくなってきてから、私たちは部屋に入り、貴重品と食料品を探し回った。それから、公衆電話の前に並び、神戸にいる母国の友人と連絡をとった。その夜、私たちは（家内と母国の友達ヌルさんを含め）大家さんの紹介で、近所の家に泊まらせてもらった。その家は安全だと自分にも家内にも思い込ませたが、地震に対する恐怖心が解けず、なかなか落ち着くことができなかった。

以上のように、地震直後の一日目を過ごした。その二日後、家内は京都の友達のところへ行き、私は尼崎から自転車で神戸へ行った。私は水と食料を詰め込んで、自転車で、まず友達の避難先となっている神戸のモスクへ行った。それから、ポートアイランドの神戸大学留学生会館に行き、友達の様子を聞いた。最後に、インドネシア人がたくさん集まっている御影のインドネシア領事の館邸に行った。合わせて一日8時間ぐらい自転車で乗った私は、その途中で崩れ落ちた街を見ると「自然の力は凄い、いや、自然を造った神様は凄い」という感想を受けた。

このように、家内は京都、私は自転車で神戸の様子を見ながら、救助活動をやって、4日経った。その後、水とガスの復旧見込みがまだはっきり分からない、ポートアイランドの留学生会館に移動した。当時、会館主事の先生によると、たった15人の留学生しか残らなかったと言うことである。そのほかは母国などへ避難しているようであった。私は、学校のことを考えるほか、留学生として、友達などのところよりも、避難所として留学生会館のほうが良いと思って、移動した。その代わり、毎日水を汲んで、自転車で一時間かけて、学校に通う生活をしなければならなかった。

以上のように、私は震災後の避難先を選んできた。昨年12月21日、家内が来日してから私が住んでいたマンションは全壊となって、住めなくなったが、荷物はほとんど無事で、近所の人に預かっていただいた。又、外のテントではなく、会館などに避難出来て、運がよかったと思う。

私たちが帰国しなかった理由は、お金と時間よりも、むしろ日本に残ったほうがやることが多いと思ったからである。まず、近々、出席する学会発表の準備ができる。そのほかに、この大震災に対して、日本の政府と国民はどのような対策をとるのかを見たかった。食べ物などがない状況で暴動が起こらないのか、死にかけた街を復旧するには、どうすればいいのか、などのような疑問があって、これらのことについては、日本に残らないとその答は得られないと思った。

復旧の過程は、私にたくさんの興味をもたらした。その中には、「しかたがない」という言葉がある。日本人は仕方がないと言いながら、諦めるのではなく、むしろ頑張っているようである。「しかたがない」という言葉は近代的な技術と共に神戸の復旧を促進したといっても過言ではない。これも私にとって勉強となったその一つである。私は親から聞いたタワカル（TAWAKAL）というイスラム教の教えを思い出した。タワカルの意味は、すべて起こったことは起こるべくして起こったこととして、困難と共に必ず安楽があるから、神様にすべてをゆだねる、ということである。また、クルアーン聖書の一つの節も思いださせた。その意味は、次のごとくである。「われは恐れと飢え、並びに財産と生命となんじらの苦勞による果実の損失とで、必ずなんじらを試みる。だが、堪え忍ぶ者には吉報を伝えよ、災難に遭った時、”誠に私たちはアラーのもの、彼のもとに私たちは帰るのだ”と言う者。このような者の上にこそ、主からの祝福と恵みが下り、また、彼らは導かれた者となる」（第2:155 - 157節）

大震災の後、私たちの間で「運命」という言葉をよく耳にする。しかしながら、運命とは何だろうか、と深く考える人はほとんどいない。それとも、考える必要はない、と思っているのかも知れない。それは、残念なことだと思う。

以上、私の大震災体験の一部を述べさせてもらった。体験であるからこそ記録すべきことで、帰国したら、日本でいい経験といいお土産になると思う。

最後に、震災に遭った皆さまにお見舞い申し上げます。また、この場を借りて、私たちにたくさんの援助をくださった方々に心より感謝いたします。

私達の出来る事

高雄志保子（女） 日本
神戸芸術工科大学

地震の日、事の重大さに気づいたのは午前10時頃、やっと電気が戻り、テレビを付け、神戸付近の映像を見て、ぞっとしました。地震の瞬間は何が起きたのか分からなく、その後は明るくなるにつれ、不安は和らぎ、今日の授業は休講かな、などとのん気に考えていました。テレビを食い入るように見ている時、電話が鳴りました。友人の韓さんでした。韓さんは当時、韓国人のグループで、スキー旅行に出かけていて、帰宅の際に灘区付近の高速道路上で被災したのです。あやうく危険をのがれ、徒歩で高速道路から脱出し、なんとか家までたどり着いたのはいいけれど不安になって電話をしてきたのです。とにかく無事で何よりということだけでした。

その後、彼女の住んでいたマンションは、もう危険な状態ということで、新しい部屋が見つかるまでの間、私の家で暮らすことになりました。1週間もしないうち、結局は、一人暮らしの友人の家へ移ってしまったのですが、最初に韓さんが私の家にやって来た時はバッグ1つで、必要最低限の荷物をかかえてパジャマのような姿で、どこもケガをしていないのに、なぜか痛々しく感じられました。

留学生の中でも比較的裕福な彼女は、必要な物はすぐ買いに行き、新しいマンションにも入居し、前に住んでいたマンションからの荷物も、すべて運んでもらうことができました。しかし、ほとんどの留学生はそんな訳にはいかないのです。親類もいなければ、友人も少ないのだから。ましてやこんな時に誰もが自分の事で精一杯で、助けを求める場所もなかったと思えます。国へ帰るとしても身動きもとれなかったでしょう。心に受けたキズは日本人よりも強いのかもかもしれません。私は韓さん以外の被災留学生には出会っていないので、現実としてどの程度かということとは分からないのですが、ただ1つ言えるのは私達が幸運にも生きているのだから、これからできることは何なのかということではないでしょうか。私は短期間ですが、明石市のボランティア活動に参加させてもらいました。神戸市ほどではないですが、避難所は多くの人でいっぱいでした。被災したという事に関しては、日本人も外国人も同じなのです。留学生の方々も、私達日本人と一緒に頑張っていきましょう、それだけです。

友 情 の 絆

ティン・エイ・エイ・コ（女）ミャンマー
神戸大学
（日本語訳：ティン・エイ・エイ・コ）

私は悪い夢を毎日見ている。とても辛い。とても悲しい。とても感情を抑制することはできない。こんなことがなぜ起こったんだろうと何回も考え込む。このままではいけない。この悪い夢を見ないために何か方法がある。それは全てのことを文章に書いておくことである。この文章で悪い夢を書く、そして、この文章で一生忘れられないできごとを残す。この文章は私個人だけの悪い夢ではなく、阪神大震災で不幸になった何千人もの人々の親類、友人などの胸の痛さ、辛い思い出を表す悪い夢である。この文章を書いて、私はこれから生きていく道を決めて、力をつけたいと思う。

私はミャンマーという発展途上国からの留学生であるが、日本のような世界大国で知識を得る国のために何か役に立ちたいという夢を持っていた。日本語学校に通いながら日本人の家庭にホームステイしていたので日本語はますます上達していたが、一年近くになるとホームシックにかかって毎晩自分の部屋で泣いてばかりいた。ミャンマー人でありながら、一年間、分りにくい日本語を覚えるのに無理していたため、それを解消するために一日でも早くミャンマー人の誰かと会って話をしながら、国の食べ物を食べたいという気持ちが強くなった。その時、ちょうど神戸大学、文学部に研究生として入学し、同じ学部でミャンマー人のエイさんと知り合った。それから私の日本での生活は意味のある日々が多くなった。それから、自立し、寮生活を始めた時、アルバイト先をエイさんが教えて下さった。アルバイトで、もう二人のミャンマー人キンさん、ルウインさんと友達になった。ミャンマー人の友達は三人とも私より年上なので私にとって姉のような存在でした。アルバイトはレジの仕事なので初めての私にはお金の計算や分からないことが多い。その時いつもその三人の誰かが見守ってくださった。私は苦瓜を植えたので実がなったら、必ず友達のために三人分を持っていった。ある日、キンさんは彼女も家の前に苦瓜を植えていると見せてくれた。いつか実がなったら私にくれると言った。

お腹が空いていても、冬で足が冷えても、雨にぬれて寒くても、勉強で疲れて頭が痛くても、私はバイトに行かなければならない。その時、バイトの行き帰りに寄る所は東灘区のミャンマー人三人の部屋である。私に何か足りない時、人にいじめられた時、困った時、いつでも姉のような三人が私を支えて守って下さった。私は日本に来て10キロやせたが、その三人のお陰で体重は上がった。

異国で生活するには、たいへんな苦勞をしなければならないと私自身が覚悟していても自分で解決出来ないこともあり得る。そういう時、ミャンマー人同士で助け合えるのを考えると私は安心できた。私よりその三人は辛い思いをしながら逞しく頑張っていることを知ると、もっとその人達に感心するようになった。

1994年の12月から私は試験の準備のためバイトを休んだ。一カ月以上勉強で苦しんでいる時も、試験が終わる日にお姉さん三人を呼んで私の寮でパーティをしようと考えながら、頑張っていた。その時は、しばらくの間、会えないだけだと思っていたが実際には・・・・・・

1995年1月17日、阪神大震災が発生した。幸いに私の寮は無事だったが、水とガスが出ない、手持ちのお金がないという不安の日が二日間続いた。その二日間、友達三人の部屋に何回も電話をしたけれども全然通じなかった。私は毎晩悪い夢を見るようになった。夢の中でキンさんはバイトで会おうねと何回も言っていた。ルウインさんは欲しい物があれば言ってね、あげるからと明るい顔で言っていた。その夢は20日の朝6時ごろだった。夢の途中、電話の呼び出しで起こされた。その電話は友達の不幸の知らせを伝えてきた。その瞬間、私は大きなショックを受けて泣くのを忘れていた。本当ではない嘘だと信じたい、二人とも失うのはいやだと叫びたくなった。先生の電話で一人が死亡であると確認したが、一人は入院、一人は行方不明だということだった。誰がどんなことになったか、はっきりした情報がない。自分は何もできない役に立たない人間に思え、泣くしかできることはなかった。とっても辛かった。自分が使っている物のほとんどはルウインさんからもらった物だが、見ているうちに泣いてしまった。このままではいけないので、私は日本でお世話になっている方をお願いをして友達の入院先を探し回った。真夜中、車で十時間かけて尼崎から加古川病院まで走った。寝ることも、食べることもできず、その三人のことだけが頭にあった。異国で亡くなるなんて、どんな巡り合わせなんだろう、可哀相だと思いながら自分は生きているから、その人々のため何かできるだろうと考えてばかりいた。

加古川病院でエイさんと会った。額の傷を縫っており、右手の複雑骨折の手術をする前でエイさんはか細い声で話をした。“もう二人は亡くなったと電話があった。キンさんは即死で、ルウインさんは元気な声で早く出して、苦しいと声を出していた”とエイさんは私にミャンマー語で言いな

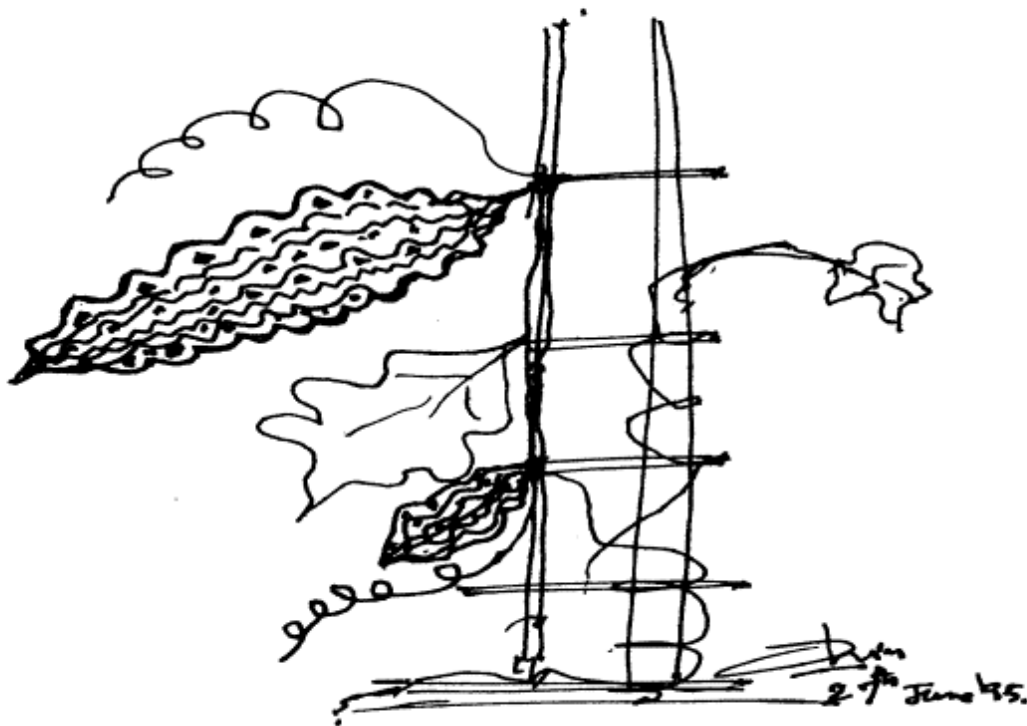
がら、涙さえもう出ないと話し続けた。彼女の目に涙が溢れてきたのに気付いた。自分も話せないほど悲しくてたまらなかった。

次の日、東灘区の倒壊した彼女達のマンションへ花と水を持って行った。7階建てで大きなマンションだが、彼女達が住んでいた1階は潰れて2階がその上に落ちてきていた。花と水を供えると雨が降ってきた。目の前にキンさんが植えた苦瓜の苗木、私は涙がなくなるほど泣いた。ミャンマ式で天国に行けるようにと何回も祈った。その日は雨と涙、そして恐ろしい天災等、私の心にそして記憶に一生忘れられない一日だった。

キンさんとルウィンさんは日本に来て2年以上になるが、休みに国へ一回も帰ったことはなかった。

た。キンさんのお母さんは首を長くして一人だけの娘の帰って来る日を待っていた。いつか一緒に暮らそうと願っていたお母さんは娘の亡くなったことを納得できず、精神不安定の状態だと聞いた。キンさんのお兄さんと神戸大学の合同慰霊祭で会った時、私にこのようにおっしゃった。“私には妹が亡くなった。でも日本に妹がいると信じたい。エイ・コさん、私の妹になって下さい。そう思わせて下さい。”

阪神大震災で二人の友達を失った私の気持ちとしては、彼女達の思い出がある所にいるのは本当に辛い。どこかへ逃げだしたい。でも、私には責任がある。彼女達は望んでいた夢がかなわなかった。その分まで私は頑張らなければならない。



アフターショック

アレキサンダー・トクマコフ（男） ロシア
神戸大学
（日本語訳：井田暁子）

実際のところ、阪神大震災の前には私は一度も地震に遭ったことはありませんでした。ニュースの報告や新聞の記述は実際とは違っていました。

幸運なことには、私が住んでいた場所（学園都市）は災害のちょうど中心にはありませんでした。ですから命が奪われることもなく、建物が壊れることもほとんどありませんでした。もちろん、ガスや水・食料の不足や交通面での問題によって、落胆させられました。しかしながら、これらは一時的な不便でした。私は無事に元気でいられることを幸運に思います。私の友人や同朋たちも皆全く元気です。ですから大変落ち込んでいる、とかひどい被害を受けている、ということは全くありません。私は3週間ほど、九州に疎開しました。私が帰るまでには寮は全て修理され、交通も一部で復旧して生活は通常のように思えます。ですから、自分にとって地震は深刻な影響もなく終わった、と私は考えました。しかしながら、まだ終わりではありませんでした。

私が知る限りでは、その後、2カ月にわたって何度も余震がありました。深刻なものではありませんでしたが、その都度私は恐い思いをしました。阪神大震災の前には全く無かったことでした。待つ意外なにもできない、と言う感じです。何を待つのでしょうか？一瞬のうちに、周りにあるものは全て完全に崩れ、恐ろしい災害が起きたかもしれないのです。これらの建物や道路や、かつてはとても堅くてしっかりしているように見えた山々さえも実際には大変弱く、大災害の事態には生存者すら守れないのです。高度な科学技術や進んだ科学、スペース・シャトル、原子力施設やスーパー・コンピューターがあっても、人間はやはり大変弱く、無防備な存在なのです。阪神大震災の前にはこんなふうに感じたことはありませんでした。時々真夜中に嫌な感じがして目が覚めることがあります。もう一度恐ろしい地震が起こる、という心の奥底にある確信の中で、周りのものが、みな動き揺さぶられている、というパニックのような感じすらして目が覚めるのです。その後は、再び眠りに落ちることができずに待つのです。----- 次は何か起こるのか、と。耳をずっと澄ますだけです。時がたてば解決する、と言う声が聞かれます。いつの日かのり越えられるように、と私も願っています。いつになるのかは分かりませんが・・・。

震災後の避難所から見た日本人精神

王 賀瑤（女）中国
神戸大学
（日本語訳：王 賀瑤）

平成7年1月17日阪神大震災は、想像を絶する規模でした。5,400名以上の方々が亡くなった。重軽傷者も数えられないほどいた。大震災後、数十万の市民は家を失って、家の近所の学校等の安全なところに避難してきた。

地震後から今まで、約3カ月経ったが、今、まだ5～6万の市民が避難所で不自由な生活をしている。しかし、こうした避難所を通して、日本人の集団主義、和の精神、助け合いの美徳等の日本人の素晴らしさを感じることができた。

避難所では、多くの方々は、回りの人に迷惑をかけないように、気を配っている。皆は和を大事にして、少ない食料・毛布等の救援物資を均等に分けている。皆が自発的に組織し、避難所の衛生、安全等あらゆる面の管理をしている。避難所にいる市民らは家族の雰囲気でも互いに助け合っている。また、多くのボランティアは避難所でいろいろな活動をして、避難している市民の生活を支えている。

今回の震災を通じて、日本での勉強は科学知識だけでなく、日本人の価値観・勤勉さ・優しさ等の社会勉強も大切であることを再認識した。これからは大学での勉強だけでなく、日本社会での勉強にも積極的に頑張って参加したいと考えている。

私の被災体験

王立彬（男）中国
神戸大学
（日本語訳：王立彬）

阪神大震災はもう三か月を過ぎましたが、地震の当時の様子がまだ深く残っています。

私の一家は神戸市兵庫区の中部、古い文化住宅に住んでいます。1月17日の朝、ぐっすり眠っていた私は、突然、凄く揺れて目覚めました。”ああ！地震だ！”、私は直ぐ起きて座りました。私は中国多地震地区の河北省に生まれ、1965年の河北省邢台大地震(M7.4)、1976年の河北省唐山大地震(M7.8)に遭ったことがあるけれども、今回の地震ほどこわくなかったです。その時、考える余裕がないから、私は直ぐ体で子供を守って、”大丈夫だ、もう終わったよ”って、子供と妻を慰めていましたが、実は私も凄く恐かったです。”世界の末日だ！”という絶望の感じがしました。凄く長い揺れ、周りの真っ暗闇、家具の倒れる音、埃が鼻をつき、私たちは何もできなく、屋根の倒れしか待っていませんでした。間もなく、揺れが止まった。周辺は恐怖な静寂になりました。”助かりました！逃げろ！”って、慌てて、服らしいものを取って、家から逃げました。でも、途中の階段は、倒れた壁で詰まってしまいましたので、出られませんでした。急いで壁を片づけまして、一家は、広い平坦な所まで走ったあと、ほっとしました。その後、私の一家は外でじっと座りまして、夜が明けた後、家の倒れそうな全壊の状況が見えました。家に戻れないので、午前11時頃、近くの小学校に向かって行き、避難しました。

避難所でテレビを見ると、神戸市の大きな被害の状況がだんだん分かってきました。先生と友達の安否をととても心配していたので、すぐに電話を掛けにいきましたが、誰とも、連絡が取れませんでした。でも、私当時、一番心配したのはそれだけでなく、妻がその時、ちょうど病気になって、高い熱が出てくるのです。当時の状況では、病院に重軽傷者がいっぱいになり、医者、薬品、病室などとても不足していたので、治療をしてもらえませんでした。避難所からもらった食料品も冷たいから、病人は全然食べられないのです。”どうしようかな”って困っていました。妻の病気はパニックで、重くなりましたが、三日目、トイレに行くとき、意識がなくなりました。しかし、その時に、一緒に避難した日本人の方々から助けていただきました。自分の薬を出し、妻に飲ませていただくのみでなく、余震の危険を冒して、熱い料理を作って食べさせてくださいました。日本人の方々のお陰で、妻の病気はだんだん安定しました。念のために、一週間後、妻が子供を連れて中国へ帰りました。私は、繰り返し考えて、研究を続けよう、また罹災されたみなさんをなにか手助けしようと、神戸に残るにしました。それから、私は、避難所から研究室に移りました。

私は研究室で、今までの研究を続けるとともに、ボランティアとして救援活動に参加しました。地震の初期、人々の安否情報がとても重要だから、私は、情報研究室の有利条件を利用して、先生のご指導のもとで、神戸地区の中国留学生の安否情報と、生活情報、義援金情報などを電子メールに流しました。そして、留学生の友達、兵庫県日中友好協会と一緒に、中国留学生連絡センターを発足しました。当センターで、神戸地区の500人以上の中国留学生の安否状況を確認して、この情報を日本の政府機関、中国の政府機関、留学生の親類、友人に提供しました。その他、200万円以上の義援金とたくさんの救済物質を募集して、全部被災された留学生に渡しました。同時に、一部分の住居情報を留学生に提供しました。この活動によって、日本人の方々の中国人留学生に関心を持ち、援助する熱意に対して、深い印象が残りました。日本政府、日本民間の方々の協力がないと、罹災された留学生たちは災難を切り抜けることが不可能だと思います。

大地震以来、私は、ずっと神戸にいますので、阪神大震災の体験者として感想がたくさんありますが、一番印象深いのは、大震災で現れた日本人の優良な国民素質とよく頑張れの精神だと思います。市民の中には、恐れ、パニック、失望の顔が見えないし、みんな負けないように、よく頑張っています。僅か、2カ月ぐらいを経て、生活ラインがほとんど復旧されました。この偉大な民族力によって、近い将来、新しい神戸が必ず、もう一回世界の前に立ち上がると信じます。私は留学生として、阪神大震災を通じて、平常勉強し取れないものをたくさん勉強させてもらいました。

私の研究は思いどおりに進めしましたが、地震の影響、ボランティアの参加により、随分遅れました。この影響を切り抜けるために頑張りたいと思います。

神戸の魅力の再現へ

王 文傑（男）中国
京都教育大学
（日本語訳：王 文傑）

海に向かい、山に寄りかかっている美しい都市である神戸は、国際都市と呼ばれている。たくさんの留学生が自分の故郷を離れて、この都市に来て、そしてここが好きになってきた。

私は神戸の友好都市である天津から来たので、特別に親しい感じがする。一年間の留学生活をして、日本の生活にも慣れてきた。

日本に来る前に、神戸は「神様の門」だと聞き、また、日本は地震の多い国だが、神戸は、ほとんど地震がない安全な地区とも言われていた。ところが、一月十七日の地震が人々を驚かせた。私の住んでいるところは壊れないで、幸い怪我もなかったが、家の中は目茶苦茶になった。

家族と連絡するため、市役所で国際電話を掛けた。そこで同郷人の李さんと出会って、歩きながら地震の話をした。「この地震で小学校時代の中国の唐山大地震を思い出した。その地震は世界で死亡者の人数がトップでした。今回の阪神大震災も損失が大きいですね。」と話しているうちに、三宮の歩道橋の上に着いた。ここから眺めると、見渡すかぎり壊れた高層ビルが見える。李さんが「必ず神戸をあたらしく建設しなくちゃでも、新しい神戸ができる時、私たちはもう卒業して、中国に帰っているでしょう。」と寂しそうに言った。

この話を聞いて、悲しい気持ちでいっぱいになった。でも、新しい神戸を建設するには、私たち留学生も尽力しなければならないと思う。

驚きの一瞬間を忘れて、自信をもって、もっと魅力的な神戸を迎えよう。

決 意

王 雅琴（女）中国
神戸大学
（日本語訳：● 貴生）

1995年1月17日、人々がまだいい夢を見ていて熟睡していた時、阪神大地震が起きた。天と地が共に強烈に揺れていて、巨大な振動が響いていた。まだ事態に反応できない時、阪神地区のすべての人は災難に遭った。ほんの一瞬で、私たちの運命は生きるか死ぬか決められ、本当に恐ろしい。

異国日本に住む私たち一家3人は、この前代未聞の大地震を目撃した。夢を見ていたように、部屋がすこく揺れていて、地面も振動し始めた。また、巨大な音が聞こえてきた。アヤ、地震だ。普段、地震が絶対起きないといわれている神戸地区に地震が起きた。主人と私の最初の反応はまず子供を保護することであった。自分の身をもって何ができるかということを考えずに、子供をカバーした。この時、主人は大声で叫んだ。「地震だ。早く子供を抱いて出よう。僕がドアを開けるから」私はすぐに子供を抱いて、猛烈な勢いで部屋を出た。あの時の場面は一生忘れられない。周りは真っ暗で、非常に寒かった。電気、水、ガスは使えなかった。異常な静けさも怖かった。

二時間経って、夜がゆっくりと明けた。地震後、初めて家の惨状が見えた。めちゃくちゃだった。子供は目を覚まして、私に聞いた。「ママ、どうした？」私は心の中の恐怖を抑えて真実を教えなかった。出来るだけ、続けて寝てほしかったが、余震は、また起きた。子供は恐がって泣き始めた。どうしたらいいか全く考えられなかった。とりあえず、この家を出た方がいいと主人が判断して、近くの大学に行こうと言った。

簡単な食料品をもって子供を研究室まで連れて行った。空は黒い煙が充満していた。私たちは不安で一杯だった。昼過ぎには、学校で電気が使えるようになったので、私たちは、やっときれいに映ってはいないがニュースを見ることができた。真実を知ると、私たちは生きていて非常にラッキーであることがわかった。

地震後、数多くの留学生が学校に来た。皆さんは助かって良かったと思うと同時に、亡くなった友人を悲しんでいた。私は持っていたわずかの食品を皆さんに分けて食べてもらった。家を無くした留学生がたくさんいた。私たちの家は、危ないが建っていた。学校に近くて便利が良かったため、食料品を持ち出すことができて一週間ほど維持した。日本政府は、被災者に食品と飲料水を送ってくれたし、大学の留学生センターも留学生にいろいろ便利なものを提供してくれた。また、文部省は家が壊れた留学生に援助金を支給した。

阪神大地震は起きたが、私たちはこれからの人生と留学の機会を大切にして、たくさん勉強しなければならない。震災復興のためにも私は力を尽くして貢献したいと思う。

阪 神 大 震 災

王 峙（男）中国
神戸学院大学
（日本語訳：王 峙）

平成7年1月17日早朝に起きた兵庫県南部地震が神戸を直撃した、わずか20秒あまりのはげしい揺れで、港町-神戸をすっかり変貌させた。その恐しい瞬間の記憶がいつまでも人々の心に残り、大地の震動が一瞬にしてはかり切れない莫大な損害を人々にもたらしたほか、住民の心の奥に深いきずを残した。われわれは大規模の自然災害とその対策をもっと真剣に考えなければならない時代がきていると思う。

この未曾有の地震でもっとも被害を受けているものは、われわれ人類が現代技術を駆使して造った高速道路や鉄筋コンクリートの建物だった。人類が現代文明の便利と快適さを思う存分エンジョイすると同時に、その現代文明が災害時にわれわれに何をもたらしたかももう一度考えなければならない。

地震が阪神地区にもたらした大きな被害をふりかえって見ると、われわれがいかに地震に対する警戒感が薄いかが浮彫りになっていた。多くの関西に住んでいる人々のほか、一部の地震専門家も関西には大地震がおこらないという先入観を持っている。従って、突然地震が、特に今まで経験のない都市型地震が襲ってきた場合、有効かつ冷静に対処できず、手も足もでない状態に陥ってしまう、ビルの耐震性から、庶民の日常生活まで、地震対策が十分に考慮に入られていないことは確かだ、地震後に住民に対するアンケート調査の中で、10パーセント未満の住民が日頃から家具の固定や被災時に使われる必要な食品や道具の備えなどを行っていることもその一つのあらわれだ。それに、地震日本政府の救援システムも有効に機能できず、自衛隊派遣の遅れも被害を拡大した要因の一つである。

しかし、この地震で私にとって、もっとも印象が残るのは、日本人の目の前に起こった大災害に対する冷静さと礼儀正しさである。多くの日本人が地震後に一早く被災地にたどりつき、ボランティアとして活躍してきた、被災地に住んでいる外国人に対しても、情報提供などによって、最大限の便宜を図ってくれた。地震が人々に多大な苦痛をもたらしたと同時に、人々の心の距離を近づかせ、そのむすびつきを一層緊密化させた。

阪神大震災はわれわれに経済的にも精神的にも大きな被害をもたらした。地震がある意味では避けられない災害であることに対して、環境汚染のように避けられる災害が人類自らの手によって造られ、世界中あちこちで発生することは悲劇とも言える。これから、われわれ人類が大自然と協調しながら、発展していくことが、われわれ自身だけではなく、われわれの子々孫々にも関わる大切な問題になるだろう。

震 災 体 験 記

黎燕生（男）中国
神戸YMCA学院専門学校
呉万虹（女）中国
神戸大学
（日本語訳：呉万虹）

前書

この文章は1995年1月28日中国の「天津日報」に載ったものである、震災の後、帰国して、元勤めていた新聞社のため、書いた文章であったため、中国の読者を対象としているものである。今回日本向けとなると角度が不適切な所があると思う。しかし、真実であるため、ここに、敢えて何も手を加えず、そのままて発表させて頂きたい。

死んだ人達と比べて、私達の体験は何もなかったと思うが、1976年の唐山で起こった7・8級大震災の体験者として阪神大震災は私達にとってもう二回目である。地震は天災であり、防ぼうとしても仕方がないことである。しかし、人間としてはいくら大きな災害を目の前にしても、それを乗り越える自信を待たなければならないと痛感している。

ここで改めて、死んだ人達に追悼の意を表わしたい、そして、一日もはやく、この悲しみを乗り越えて前向きになるようにお祈りする。

一

1月17日午前5時46分頃、日本人に安全の地域とよばれていた神戸市は震度7・2の大地震に襲われた。その時、私達住んでいる神戸市ポートアイランドにある留学生会館は大波の中のボートのように揺れた。夢から醒めた後、大変恐ろしく、もしかしたら、日本で死ぬのかとふと思った。後の統計によると、地震は僅か十数秒しかなかったが、私達にとって半世紀ほど長かった。

びっくりしてまだ胸がときどきしている100名以上の各国からの留学生は自分の部屋から走り出した。外を見回ったら、水は地下から湧き出して、きれいな港島公園の中は水がいっぱいだった。寒い風の中、留学生は全身がガタガタ震えていた。ある台湾の女の子はあまりにも慌てたので、靴もはかなかった、裸足のままで一時間もたった。地震あと30分ぐらい、留学生たちはやっと日本人の姿を見た。布団を被って、服も整っていない留学生と比べて、日本人の方はずっと身なりがきちんとしている。一部分の人は布団を持って港島小学校へ行った、これで避難生活が始まった。

ポートアイランドは当初海を埋め立てることによって建てられたのである。多分建てた時地震の要素は十分考えられた。震災の後、高いビルは倒れたのは一つもなく、ただ島の地面が落ちて、泥がいっぱいであった。島の周辺の神戸港の埠頭は輝がはいって、海水がたくさん湧いて来た。天津と神戸の直航のフェリー「燕京号」は神戸港でとまれないため大阪港と変ったらしい。

二

震災の後、皆は生活の問題を考え始めた。17日、18日、ポートアイランドの二つのスーパー、ダイエーとトーホーの前で、買物する人は長い列をつくって、並んでいた。沢山の人は静かに待って、秩序良く、米やパンやインスタント食品などを買った。列に割り込んだ人はめったになかった。みんなが少しでも買えるように、ほとんどの店は購買数量を限定した。ある留学生は朝10時から並んで7時頃スーパーに入ったとき、食品は数少なかった。閉店前に店内に残ったものは調味料だけだった。ティッシュペーパーも売り切れた。生活日用品がなくなったので、みんな慌てた。

家の米がなくなった。ポータライナーも不通になったため、私達は30分ぐらい歩いてポートアイランドを出た。空は依然として青いけれど、神戸の美しさはなくなった。私達は日本では国営商業がないので、何かあったら、物価がずっと上がるのではないかと推測して、多少高くても、買うしかないと覚悟した。震災の後、たくさんの商店は閉店になり、あっちこっち探した結果、私達は三宮の近く葺合で、米と酒の小さい専門店を見つけた。米の価額を聞いた時、店員の答えはまだ5キロ3500円であった。けれども、手に入れたとき、店長の口から出た価格が5キロ4000円となってしまった。これで、震災の後

神戸の物価は若干高くなるかなと結論付けようとした。しかし、そのあとの買物経験はこの結論を否定した。今回米を買った体験は物価のことでやられた唯一の事となった。日本の小売業などサービス業は従来お客さんを神様としている、ほとんどの経営者は震災の後お金をもうけるチャンスと見なさなかった。経営者達はこれからの長い日日をもっと重視して、セールにせよ、無料サービスにせよ、被災の人達に温かい一面を感じさせて、絶好の自己アピールとした。

三

大災害の後、必ず秩序が悪くなるといわれているが、震災の後、神戸は静かで秩序もよかった。

震災の後、道路で交通を指揮する交通警察官以外、警官の姿があまり見られなかった。震災のあと、救援物資を配るのはほとんどボランティアにたよった。被災者は自衛隊のあまりにも遅かった行動や総理の対応などに不満を持った。ある被災者はNHKの番組に出て、村山総理を批判した。国会では、議員達も村山総理の震災対策をしつこく追究した。

震災の後3日目から、日本人は全壊したビルを解体し始めた、仮設住宅も建て始めた。

日本人は晋段、忍耐強く、会社では、よく上役に厳しくいわれているので、それを黙って我慢するしかない。日本にいる私達は常に心の中で日本人として生きるのはあまりにも疲れと思っていた。そして、これはまるで個性を殺していると思った。しかし、震災の後の良好な秩序は忍耐強いプラスの一面も証明してくれた。日常生活の中で皆があまりにも個性があったら、いまの秩序はありえないだろうと思う。

四

日本人は愛社、愛校精神で有名である、これは震災のあと、もっと身にしみて感じた。地震の当日、電車が運転していないにもかかわらず、たくさんの会社員は歩いて会社へ行った。

神戸新聞社整理部の一木さんは芦屋市に住んでいる、震災のあと、一木さんは大急ぎで三宮にある本社に行った。通常電車で20分かかるが、今回3時間も歩いた。地震で、神戸新聞社の本社が全壊した。整理部のコンピュータシステムは故障し、新聞を出すことができなかった。神戸新聞社は京都新聞社に手伝ってもらって、一木さんは会社の同僚たちと一緒に京都へ行った。仕事のため、一木さんは一週間家に帰らなかった。20日、神戸大学法学研究科の初瀬龍平教授は自分の学校と学生を心配して、水やおにぎり一杯詰めたかばんを背負って、大阪府の豊中市から3時間もあるいて、学校へやってきた。初瀬先生が持ってきたのは単に水とおにぎりだけではなくて、生徒たちへの温かい気持ちもあった。

五

多分、以前の新聞記者の職歴があったせいか、今回、特に日本のマスコミの地震についての報道に関心を持った。緊急の場合マスコミの力はとても大切である。

震災のあと10分もしないうちに、ラジオは地震のニュースを放送した。そして予定番組をすべてキャンセルして、全部地震情報に変った、ラジオ放送はまた神戸住民に電話をかけて、生放送で、地震の状況を伝えた。一時間あと、電力が復旧して、みんな、さっそくテレビをつけた、NHKやTBSやJNNやABCなどテレビ局は全部地震について内容一色であった。各局は生中継で伝えるので、各局は全部ヘリコプターを使った。

テレビとラジオのスピードと比べたら、新聞社の記者の方はいへんだった。毎日報道の深さで補うしかなかった。大部分の新聞は数ページをかけて、死亡者の名簿を載せた、専門家の分析を交じえながち、各新聞社の独自インタビューも大量に載せた。震災のあと、日本のマスコミのスピードは確かに世界一流であった、しかし、テレビリポーターはマイクを持って、外から倒れそうな部屋の中の被災者をインタビューするのは、正しいか正しくないか、私達は疑いを持っている。私達と同じ避難所で避難している日本人は、同時に飛んでいる5、6台の中継ヘリコプターを指しながら、これ、生中継に使うよりもむしろ救援物資の運送に使ったら、助かるのにな、といっていた。

(終わり)

神戸にいる日々

呉 宇震（男）中国
神戸学院大学
（日本語訳：呉 宇震）

地震で日本列島が誕生した、ある日地震で『日本沈没』がほんとになるのか？－よく日本の友人にこう言う話をしたが、それでも自分が五年も生活して来た神戸は地震なしの“安全地帯”と信じていた。

地震のあと、経験した人はほぼ皆んな“地震専門家”になれる、地震専門家に文句を言うつもりはないが、地震のあとに“地震だ”と教えてくれるのはあまりにも遅すぎる。予知できないなら防災と救済に全力をあげるべき、現代科学のあらゆる手段で、と私は思う。人類はまだ天災に勝てない、天災は古代から未来にかけて人類永遠の課題になるかもしれない、科学者たちはそれを素直に受け止めて欲しかった。地震後、一番遺憾と思ったのはこれだった。

昔通った日本語学校の学生の中にも二人私と同じ国の若者がなくなった、地震で。日本に来てわずか三ヵ月、“私のような”先輩を目指して希望一杯だったでしょうね、青春は神戸で止まった、これ以上年をとることもない、永遠の青春だ。時間がたつにつれて彼（彼女）を覚えているのはあと何人でしょう、申し訳ない気持ちが一杯で、今言えるのは“一路平安”（注）だけ。

五年間、神戸の生活に馴染むことができて震災前も、今も、これからも神戸を憎むことはない。“暖味な日本語”の一つ“お世話になりました”、以前からずっとこう思っていたが、今は反省している、暖味な表現ではなく、現在も体験している、“神戸、お世話になっております”。

（注）一路平安：中国語、旅人のご無事を祈ることば。

恐怖の瞬間・・・阪神大地震目撃

呉 遵民（男）中国
神戸大学
（日本語訳：● 貴生）

一、悪魔のような思い出

“一月十七日早朝、5時46分、強烈な大地震が兵庫県を直撃した。震源地の淡路島は震度7.2、直下型。日本全国に地震の影響が出たが、もっとも被災した地区は神戸（中心部の三宮駅震度7）、淡路島（一宮町震度7）、大阪（震度5）、京都（震度5）。強烈な揺れがただの30秒しかなかったのに、地殻は陥没していった。神戸市内のビル、高速道路、高架鉄道、電柱及び普通道路は瞬間に倒れ、割れ、廃墟になった。大地震後、電気、ガス、水道、電話は全部寸断され、ガスパ이프の破裂による火が蔓延して市内190ヵ所も火災が起きていて、神戸の上空は真っ赤であった。水道が使えなかったため、消防隊は対策を迫られていた。普通の市民は夢がやっと覚めたように、崩壊した家から逃げていく。近代化都市神戸は全く機能せず、極度の恐怖と混乱の状態であった。その晩、警察の調べによると、1400人以上が地震で亡くなり（最終に5420人）、怪我した人は4200人にもものぼって、家屋崩壊は51998であった。この日は「悪魔の一日」と言われている……”

以上の文章は関西留学生の新報紙「中日新報」2月号の一部である。筆者は当紙の駐神戸記者で、震災当時も震災地区にいてこの前代未聞の阪神大地震を目撃した。当時のことを思い出すだけでも非常な恐怖と共に不思議に思う。私は五年近く神戸で勉強、生活しているから、神戸市中心のあらゆる道路、建物に親しんでいる。が、何百年の歴史をもつと共に、現代化施設も有するこの静かで美しい港湾都市は、阪神大地震のせいですぐに廃墟になった。何十万もの市民は一瞬地獄におちたように、絶望の頂点に達した。もしこの目で見ていなければ、本当に信じられない。フィクションでもない、神話でもない残酷な事実、私は未だに恐がっている。

二、恐怖の30秒

一月十七日未明、関西の阪神地区はいつもと同じく、静かであった。日曜日（15日）、成人日（16日）の連休を利用して、神戸市の中心地三宮に買物と遊びに行った人々は疲れて、熟睡していた。新しい一週間の仕事はあと2、3時間で始まろうとしていた……

五時頃、寝ていた私は妻に起こされた。頭が痛くて我慢できないと言われたので、私は起きて薬と水を取ってきて飲ませた（妻は3週間前から風邪をひいて、やっとこの2、3日は少し良くなった）。再び電気を消して寝る前、時計を見た。時刻は5時20分だった。

夢に入ったばかりかと思った時、巨大な音が地下から湧いてきて、煮ている玉子のように部屋は上下方向に猛烈に揺れ始めた。まだ反応できないうちに、ベッドから放り出された。これと同時に、全てのドアと窓からガガと挟まれた音が聞こえた。外は真っ暗だが、怪しい恐ろしい光が見えた。また、部屋は東西方向にも揺れ始めた。短い20秒の間、揺れはますます強烈になって、地面が鳴る音、家具が倒れた音と妻の叫び声が一斉に頭に響いていた。唯一、できるのは自分の毛布を妻の頭にかぶせ、両手で自分の頭をカバーすることであった。その瞬間、地獄に落ちたようにすごく怖かった……。どれくらい時間が経ったか分からないが、地面の揺れはやっと止まった（後で揺れが30秒続いたと知ったが、当時は非常に長いと思っていた）。私は怖くて何をすればよいかわからなかったが、妻は落ち着いて私に「パスポートをもって早く部屋を出よう！」と言った。しかし、慌てて大事な眼鏡も見つからなかった（停電していた）。やっと妻が懐中電灯を見つけてくれたので、混乱している部屋から眼鏡を探し出した。ビルの後ろにある緊急階段から（地震が起きた瞬間、ビル内の全ての電源が切断されたが、この階段の電気だけがついていて）出ていったら、外は避難している人で一杯で、公衆電話ボックスの前も長い列ができていた。妻と私は毛布と、パスポートと少しの現金を入れたカバンをもって、寒い風の中で立っていた。

夜がだんだん明けてきた。救急車の警笛も多くなってきた。道路の反対側に木と電柱が倒れ、その近くで建物が傾いたり、崩壊したり、傷ついている状況が少しずつ見えてくるようになった。幸いに、私たちが住んでいる尼崎国際留学生会館は地震の影響が殆どなかった。これほど強烈な大地震の中で全然動かないのは奇跡と言えるだろう。

三、天災か、人災か-----不思議な三日間

四時間以上の片付けをした後、私たちはやっとめちゃくちゃになった部屋に入れた。壊れたグラスを畳から取り、テレビの電源を入れた時（これも一つの奇跡である。地震後、神戸市、西宮、芦屋を初めとする兵庫県南部は長時間電気、水とガスが止まっていたため、たくさんの人は何十日間もきれいな水を飲むことができないし、風呂に入れなかった。しかし、私たちの建物はただ半日くらいの停電断水で済んだ）、テレビの報道画面にびっくりした。神戸市の上空は黒い煙が充満し、火があちこち燃えていた。各新聞の現地取材記者はヘリコプターで神戸を回って、被災状況を報告し、応援を呼びかけていた。消防隊は既に現場に行ったが、燃えている部屋に入ろうとする人を阻止するだけで、火を消すことはしなかった。火が風に乗ってどんどん蔓延して、アパートとビルを壊していく。燃えている建物の中に必ず何人か、或は何十人かがいて逃げられないことを考えても、私たちの心は痛む。妻と私は畳に座り込んで、悲しくて画面を見られない。叫びたくても声が出ない、立ちたくても立てない私たちの顔は涙が一杯だった。世界の先進国日本でこんなことが起きるなんて本当に信じられなかった。

神戸市の東灘区、灘区、中央区と長田区の火災が連なって、三日間も続いた。崩壊家屋の面積は140ヘクタール以上に達した。電気、水とガスが止まっていたため、50余りの避難所にいた25万人は新しい挑戦を迎えた。火災は最後に、海の水を汲み出して消されたが、神戸は廃墟になった。救済が遅れたことに対して、日本政府は原因が“断水”或は“経験不足”と解釈していた。（私は今でもわからない！中国だったら、何処でも見える消防用水管

はどうして日本に見あたらないか？ないわけではないが、地震後の自動断水によってそれも使えないのかな？）本当に不思議に思っている。少しの遅れで、数千人がなくなり、数万軒の建物が火災で崩壊して本当に許されるか？

三日以後 家族を失い、家をなくして生きている人々は、燃えてまだ熱い土を踏んで、ハンカチと箸を用いて家族の遺骨と財産を捜しに出かけた。私は日本人ではないが、その場を見て心が痛んでいた。日本の「朝日新聞」の社説が論評した。“天災は怖い、人災はもっと怖い”（第二次災害とも呼ばれている）と。天災であろうか、人災であろうかについて、私はコメントしたくない。しかし、一年前のアメリカロスアンジェルス大地震と比べてみたい。同じ7度の地震だが、アメリカ政府は地震後すぐに対策を考え、大量の軍用ヘリコプターまで動員した。また、最短時間内でけが人を崩壊した建物から救い出したため、60人余りしか亡くならなかった。それと比べると、阪神大地震で5400人以上が亡くなり、けが人は数え切れない。ほとんどの死亡者は救援が遅れたために亡くなったと考えてよい。（地震が起きたとき、華僑の林さんは6才の息子さんを抱いて倒れた家に生埋めになった。54時間後、林さんは自衛隊に救出されたが、息子さんは救い出されたときに既に死んでいた。どうして自衛隊ははやく来てくれないのか？1時間も早く来てくれれば息子は助かったのに、林さんは悲しくてたまらなかった。）資料によると、大量自衛隊員の派遣は震災50時間後の19日から行われたのである。スイス、フランスから行方不明者を探す救援隊が到着したが、既に遅かった。大多数の国家から緊急医療援助を提供する要求も日本政府に拒否された……。本当に不思議な国家と政府だね。この三日間のことは、いつまでも私の頭を占めて忘れられない。

四、家主さんを捜しに神戸へ

大地震後の三日間、私は殆ど毎日緊張と不安の中で過ごした。晩が来ると、余震が幽霊のようについて来る。ときには一晩に震度3以上の余震が数回起きた（大地震後の一週間、観測できる地震は700回余り起きた）。妻と私の避難箱も二つになり、少しでも状況がおかしいと思ったらすぐ家を出られる。会館一階のゲストルームが比較的に安全であるために、服を脱がずにそこで寝たときもあった。地震のせいで毎日緊張の日々が続いていたが、もう一つ不安なことが段々大きくなった。それは私たちの家主さん、74才の森田さん夫婦の安否である。森田さんが住んでいる難区は地震の中心であり、大きな火災も起きていたため沢山の建物が崩壊した。電話、警察、マスコミ（NHK教育台、安否確認などの震災ホットライン）……。あらゆる方法を尽くしたが、何も消息なかった。最後に、私たちは神戸へ捜しに行くことを決心した。19日の午前、私は妻が用意してくれた水と食料品をもって、自転車のタイヤに空気を入れて最も被災した神戸市へ出発した。阪急電車で普通20分の距離が3時間かかった。道路は殆ど壊れたし、神戸へいく人も多かったためである。また、途中で通った西宮市、芦屋市とだんだん被災が大きくなった。数多くの民間アパートが倒れ、電車の鉄道も全体にかなり曲がっていたため、時々遠回りをしなければならぬ。筆者は神戸へ親友を捜しに行く列に入って、ゆっくり神戸へ走っていった。心配して、疲れて厳しい顔をしている人々は大体水と食料品を持っていた。神戸からの列の中に、高齢者と子供は少なくない。非常に難しい状況だが、秩序と冷静さが保たれていたことに感心した。何千人も狭い道路を歩いているが、喧嘩と割り込みは、ほとんどなかった。避難者も普段と同じように、正しい礼儀を守っていた。一方しか通行できないときに、必ず譲り合うし、広い道路に行ってもできるだけ左を歩き、他の人や車は通れるようにする……。日本国民は忍耐強く、礼儀正しいと聞いたが、大地震で財産を失い、精神面でも打撃を受けたこのときにも相変わらず、“相手に迷惑をかけないように忍耐する”というふうに行動した。このように、大地震が起きても社会秩序と治安状況は終始良かったことに私は頭を下げた。

午後一時に神戸市内に着いた。二年間住んでいたアパートの家主さんの家まで行ってみたら、その惨状にびっくりした。高くて立派な二階建てビルは屋根しか残されていない。ビル前にあった、私の好きな柿の木も倒れたビルのかげで折れた。道路の向こう側の民間アパートは何も残らず廃墟になった。明らかに、ここで大きな火災が起きていた。これらを見て、私はますます不安になった。家主さんは大丈夫かな？私は急いで捜した。最後に一つの低い壁に一枚の紙を見つけた。そこには、私がよく知っている森田さんの字があった。“全員無事、東京へ避難に行った……”これを見ると、家主さんが無事で頑張っていることに喜びと感動のため私は涙が出た。私は後で、森田夫婦が倒れたビルの中に5時間も生き埋めになっていて救出されたことを知った。自分の命を惜しまず一生懸命消火器を使って火を阻止したのは、家主さんの後ろの宿舎に住んでいた神戸大学の青年学生たちだった。彼らがここに来た時、森田さんは力を尽くして面倒を見てくれた。今回の大地震で、彼らは恩返しとして、あらゆる方法を考えて森田さん一家を救いだした……。

これらの経過を聞いて、私は感動した。大自然の脅威と未知に嘆くが、人類が大災害の中で表した勇気と友情にも最高の感謝をあげたい。

五、後記

阪神大震災後一ヶ月以上経った。筆者はこの文章を書くときにまだ感動の気持ちでいっぱい。30日余の間、5441人が亡くなり、27万人がまだ避難所にいて困難な生活を送っている。が、神戸市は絶望していない、市民のみなさんも元気を出している。“神戸を復興するために団結しましょう”、“頑張ろう！神戸。”等のスローガンが至るところに見える。私の家主さん-森田さんは神戸から離れているが、将来、同じ所に新しいビルを建てて青年学生に住居を提供したいと私に電話してくれた。どれくらいかかるかと私が聞いたとき、森田さんはいつものユーモラスな口調で言った「そんなにからない、8000万円で済むでしょう。私は返せないかもしれないが、娘と息子がいるので大丈夫です。アッハハハ」。明るくて豪快な笑い声が電話の中で響く。75才の高齢の森田さんが地震で何もかもなくしたと聞いたとき、私は森田さんが何でも思ったとおり成功していくことを涙を流しながら祈った。一つの国家と民族がこのような楽観的で強い精神を持っているならば、どんな困難も克服できる、どんな奇跡も作れるだろう。

生きて、愛したい

梁 在映（男）韓国
神戸学院大学
（日本語訳：梁 在映）

1995, 1, 17日（火）早朝、いつものようにアルバイトを終えて軽い食事をした。そして3時半ごろになってベッドに入った。それから約2時間後、今までの私の人生で、経験したことのない、又、2度と経験したくないことを経験した。

夢でもなければ現実でもないように私の体は急に空中から落ちるような気がした。それから、数百個の爆弾が一度に爆発したような、ものすごい轟音と共に、私が寝ていたアパートが崩れ落ちるような感じがした。6畳くらいの私の部屋の白い壁が崩れ落ちてくるような気がしたときは、思わずアァーという悲鳴をあげていた。後で思ったことだが、悲鳴をあげたことは生れて始めてだったので、自分も信じられなかった。

それから目が覚め、一瞬のうちこれが地震だと気付いた。それでも部屋から外に逃げるべきか、部屋の中に居るべきか判断がつかなかった。多分その瞬間は頭がパニックになっていてどうしたらいいのかわからなかったのだろう。そして自分が生きていることに気がついた瞬間、下着姿で飛び上がるようにベッドから抜け出してズボンと上着を手さぐりで探しだし、走りながら服を着た。

4階の私の部屋から1階の玄関まで必死で逃げている間、廊下は逃げる人でいっぱいだった。みんなも必死で逃げていた。私も脇目も振らずに必死で逃げた。5階建ての古いアパートは今にも崩れ落ちそうだったから、人々があんなに慌てたのも当然だろう。

なるべく高い建物から離れた所まで行って、同じアパートに住んでいる友達を探したら、友達はそんな状態の中でもラジオを持ってきていた。それで気がついたのだが、非常用の懐中電灯とラジオくらいは常に用意しておいた方がいいと思った。

それから時間が経ち、夜が明けてくるにつれて、地震のつめ跡が見えてきた。部屋にお風呂が付いていない私が、いつも通っていたすぐ隣の銭湯はペチャンコになっていた。高くそびえていた煙突は、私の真上の部屋の壁にぶつかって、上の部分はそのまま落ちて、下の部分はとなりのタクシ会社の屋根の上に倒れかかっていた。

私が住んでいたアパートの向い側の10軒ほどの民家は一列に倒れていて、ひどいものだった。下敷きになっている人もいて、近所の人々は一所懸命に救出しようとしていた。私も手伝ったが、倒れかかっていた建物の中に這って入ったときは怖かった。心の中で私がこの建物の中から出るまで余震よ来なくてくれと願っていた。汗をかきながら動きまわったが、私でも人を助けることが出来ると思ったら、心のそこから喜びが湧いてきた。

しかし、時間が経っても地震の恐怖心は私から離れなかった。地震が起きてから2日が経っても、自分の部屋に入りたくなかった。2日目の夜はお腹が空いてきて、部屋の中にあるじゃがいもを食べたらいいと思ったが、部屋に入る勇気がなかった。勇気がなかったというより部屋に入るのがいやだった。

近所の中学校の運動場で崩れ落ちた家の板等を集めて、燃やしながら立っていると、誰が作ってもって来たのか知れないけれども、手から手にとお握りが配られた。私はその小さい一個のお握りから、大きい愛情を感じた。こ耳にはさんだことだが、そのお握りは、被害の少なかった人が避難所に居る人々のためにわざわざ作ってきたそうだった。

3日目、私は一時帰国することにした。今3年生である私がもう一年間頑張るためには、ここの非難所に居て、病気をしたりしたらいけないと思ったからだ。しかし、母国で1か月くらいゆっくりして帰ってきた時は、恥ずかしい思いで一杯だった。空港から家について、玄関のドアを明けたとき、まず私の目にはいったのは、知り合いからのメッセージだった。そこ

には私の安否を尋ねるたくさんのメッセージが私を待っていた。私が韓国に逃げている、誰も居ない私の部屋をみつめ、守っていたのはその愛情のこもったメッセージだった。それを見た瞬間、私は嬉しい気持ちと恥ずかしい気持ちで、涙がこぼれてきた。

私は恥ずかしい気持ちを慰めようとして、非難所で苦勞している人々にマッサージをしてあげようとした。しかしそのボランティアも1週間も経たないうちに、私は指をけがしてしまって、10日ほど病院に通うことになってしまった。

地震が起きて1ヵ月が過ぎても、救急車の音がするたびに、心が痛かった。しかし、今度の経験で勉強になったとこともたくさんあるだろう。いつ死が私を訪れても、後悔しないように今日を一所懸命に生きていく、そして、悔いが残らないように一所懸命愛すべき人を愛し、又、何よりも私の人生、私の与えられた時間を愛そうともう一度考えさせられた。

大地震の回顧

● 貴生（男）中国

神戸大学

（日本語訳：● 貴生）

この文章を書くのは、既に地震の3か月後である。桜が咲いて、また散っていく。雨の日、落ちた花を片付ける人もいないので、格別に寂しさを感じられる。私の心も落花のように、華々しいときは思いたくはないし、苦しい日々も振り返れない。が、留学生センターの瀬口先生にこの文集の中国語担当をしてほしいと言われた。何人かの留学生も原稿を私の机の上に置いていった。ワープロを打ちながら校正しているうちに、遠い遠い昔のように大地震のことが頭に浮かんできた……

■私の1・17地震体験

私が東京にいたとき、地震が多かった。事務所のビルが明らかに揺れていたのに、同僚たちは何事もないように、左手でファイルとコップを押えながら、右手で書いていた。休憩をとるとき、彼らは私に教えた。日本、特に関東地区では地震がよくある。しかし、東京の建物は耐震基準で作られているので、大した心配はいらない。

阪神大地震が起きた1月17日、私も最初はそう思っていた。台所の電気が落ちた音が耳に入ってくると同時に、部屋が猛烈に揺れていた。これが地震だと思って、頭に布団をかぶって動かないほうがいいと判断していた。しかし、地震を経験したことない妻は焦って、再三に外へ避難しようと催促した。いやながら、コートと毛布を拾って部屋を出た。意外に周りは非常に静かで、本当に自分の錯覚かなとも一瞬思った。強震が終わってから、部屋に戻って先生、友人に連絡してみたら、つながらない場合が多かったが、つながったら、みんなは「びっくりした、家がブランコのように揺れている……」と叫んだ。

電気が使えないし、ニュースは何も知らなかった。二人は横になって体罰を待つように余震と朝を持っていた。外の駐車場に車の音が聞こえてきたときに自分の車にも避難できることに気付き、再び毛布をもって車に逃げ込んだ。ラジオをつけてニュースを聞いてみたら、もう50人前後が地震で亡くなっていた。遥かに私の想像を越えたことが判ってきた。

朝、私は、東京から戻ってきて地震のため家に帰れなくなった友人を迎えに大倉山へ出かけた。途中、救急車と警察の車が絶えず通っていた。Toposの全壊と長田区の火災を見た私たちは驚いた。経験豊富な友人は今回多分100人以上が無くなっていると断定した。

今思い出すと、阪神大地震も友人の経験を遥かに越えた。生きている私たちは幸運を認めなければならない。長田区、灘区、東灘区の至るところに見える倒れたビルと火災でできた廃墟は十分に証明できる。何か所もの時計が5時46分に止まっていて、ここに前代未聞の大震災が起きたことを表している。

■中国留学生連絡センター

地震の時、私は神戸地区中国留学生聯誼会の会長だった。こんな大地震の中、何もせずに終わってしまうとみんなに怒られると思っていたが、最初の頃どこで何をするか全く判らなかった。この時、兵庫県日中友好協会副理事長の本田政春さんから、日中事務局の事務所を留学生の救災場所として使ってもいいという電話が入った。一番難しい場所の問題が解決されたので、そろそろ本気で動き出さなければならないと思って、聯誼会副会長の劉雨珍さん（神戸大学文学研究科博士課程）に連絡して対策を考え始めた。

交通はすべて止まっていて、余震も恐かった。本田さん、劉さんと私は日中に泊り込んで、行動方針を決めた。三日目、留学生金曄、孔軍、劉振軍、王立彬、王星、孫文娟などに連絡が取れた。金曄さん（神戸大学法学研究科博士課程）が初日にバイクに乗って避難場所へ向かって行くとき、私は感謝の気持ちで一杯だった。その後、康鍵、王可心、陳亦功、雷靖平、劉力などのみなさんも応援しに来てくれて、本当に助かった。避難留学生を激励、怪我して入院した中国人を見舞い、亡くなった留学生の家族を出迎え、あらゆる情報を集めて留学生に提供する……、疲れも知らない日夜だった。2月末、私たちは義援金と救援物資を募集することに乗り出した。留学生のために少しでも多くの援助をもらうために工夫した。

日中事務局は元町にあり、長い間、水とガスが来なかったため、ラーメンと缶詰は私たちのメイン食事になった。その間、KCC商会（株）を初めとするいろいろな団体と個人が私たちを応援してくださった。日中事務局のみなさんも毎日事務所に来て手伝ってくれた。私は寂しさを全然感じなかった。妻は毎日一緒に頑張っていたし、周りは熱心な人ばかりだった。「がんばれ！」或は「ありがとう」の一言を聞いても心が温まった。

バイクと自転車に乗って避難場所をまわるのは殆ど昼間であった。交通が混雑していたが、前後左右を注意して丁寧に走っていたため、危険はなかった。ある夜、車で長田区へ行った。小雨が降っていて、周りはすごく静かだった。一軒、かなり傾いている建物を通るとき、すぐ倒れそうな様子を見て加速して通った。五秒後、後ろから大きな倒れ音が聞こえてきた。ブレーキを踏んで振り返ると、先の建物が道路のまん中に倒れた。心臓がどきどきしていたため、車を止めてしばらく休憩した。これほど驚かされたのは生まれて初めてで、今だに思いだしても恥ずかしい。

この間、二回も追悼大会に参加した。一回目は大阪吹田で中国駐大阪総領事館の主催で、二回目は神戸大学主催で行われた。花の中に飾っている顔写真をみて、泣きたくてたまらなかった。昨日は一緒にお酒を飲んだり、遊んだりしていたのに、今日は別世界になった。考えてみると、人間の生と死はどこで分かれているのだろうか？ 若いのに、親族と友人を残して急いでこの世を去って一体どこに行って何をしているのだろうか？ 人生で本当に判らない謎だ。

ここで、私は特に友人の由良弥生さんに感謝したい。私たちの中国人留学生連絡センターが設立されてすぐに、

彼女は留学生の救済活動に参加したいと電話してくれた。最初、自転車に乗って西宮、宝塚、芦屋的各避難場所をまわってもらった。それが終わってから、三宮に来て留学生の怪我の状況を調べたり、義援金の募集と管理をしたりしてくれた。私たちは彼女を見て恥ずかしく思っていた。疲れていないときにも私たちは時々怠けていたが、彼女は疲れを知らず、与えられた仕事を何でも丁寧に積極的に完成した。何も栄誉、恩返しのことを考えていない。これに反して、一部分の留学生は他人の為になにもせずにもらうことばかりを考えたり、ほんの少ししかやっていないのに栄誉と利益を求めたりして、とんでもないと思う。

■後記

私は神戸が好き、東京から神戸に来た一日目から。北野、ハーバーランド、ポートアイランド、総合運動公園、幸せの村、王子公園のとりひげ……などは私の心に溶け込んだ。地震以後、これらの場所を一つずつ回ってみて、無残な姿が悲しくてたまらない。ここは私の人生の一駅だけだが、あまりにも突然の衝撃に気を落としてしまう。やはり異郷人！

もうすぐゴールデンウィークが来る。昔の繁華と現在の寂しさを悲しみ、将来の復興を祈るため、神戸の三宮、ポートアイランド、ハーバーランドに遊びに来る人々はきっと少なくない。郷愁を満載して中国から来る「鑑真号」はまだ開通していないと思うが、関西空港から来た外国人が神戸を離れないように祈る。この町は情、愛と魂が溢れている！

兵庫県南部地震体験

周世杰（男） 中国
神戸大学
（日本語訳：周世杰）

中学校の頃、地理の授業では「日本は島国であり、・・・火山、台風や地震が発生しやすい国である。」と学んでいた時、「日本って多難の国だなあ」と思っていました。

そして日本に来てからずっと神戸に住んでいて、度々テレビで地震に関するニュースを見ましたが、そのときは他人事と思い、まさか自分自身が経験できると思いませんでした。というのは、この何十年間関西地区では地震がなかったし、火山や津波などの自然災害もほとんどなかったからなのです。また、「神戸は気候が良く、とても住みやすい都市である。」ということをよく耳にしています。「地震がいつ、どこで起こるのかは予測できません。」と世間で言われ続けていますが、「地震なんて、考えたこともありませんよ。」と思っている関西人が少なくはありません。

そして、平成7年1月17日にその「まさか」が早朝の5時47分に密かにそして突然に私たちの身近に訪れてきました。その時、私と家内と子供3人はまだ熟睡していた状態で余りの揺れに目が覚めました。すぐに地震と分かりましたが、やはり初めての経験で頭の中は真っ白で何をすべきかが分かりませんでした。親の本能で私と家内が子供の体の上に伏せました。普段、部屋の中が乾燥しているため、タンスの上に水を置いていましたが、その時、その水が落ちて丸ごと家内と子供のからだにかかってしまいました。しばらくしたら、揺れがとまって、気が付いたら電気が切れました。部屋の中は真っ暗で、慌てて服を探せば、どれもこれも水だらけでした。そして、家の中にどこかで懐中電灯が転がっているはずでしたが、その場ではどうしても思い出せないの、ライターを付けました。

（後で懐中電灯を見つけましたが、やはり電池が切れていました。）他の部屋に乾いた服を探しにいった時、割れたガラスを踏んだことも、足に傷が付いたことも知らず、痛みも感じませんでした。外が騒ぎ始めて服を着てから、子供を毛布に包んで外に出ました。

真冬の朝は真っ暗でとても寒かったです。誰かが好意で車のライトを付けていました。4階に住んでいた方が子供と家内を誘って車の中に入らせてくれました。感謝の気持ちで胸がいっぱいでした。隣の人がラジオを持っていて、それによると長田区方面の被害が大きかったそうです。

7時ごろになると、薄明るくなって来ました。自分が住んでいた建物のすぐ近くに1cmほどのひびがあったことが分かりました。余震がたびたび発生してみんな不安で、隣人に「赤ちゃんのおむつ、哺乳瓶や食料品などを備えたほうがいいよ」と言われてから、「ああ、そうかそうか」と悟ったように、私は家に戻って割れガラス、落ちたものなどを片付けたり、備えるものを整理したりし始めました。その間家内は怖がってずっと子供と一緒に車の中にいました。

8時ごろにやっと家内と子供は家に戻りましたが、しばらくして近所の友達が来て避難するように誘ってくれました。行きたくないですが、「子供がいて万一何にかがあれば・・・」と思うと、やはり避難することにしました。

近所に「老人養護センター」があって、避難させてくれました。そしておなかがぺこぺこなので、スーパーに買い物にいきました。ところがパンや牛乳などすぐに食べれるものはほとんど売り切れていました。

テレビで朝から晩までずっと地震のニュースを放送していて、私の住んでいた北区はもっとも被害が軽く、神戸市中心部などは建物が崩壊したり、火災が発生したりして、すさまじい様子でした。なお、最初は死者何10人でしたが、見る見るうちに1000人、そして2000人になってしまいました。その時「地震」を経験したという実感が初めてわいてきました。交通、電話などのライフラインが地震で壊れて、あちこちに電話をしたが、ほとんど通じませんでした。その後二日間わたって避難していました。

地震の後、研究室のある良く知っている修士の1年生がなくなったことを知りました。テレビで見たり、他人から聞いたりして見知らぬ方の死去のニュースを知った時より、一層深い悲しみに包まれてしまうのであります。

地震から3ヶ月経って地震前の生活に戻りつつありますが、いまでは時々その当時以上の恐怖を感じます。それは「寝る時、頭のすぐ近くに置いていたタンスが倒れたら、またはガスが漏れてライターを付けた時に火災が起こったら・・・」と思う時であります。そしてベッドの揺れすら、地震だと思ってしまう後遺症もしばらく残るでしょう。

一方、今度の地震は私にとって貴重な体験であった同時に、大自然の力にそのすさまじさを知らされる良い機会でもありました。

男才
于大通



地震に関する出来事

匿名

(日本語訳：マルガリータ山田)

突然、大きい揺れと音に起こされた。なにが起こったのか分からずに、立とうとしたが、立てなかった。すごい力で物が動いていた。まだ、夜が明けていなかったもので、すべて真っ暗だった。落ち着き、明瞭な概念がすべて無意識のうちに混乱し、その時、死ぬと思った。

このように、私の人生の一番怖い20秒が過ぎた。この20秒で神戸の街全体の大部分が破壊され、約5500余人が亡くなった。ちょうど地震の3ヵ月前に東灘区、深江南町に引っ越してきたところだった。この住所を人に教えたと、皆は驚いた目で私を見る。死亡者が一番多い所だったからだ。地震が止んでから道に出た。柱が落ちてたり、アスファルトにひびが入っていたり、木造の家が壊れていた。私は助かったと感じた。私の家から200m離れたところにあった高速道路は転落していて、恐ろしかった。大勢の人たちはまだ家のがれきの下に埋まっていて、何人かは助けようとしていた。通じる公衆電話の前には長い列があった。こんなに広い地域をカバーできる消防車と救急車の数は不足していた。電車は無かったし、大部分の道は中断されていたし、交通はだめになっていた。我々は完全に、孤立してしまっていた。電気、水、ガス、電話は切れていた。運よく、ブラジルにいる家族には、彼らがニュースで惨事を知る前に、私が無事であることを知らせることができた。しかし、神戸に住んでいる友達や日本のいろいろな町に住んでいる友達には連絡がとれなかった。この地域に住んでいる人たちにとってもすごい経験だっただろう。家族、友達を亡くしたり、家、仕事場を失ったりしたため、生きるための様々な問題が起きた。私の場合、恐怖と無力感で精神的に傷害を起こしていると感じた。一人であったし、地震の時、なにをすればいいのかが分からず、身を守ってくれるものが何もないと感じた。

自然災害に直面しても常に、パニック状態にはならなかった。これは、日本人が受身的であるからであろう。このような国民性により、援助が遅くれたり、外国からの医者団とか救援物資の受け入れの遅れがあったのかもしれないが、これらのことが死亡者の数を増やしたと言えるだろう。多分、関西では地震がないと、皆確信を持っていたから、準備も不足していたと考えられる。

私は、西宮北口から大阪まで電車が通っているということが分かるまでの三日間、神戸に残った。深江駅から壊れていない部分、壊れた家で寸断されていないところは、線路の上を歩いた。リュックサックやカバンを背負って、悲しい静けさの中で、まるで戦争から逃げているような印象を受けた。歩き始めてから2時間後に西宮北口駅に着いた。それから大阪まで電車に乗った。

大地震が起こったが、大阪では皆普通通りの生活をしていた。吹田市にある関西留学生会館に19日の夜に着いた。日本にきた時の最初の六ヶ月間、このセンターに住んでいた。事務室の人たちは私のことをまだ覚えていて、すぐ部屋の用意をしてくださった。ひさしぶりに、お湯でシャワーを浴びることができた。食堂へ行ったが、非常に疲れ、ショック状態にあるということがその時分かった。あまり食べられず、急に、違う世界に入ったと感じた。そこの世界の人々は大きい声で笑ったり、話しをしたりしていた。ショック状態は、何日間も続いた。生まれて始めて、このような状態から出るのに精神安定剤を飲んだ。

研究室の友達は、仲間同士助け合うという意識をもって、私のアパートから物を取りだすのを手伝ってくれた。神戸大学の留学センターも食べ物や服などといった基本的な援助と情報などを提供して助けてくれた。

私にとって理解できなかったのは、研究室の指導教授の態度だった。サンプルがだめになったので、実験室では、研究を続けられない状態だった。またやり直す時間もなかったし、私にとっては（当時の交通状況では）神戸までの交通は不便だったし、実験も出来るような状態ではなかった。しかし、先生は私が2月にブラジルに戻るための許可を出してくださらなかった。予定の3月まで大阪に残るようにとおっしゃった。3月になって、状態がよくなれば、旅行でもすればよいというようなこともおっしゃった。しかし、私が避難先の寮で最後のレポートを書いていた時、先生から電話がかかってきて、毎日、研究室に顔を出すように

と言われた。大学から2時間半離れている場所に住んでいたことはどうでもよかったようだ。又、私がどのような気持ちになっているのかを気にせずに、ただこのようなことを命令された。実験が実行不可能でも、私は日本の政府から滞在費を貰っていることから、実験室へ行く義務があると明確におっしゃった。残念ながら先生の態度から、私は日本人の考え方と行動を知ることが出来た。神戸で地震がおこらなかったら、きっと、日本で生活した二年の間でこのようなことは見られなかっただろう。

針に刺される如く痛し

阪神大震災から数ヶ月が過ぎた。罹災地域は驚くべき速いスピードで再建され、回復されつつある。大地震による破壊の痕跡もどんどん消えていく。しかし、大地震の人々に与えた心身的な傷痕が消えるのは、恐らく大震災によってもたらされた物質的損害の回復よりも遥かに遅いであろう。私は今回の大震災の体験者の一人としてこのことを実感している。

大地震が発生した1月17日の早朝、どういうわけか、私は普段よりも早く、5時半頃に目が覚めた。そのままベッドの上に横たわっていたが、突然、あの地震が起きた。当時私は既にすっかり目が覚めていたので、揺れた瞬間に地震だと意識した。激しい振動が十数秒続いた後、一瞬収まったようになったので、本能的にベッドから転がり落ちて、机の下に潜ろうとした。が、ちょうどそのときに、机の上方部の固定本棚に置いてあった大きなテーブ・レコーダーが振動で落ちてきて、私の頭にぶつかった。激痛に耐えて、机の下に潜り込んだ。この時、二度目の激しい揺れが起こり、私は両手で机の足をぎゅっと握り締めた。激震が止んだ後、顔と床が血だらけになっていたことに気付いた。傷口は左の目のうえで、流れた血が目に入って、何も見えない。急いでティッシュ・ペーパーで目と顔を拭いて、服を着て外へ飛び出した。周りの人は傷口から血がまだ出ていることを教えてくれた。近くに病院があったので、私はすぐその病院に駆け込んだ。病院の正面玄関は地震で歪んでしまい、開けられなくなったため、止むなく地下道を通して建物の中に入った。

廊下一面あたりにガラスの破片が散乱し、何処からか水が流れ込んでいる。続々と怪我した人が入ってきているが、皆自主的に一列に並んで、黙々とお医者さんが順番に治療してくれるのを持っている。泣いて叫んだり、呻いたりする人は誰一人いなかった。この時私は日本人のこのような沈着冷静な態度に深い感銘を受けた。お医者さんは先ず私達に血止めの手当てを施し、暫く待ってから更にもう一度治療をしてくれた。私の順番が回ってきたときに、お医者さんが、今麻酔をかける余裕もないので、ちょっと我慢して下さいと言って、私を長いベンチの上に寝かせた。一人のお医者さんが両手で私の頭を持って、もう一人のお医者さんが傷口を縫い合わせてくれた。全部で5針縫ったが、正に正真正銘の「針に刺される如く病し」（「針扎似的痛」 — 中国語では激痛を譬える時に用いられる比喻である）。

地震の後、よく悪夢を見るようになった以外に、地震に対して大変敏感になった。殆どの人を感じられないほど軽微な地震でもすぐ分かる。最初は錯覚ではないかと疑っていたが、ラジオやテレビで確認したら、自分の感覚は錯覚を起こしていないことが分かった。昼夜問わず、微震があっただけでも殆ど全て感じ取ることができる。私が住んでいる部屋は道路に近いために、バスや大きなトラックが通過すると、部屋の振動を感じ、又地震かと恐れてしまう。

外国から来た留学生は、大多数の人は過去に地震の体験がなかったであろうと思う。このために、少しも地震に対する心理上の準備や、地震に備えるための物質的な準備はしていなかった。その故に、大地震が実際発生したときには、心身両面が受けるショックも更に大きいと、地震の後私はこのように思った。日本は地震多発国家であるため、外国から来た留学生は、大学に入ろうと語学学校に入ろうと、先ず受けるべき最初の授業は、日本の地震多発国としての実情に目を向け、地震に備える予防教育や訓練を行うことである。たとえそれは初歩的で、常識的な教育や訓練であってもよいであろう。

地震発生以来、私達留学生は、日本政府や各方面の暖かいご支援、ご援助を頂き、困難な時期を乗り越えることができた。各種の友好団体から罹災した留学生に対して、直ちに義援金が配られた。援助の対象は私のような軽い負傷者は含まれていないが、地震で亡くなられた方々を思うと、怪我はしたものの、元気で生きていることは、それだけでも幸運で幸せであると思う。

(匿名希望)

アラーの神よ、感謝します

匿名

1995年1月17日早朝、時刻は5時46分を指していた。神戸では非常に強い地震が感じられた。多くの人がまだ夢を見ている時間だった。私も同じく夢を見ていた。するとそれは世界の終わりだったのか、恐怖の感情が私を襲った。私は死ぬほど恐かった。目を開けて見ると、家が右に左に激しく揺れ、今にも崩れて私を生き埋めにしそうだった。その時は、どうか命をお助けくださいと祈ることしかできなかった。あの恐ろしい一瞬一瞬を私は生涯忘れることはできない。地震の後が大変な苦労だった。食糧も水も、ろくになかった。しかし、一番大切なことは、私がまだこうして私の周りの世界を見る事ができることなのだ。アラーの神よ、感謝します。